(財) 八尾市文化財調査研究会報告72

教 興 寺 跡

〈第１次調査・第２次調査〉

２００２年３月

財団法人　八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中心部にあたります。古くから人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でもそれらの先人が残した貴重な文化遺産が数多く遺存しております。

近年、都市開発が進み各種土木工事等が増加するなか、これらの文化財を破壊から守ること、また記録・保存し後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第であります。

この度、教興寺跡第１次調査(平成３年度)・第２次調査(平成４年度)の調査報告書を刊行する運びとなりました。教興寺は生駒山西麓に位置する飛鳥時代からの古代寺院であります。創建以来、幾度かの荒廃・再興を繰り返して今日に至る寺院で、その寺名は旧村名、さらに現在の地名にもなっております。

第１次調査では、教興寺関連遺物として飛鳥・奈良時代～近世の多量の屋瓦や、「和同開珎」が出土した他、下層からはまったく予期していなかった古墳も発見されました。さらに第２次調査では、遺跡内で初めて縄文時代の遺物包含層が確認されております。本書が学術研究の資料として、また文化財保護への啓発に広く活用されることを願うものであります。

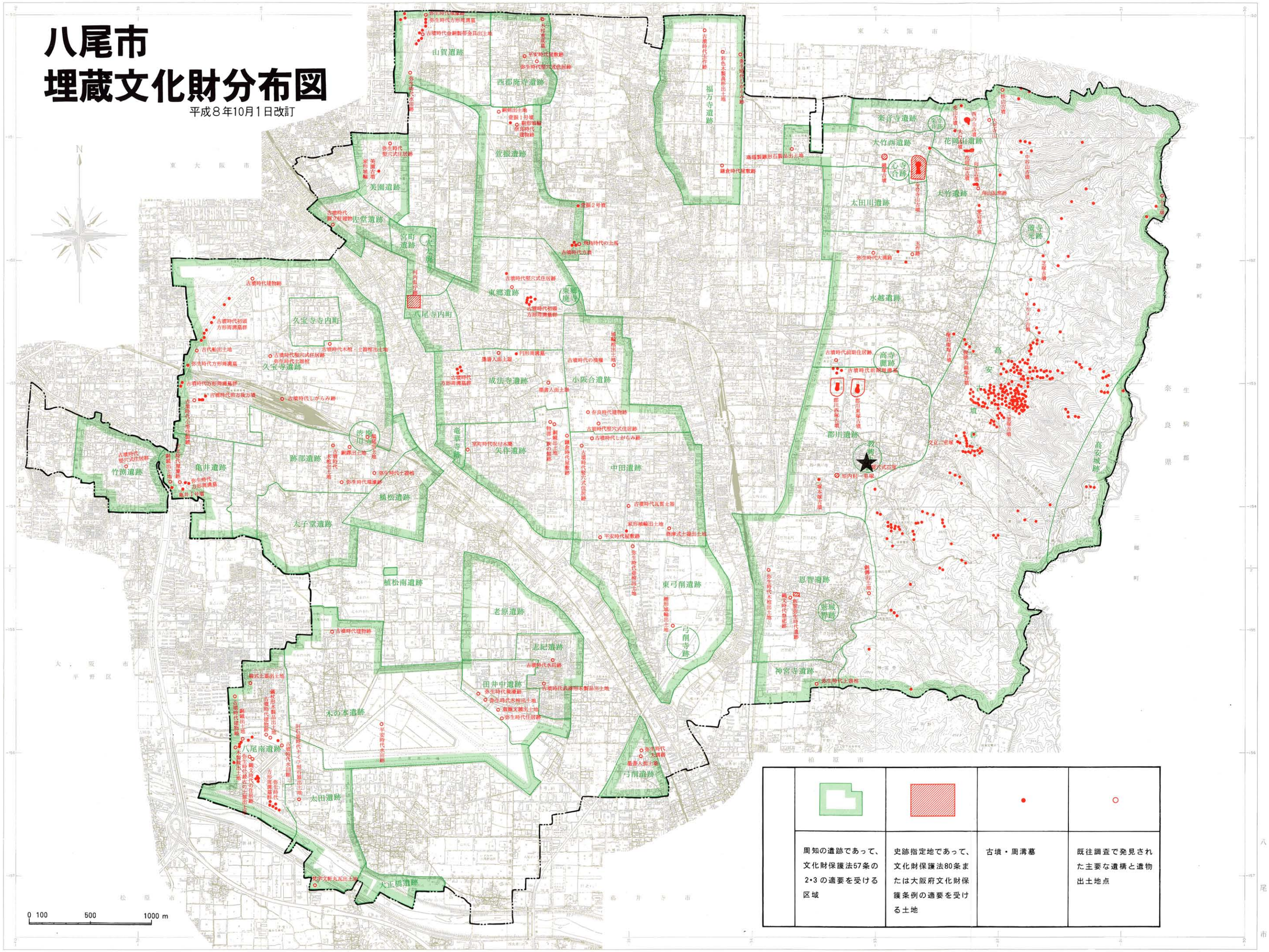
最後になりましたが、この発掘調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多大なる御理解と御協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財保護に一層の御理解・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成14年３月

財団法人　八尾市文化財調査研究会
理事長　**木　山　丈　司**

八尾市
埋蔵文化財分布図

平成８年10月１日改訂



例　　言

1．本書は、教興寺跡で実施した第１次調査（ＫＯ91－１）・第２次調査（ＫＯ92－２）の発掘調査報告書である。

1．本調査は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が実施したものである。

1．調査は当調査研究会　坪田真一が担当した。

1．各調査の要項は下記のとおりである。

	第１次調査（ＫＯ91－１）	第２次調査（ＫＯ92－２）
指示書番号	八教社文第109号　平成３年10月28日	八教社文第74号　平成４年８月10日
調　査　地	大阪府八尾市教興寺６丁目399番地	大阪府八尾市教興寺６丁目２番地
調査原因	寺池改修工事	寺池改修工事
調査委託者	八尾市	八尾市
調査期間	平成３年12月16日～平成４年１月24日	平成４年11月30日～平成４年12月22日
調査日数	23日	19日
調査面積	約400㎡	約190㎡
調査参加者	東　秀之・磯上サカエ・坂下　学・浜田千年・山内千恵子	坂下　学・浜田千年

1．内業整理には上記の他、岩本順子・田島和恵・都築聡子が参加し、各現地調査終了後に着手して平成13年12月をもって終了した。

1．本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行った。

1．本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の2,500分の１地形図（平成８年７月発行）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成８年10月１日改訂）を使用した。

1．本書で用いた標高の基準はT.P.（東京湾標準潮位）である。

1．本書で用いた方位は、現地実測図と2,500分の１地形図から起こした座標北を示している。

1．遺構のうち下記については略号で示した。

　土坑－ＳＫ　　溝－ＳＤ　　ピット－ＳＰ　　河川－ＮＲ

1．遺物実測図は、第２章（第１次調査）が１／4と１／1、第３章（第２次調査）が１／3である。また実測図断面は須恵器を黒、瓦を斜線（一部を除く）とし、他は白とした。

1．調査に際しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。

1．第１次調査で検出した竪穴式石室の石材については、八尾市立曙川小学校教諭　奥田　尚氏に鑑定をお願いし、御玉稿を賜った（第２章第４節）。

1．第１次調査で出土した瓦類については、上田　睦氏・近藤康司氏をはじめとする摂河泉古代寺院研究会の方々に実見していただく機会があり、御教示を得ました。記して感謝致します。

本　文　目　次

はしがき
例言
八尾市埋蔵文化財分布図
第１章　はじめに……1
第２章　第１次調査（ＫＯ91－１）……4
　第１節　調査方法……4
　第２節　基本層序……5
　第３節　検出遺構と出土遺物……5
　第４節　寺池１号墳の竪穴式石室の石材（奥田　尚）……36
第３章　第２次調査（ＫＯ92－２）……38
　第１節　調査方法……38
　第２節　基本層序……38
　第３節　検出遺構と出土遺物……40
第４章　まとめ……46
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　調査地位置図（Ｓ＝１／6000）……2
第２図　調査地設定図（Ｓ＝１／1000）……3
　<第１次調査>
第３図　地区割図（Ｓ＝１／500）……4
第４図　１区～６区平面・断面図（Ｓ＝平面１／200、断面１／60）……6
第５図　**樋101**平面・断面図（Ｓ＝１／30）……7
第６図　**樋102**西壁断面図（Ｓ＝１／40）……8
第７図　**樋103**西壁断面図（Ｓ＝１／40）……9
第８図　７区～10区平面・断面図（Ｓ＝平面１／200、断面１／60）……10
第９図　第１面遺構出土遺物（Ｓ＝１／４）……11
第10図　第①層出土遺物（Ｓ＝１／4、１／１）……12
第11図　第２面遺構出土遺物（Ｓ＝１／４）……14
第12図　**石組201**平面・断面図（Ｓ＝１／30）……15
第13図　出土軒丸瓦１（Ｓ＝１／４）……17
第14図　出土軒丸瓦２（Ｓ＝１／４）……18

第15図　出土軒丸瓦３（Ｓ＝１／４）……20
第16図　出土軒丸瓦４（Ｓ＝１／４）……21
第17図　出土軒平瓦（Ｓ＝１／４）……23
第18図　第①層出土丸瓦（Ｓ＝１／４）……25
第19図　第①層出土平瓦１（Ｓ＝１／４）……26
第20図　第①層出土平瓦２、他（Ｓ＝１／４）……27
第21図　第①層出土平瓦３（Ｓ＝１／４）……28
第22図　第②層・第⑤層出土瓦（Ｓ＝１／４）……29
第23図　古墳平面・断面図（Ｓ＝１／60）……33
第24図　古墳石室平面・断面図（Ｓ＝１／30）……34
第25図　古墳出土遺物（Ｓ＝１／４）……35
第26図　古墳石室の石材……37
<第２次調査>
第27図　調査区平面・断面図（Ｓ＝１／150、断面縦１／50）……39
第28図　ＳＤ１・ＮＲ１出土遺物（Ｓ＝１／３）……40
第29図　第③層出土遺物（Ｓ＝１／３）……41
第30図　第⑬層上面遺物出土状況（Ｓ＝１／20）……41
第31図　ＮＲ２・３出土遺物（Ｓ＝１／３）……42
第32図　第⑧～⑩層出土遺物（Ｓ＝１／３）……43
第33図　第⑩・⑪層出土遺物（Ｓ＝１／３）……44

表　目　次

表１　周辺の調査一覧表……1
表２　第２面土坑法量表……13
表３　第２面ピット法量表……16
表４　軒丸瓦一覧表……24
表５　軒平瓦一覧表……24
表６　丸瓦一覧表……30
表７　平瓦他一覧表……30
表８　基本層序対応表……38

写　真　目　次

<第１次調査>

写真１　寺池(南西から) …… 5

写真２　和同開珎出土状況……13

写真３　石室検出状況(南東から)……32

写真４　古墳掘削状況(北西から)……35

写真５　古墳調査状況(南東から)……36

<第２次調査>

写真６　調査地から東方を望む……38

写真７　調査状況(南から)……45

図　版　目　次

〈第１次調査〉

図版１　１・２区全景(西から)　　３～６区全景(南西から)

　　７・８区全景(南から)　　７区第１面(西から)

　　７区第２面(北西から)　　９・10区第２面(南から)

図版２　樋101全景(南から)

　　同上　木樋(東から)　　同上　断ち割り(南から)

図版３　突出部(西から)　　樋102全景(西から)

　　樋103全景(東から)　　樋103全景(西から)

　　７・８区間畦(石組201上部)南壁(北から)　　８・９区間畦南壁(北から)

図版４　石組201全景(東から)

　　同上(北から)　　同上　蓋石除去状況(東から)

図版５　古墳全景(南から)

　　石室全景(南東から)

図版６　石室全景(北から)

　　同上(南から)

図版７　石室北小口(南東から)

　　石室南小口(北西から)

図版８　石室全景(南東から)

　　同上(北東から)

図版９　石室盛土西壁部分(東から)

　　古墳周溝部分(南東から)

図版10　出土遺物　ＳＫ101、樋101、樋103、第①層、ＳＫ207
図版11　出土遺物　第①層、第⑤層
図版12　出土遺物　第①層、第②層
図版13　出土遺物　第①層、樋102、第⑤層
図版14　出土遺物　第①層、突出部
図版15　出土遺物　第①層
図版16　出土遺物　第①層
図版17　出土遺物　第⑤層、古墳
〈第２次調査〉
図版18　調査地全景(西から)
　　１・２区全景(西から)
図版19　１・２区全景(東から)
　　３区　ＳＤ１・２(東から)
図版20　ＮＲ１(西から)　　ＮＲ１(北から)
　　ＮＲ２(北西から)　　ＮＲ３(北東から)
　　ＮＲ２～３間(北西から)　　１区南壁(北から)
図版21　第⑬層上面土器出土状況(北から)
　　同上(東から)
図版22　出土遺物　ＮＲ１、第③層、ＮＲ２
図版23　出土遺物　ＮＲ２、ＮＲ３、第⑧層、第⑩層
図版24　出土遺物　第⑨層、第⑩層
図版25　出土遺物　第⑩層、第⑪層

第１章　はじめに

教興寺は、八尾市の東部、現在の行政区画の教興寺に存在したと推定される古代寺院であり、現在の教興寺（真言律宗西大寺末寺　獅子吼山大慈三昧院教興寺)付近に埋没していると考えられている。当該地は古代律令制下における区画では河内国高安郡にあたり、現在では寺名がそのまま行政区画名となっている。

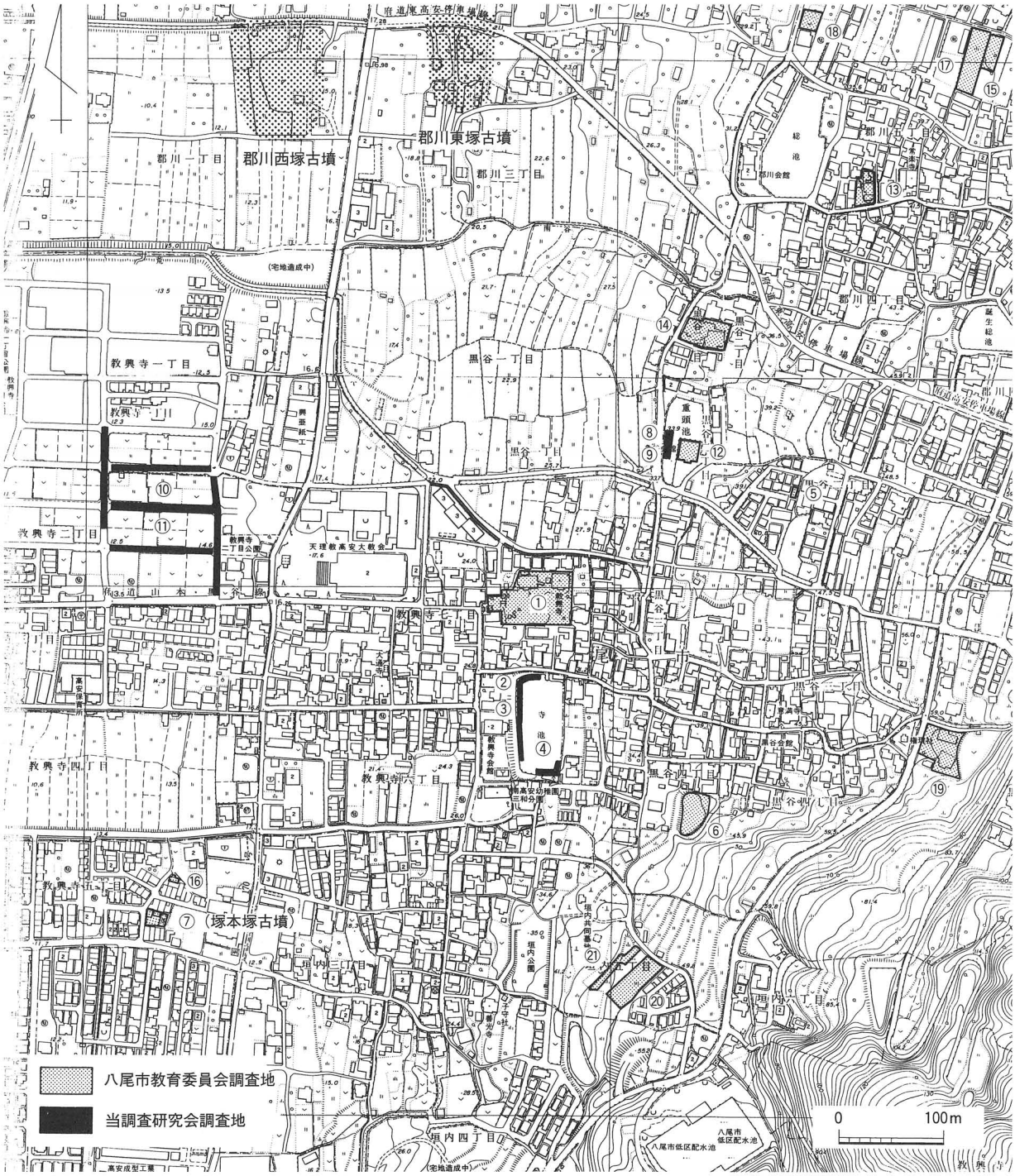
教興寺跡推定地は標高約20～30ｍを測り、生駒山西麓から平野部にかけて広がる郡川遺跡の範囲に含まれている。同地形上に立地する遺跡としては、北に水越遺跡、南には恩智遺跡が隣接している。また東方の生駒山西麓地域一帯には、古墳時代後期の群集墳を中心とする高安古墳群が広がっている。今回の調査地である溜池「寺池」は、地形図をみると生駒山西麓から北西方向にのびる丘陵の先端部に位置しているといえる。

郡川遺跡では八尾市教育委員会・当調査研究会により多くの調査が実施されている。これらの調査成果を概観すると、最も時代の遡る遺構としては、当調査区北西約350ｍの⑪で弥生時代前期、北約400ｍの⑭では弥生時代中期新段階の遺構が検出されている。また弥生時代後期では西約400ｍの⑯で土器埋納土坑、北東約750ｍの⑮で土坑、同約600ｍの⑬で遺物包含層が検出されている。なお今回の調査では縄文時代後期～晩期の遺物包含層が確認され、遺跡の時期を遡らせる結果となった。⑪では古墳時代前期～中期の水田が検出され生産域となっている。北東約300ｍの⑨や⑤では古墳時代中期～後期の集落が確認され、鞴羽口や鉄滓、韓式系土器の出土から、この一帯については渡来系氏族が関連する製鉄集落としての性格が指摘されており、北東約750ｍの⑰でも鞴羽口等の出土から７世紀代の鍛冶関連集落の存在が考えられている。南約250ｍの⑳では奈良時代～平安時代の遺物包含層が、また鎌倉時代では⑬で遺構が確認され、北東約700ｍの⑱では大規模な地業が行われているようである。近世では⑪での室町時代の石組井戸が特筆される。

表１　周辺の調査一覧表

番号	遺　跡　名	調査主体（略号）	調　査　年　月	文　　献	
①	教興寺跡	市教委	昭和58年２月	八尾市文化財調査報告９	1983
②	教興寺跡	市教委（91－326）	平成３年10月	八尾市文化財調査報告26	1992
③	教興寺跡	研究会（KO91－１）	平成３年12月～４年１月	今回報告	
④	教興寺跡	研究会（KO92－２）	平成４年11月～12月	今回報告	
⑤	郡川	市教委（63－193）	昭和63年９月	八尾市文化財調査報告19	1989
⑥	郡川	市教委（半銅池）	平成元年11月	八尾市文化財調査報告21	1990
⑦	郡川	市教委（89－224）	平成元年７月	八尾市文化財調査報告20	1990
⑧	郡川	市教委（89－399）	平成２年１月	八尾市文化財調査報告21	1990
⑨	郡川	研究会（KR89－１）	平成２年２月	財団法人八尾市文化財調査研究会報告57	1997
⑩	郡川	市教委（89－032）	平成元年８月	八尾市文化財調査報告21	1990
⑪	郡川	研究会（KR90－２）	平成２年５月～８月	財団法人八尾市文化財調査研究会報告64	1999
⑫	郡川	市教委（90－105）	平成２年５月	八尾市文化財調査報告23	1991
⑬	郡川	市教委（93－075）	平成５年７月～８月	八尾市文化財調査報告29	1994
⑭	郡川	市教委（96－275）	平成８年９月	八尾市文化財調査報告36	1997
⑮	郡川	市教委（96－691）	平成９年２月・８月	八尾市文化財調査報告38	1998
⑯	郡川	市教委（97－696）	平成10年３月	八尾市文化財調査報告40	1999
⑰	郡川	市教委（97－706）	平成10年４月	八尾市文化財調査報告40	1999
⑱	郡川	市教委（98－400）	平成10年12月	八尾市文化財調査報告40	1999
⑲	高安古墳群	市教委（89－537）	平成２年６月	八尾市文化財調査報告22	1991
⑳	高安古墳群	市教委（94－360）	平成６年10月	八尾市文化財調査報告31	1995
㉑	高安古墳群	市教委（95－586）	平成８年１月	八尾市文化財調査報告36	1997

調査主体　　市教委：八尾市教育委員会　　研究会：当調査研究会



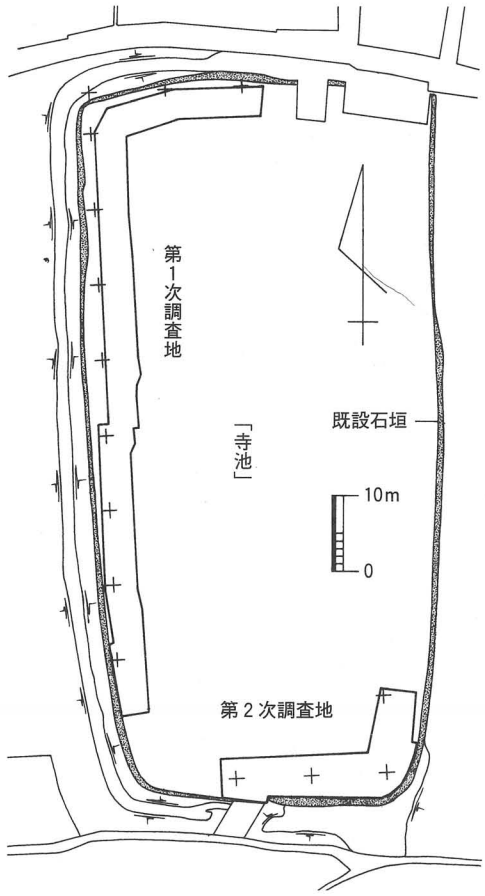
第１図　調査地位置図（Ｓ＝１/6000）

一方、高安古墳群としての性格からみると、北約600ｍには後に形成される群集墳高安古墳群の盟主墳といえる５世紀後半～６世紀初頭の前方後円墳、郡川西塚古墳・郡川東塚古墳が存在し、また西約400ｍの⑦には同時期頃の塚本塚古墳が、またその北の⑯でも後期古墳の周溝である可能性がある埴輪出土遺構が検出されている。南約200ｍの㉑では中世段階に削平された６世紀後半頃の横穴式石室をもつ古墳が検出されている他、東約400ｍの⑲では６世紀代の須恵器の出土や周辺に散在する巨石、⑤では須恵器や鉄釘の出土、⑰では凝灰岩片や鉄釘片の出土から、それぞれ古墳の存在が想定されている。

以上のように調査地の含まれる郡川遺跡は、南方の生駒山西麓に位置する恩智遺跡と同様、縄文時代には丘陵上に集落が形成され、以降連綿と続く集落遺跡であり、また高安古墳群の一画としても重要な位置を占めているといえる。

教興寺が登場する歴史時代をみると、生駒山西麓には古代よりの主要街道である東高野街道が南北に通っており、この街道沿いには古代寺院が連なって立地している。高安郡では当教興寺の他、北約0.8kmの高麗寺、北約2.4kmの心合寺があげられるが、教興寺は東高野街道と東西に通る信貴越道との交差点に位置し、同様に高麗寺は立石嶺道、心合寺は十三嶺道との交差点にあたり、いずれの寺院も交通の要所に位置していることがわかる。教興寺の建立については明確ではなく、渡来系氏族である秦氏や高安氏による建立が考えられている。[註1] 寺伝によると、当寺は聖徳太子の発願によって秦河勝が建立し、仏教興隆を願って教興寺と名付けたとされている。その後の歴史は、文献資料によると、文永６年(1269)～西大寺の叡尊により再建、永禄５年(1562)－河内守護畠山高政と三好義興・松永久秀との教興寺合戦により焼失、延宝５年(1677)－高野山の浄厳覚彦和尚により現教興寺の位置に復興、明治18年(1885)－暴風雨によりほぼ倒壊とあり、現在は仮本堂他が残っている。また周辺には今回の調査地である「寺池」の他「重頭(塔)池」・「大門池」といった池、「堂山」・「瓦田」・「寺北」・「堂ノ上」・「忍浄坊」といった小字名など、寺院に関連する地名が多くみられる。[註2] 考古学的にみると、教興寺周辺からはこれまでに飛鳥時代に遡る瓦が採集されている。そして昭和57年度には最初の発掘調査①が八尾市教育委員会により現教興寺境内で実施された。調査では古墳時代後期頃の土器が出土しており、寺院関連としては、永禄５年の戦火や明治18年の倒壊を窺わせる痕跡はみられたのの、創建期に遡るような遺構は検出されなかった。遺物でも平安～鎌倉時代や江戸時代の瓦の出土にとどまっている。

このような情勢下の平成３年、八尾市下水道部河川課から、八尾市教興寺６丁目399番地に位置する「寺池」改修工事の届出書が、八尾市教育委員会文化財室(現文化財課)に提出された。これを受けた同文化財室では、当該地が教興寺跡推定地内にあたることから、平成３年10月18日に遺構確認調査②を実施した。その結果、平安時代から近世に至る瓦や土器などの遺物、時期不明のピットが検出され、同文化財室では発掘調査が必要であると判断し、事業者にその旨を通知した。そして発掘調査を実施することが両者で合意され、調査にあたっては八尾市長・文化財室・当調査研究会の三者協定により、当調査研究会が主体となって平成３年12月16日から第１次調査を実施することとなった。この改修工事は、さらに翌平成４年度にも池の南東部(教興寺６丁目２番地)において実施されることとなったが、第１次調査の成果からみて当然発掘調査が必要であると判断され、同様の協定により平成４年11月30日から第２次調査を実施した。



第２図　調査地設定図(Ｓ＝１/1000)

第２章　第１次調査（ＫＯ91－１）

第１節　調査方法

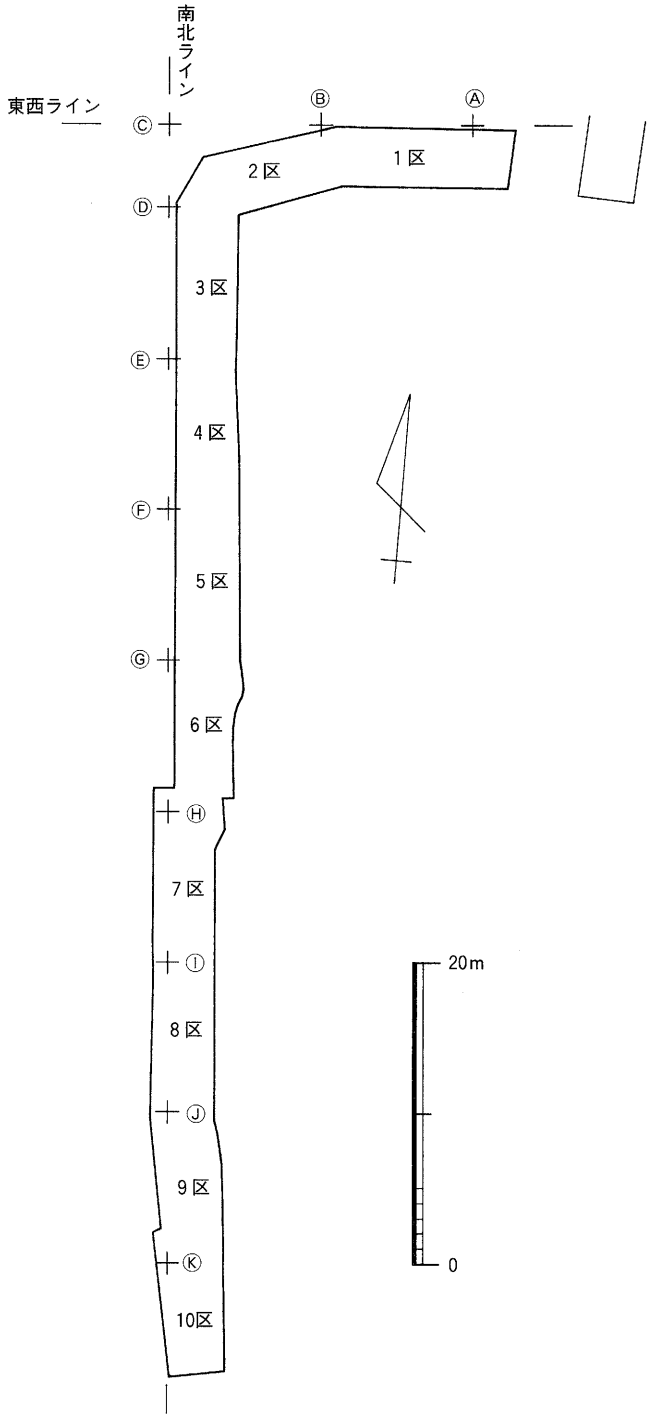
今回の調査は寺池改修工事に伴うもので、工事は老朽化した池の堤防を改築するためのものである。調査地は、平面長方形（南北約100ｍ×東西約45ｍ）を呈する池の北岸～西岸の既存堤防内側に沿ったＬ字型の細長いもので、調査面積は約400㎡（幅約４ｍ×延長約100ｍ）を測る。

地区割については、まず調査区平面形に合わせて調査区外側に直角のＬ字形に任意のラインを設定した（東西・南北ライン）。そしてこのライン上に10ｍ間隔で杭（Ⓐ～Ⓚ）を打設し、地区名は北東部から南へ順に１区～10区とした。ただし調査地屈曲部においてこの設定に不都合が生じたため、この部分の南北ライン上に位置するⒸ～Ⓓ間の距離は5.5ｍとなっている。なおこの南北ラインは座標北から西に約4.5度振っている。

調査は１区から順次実施した。調査に先立って池の溜水は抜かれおり、地表面は現在の池底にあたる。

掘削については、当初の計画では地表下約1.0ｍを人力掘削により調査を行う予定であった。しかし調査を開始すると、上層部分に近～現代の廃棄物等を含むヘドロ状を呈する池の堆積土が認められ、このため調査途中からこの部分約0.3ｍについては機械により掘削することとし、以下の約0.7ｍを人力掘削により調査を実施した。

土層断面については調査地外周にあたる北壁・西壁・１区東壁・10区南壁、そして各地区間に残した畦により観察した。



第３図　地区割図（Ｓ＝１/500）

第２節　基本層序

調査地の地表面は現在の池岸～池底にあたり、このため現地表面の標高は池の中央に向かって緩やかに低くなっている。調査範囲の大部分は池の堆積土(第①層)に占められ、北部の１・２区ではこの第①層が深くまで及んでいるため第②層以下は検出されなかった。ここでは南部での土層断面(**第８図**)を基本層序とする。なお基本層序は第○層と表記する。池の底部の調査であり、土層は全体にグライ化が著しい。

写真１　寺池(南西から)

第①層は池の堆積土で、粗粒砂～粘土がレンズ状に複雑に堆積しており、その堆積状況は地表面と同様におおむね池の中央に向かって下がる傾斜堆積を呈している。底部付近にはラミナが認められる。南部では標高約27.5mでフラットな池の底が認められたが、北部では標高27.1m以下に及んでいる。弥生時代後期以降の遺物を含んでおり、ほとんどが瓦である。上部にはごく最近までの廃棄物が特に北部調査区で多くみられた。第②～⑤層は３区以南の西部、つまり池の肩部にみられ、水平からやや東に下がる堆積状況で、全体に鉄分を多く含んでいる。第②層は池の堆積土の可能性があるが明確ではない。第③層・第④層は層相が類似し、近世までの遺物を含んでいる。第③層上面が第１面で標高約28.1mを測る。第⑤層は層厚20～40cmを測り、均質な層相でグライ化が著しい。層中では後述する**石組201**が検出されている。中世頃までの遺物を含んでおり、ほとんどが瓦である。第⑤層上面が第２面で、標高は北部で約28.1m、南部で約27.8mを測る。南部の９区～10区で確認した第⑥層は後述する**古墳**の墳丘盛土である可能性がある。第⑦層は層厚10～30cmを測り、９区南部～10区で確認した。弥生時代後期～古墳時代前期布留式期新相の遺物を含んでいる。第⑦層上面が第３面である。第⑧層の砂礫層は７区南部～９区南部で確認した。上面の標高は約27.5mを測る。10区での**古墳**断割りトレンチによると、標高約26.5m以下に層厚40cm以上を測る細粒砂層(第22図第20層)がみられるが、第⑧層はこの下部に存在するものと考えられる。第⑧層は、後述の第２次調査地で河川を埋没させた洪水層(土石流)に対応するものと考えられる。遺物は出土していない。

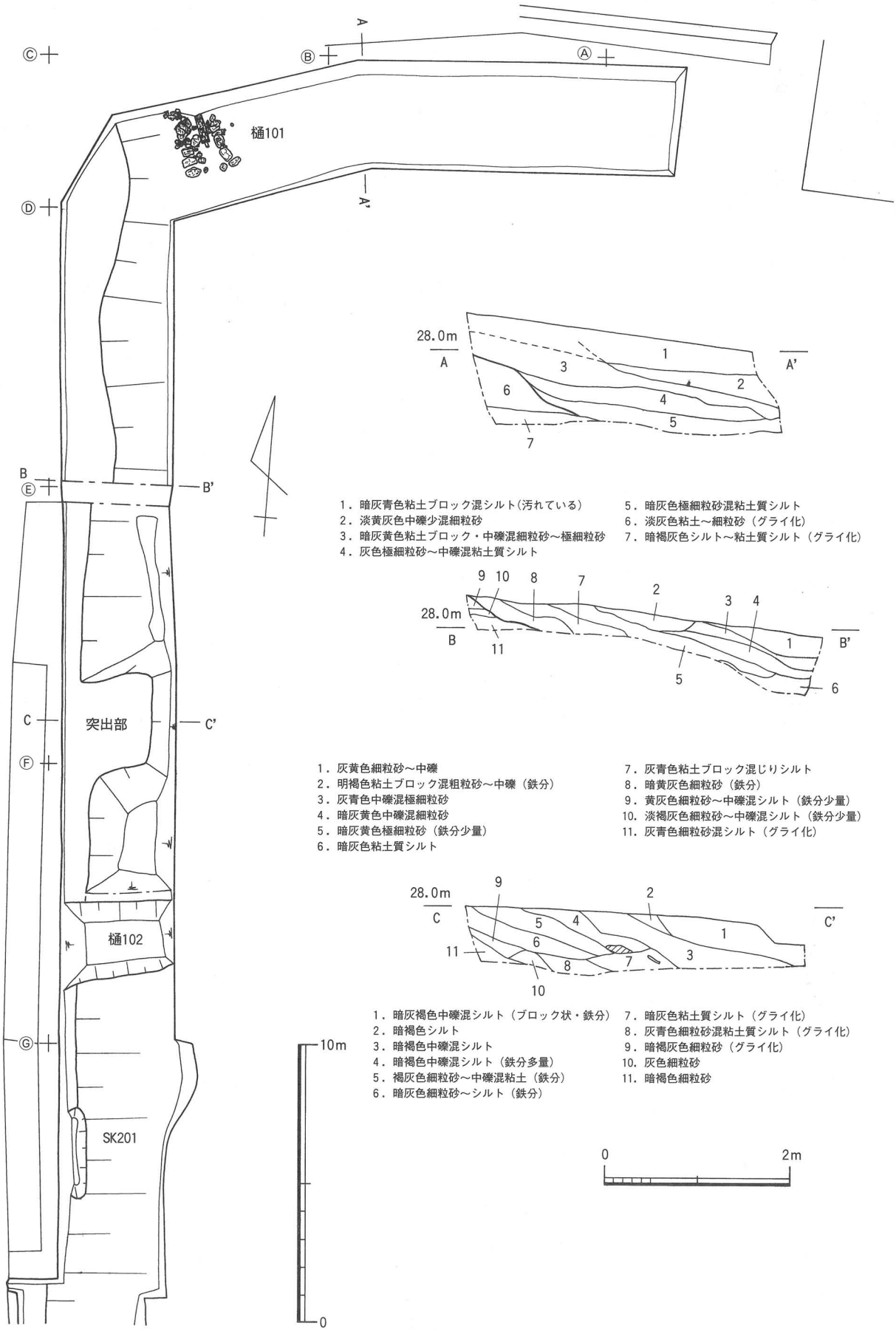
第３節　検出遺構と出土遺物

第１面

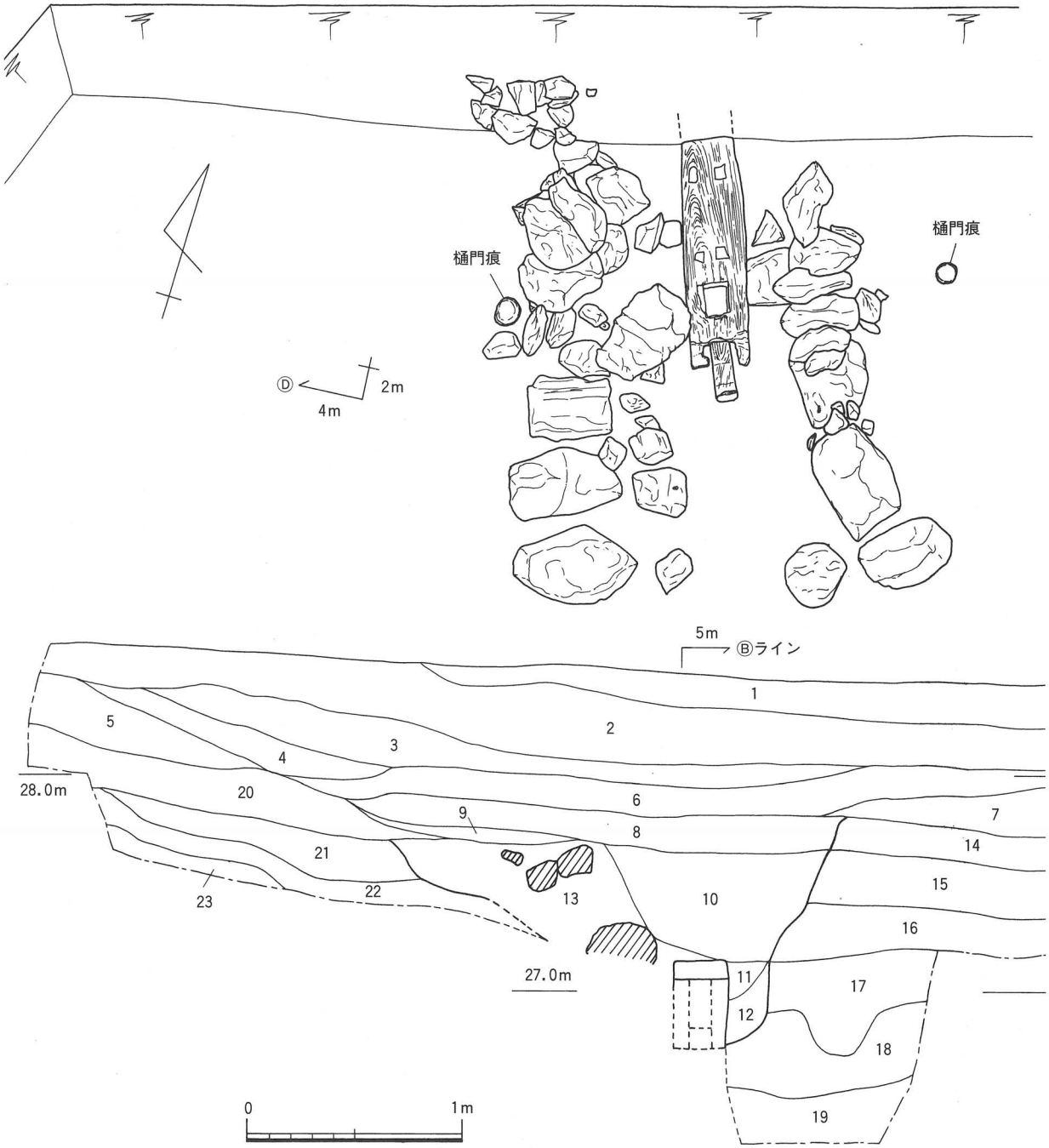
第１面は第③層上面にあたるが、面的に調査しえたのは７区のみであり、標高約28.1mで土坑１基(ＳＫ101)・ピット３個(ＳＰ101～103)を検出した。また池に付随する施設として樋３基(**樋**101～103)、及び池岸の突出部(**突出部**)を検出した。調査区東半部は第①層に占められるため、樋以外の遺構は調査区西壁際でのみ検出される。層位的に、また出土遺物からみても第１面の時期は近世頃と考えられる。

ＳＫ101

７区西壁際で東肩のみ検出した土坑で、西部は調査区外に続いている。検出部分は溝状を呈し、規模は南北4.6m・東西0.7m・深さ約12cmを測る。埋土は上から暗灰褐色シルト・黄褐灰色細粒



第４図　１区～６区平面・断面図（Ｓ＝平面１／200・断面１／60）



1．淡黄灰色細粒砂～極細粒砂
2．暗灰青色粘土ブロック混シルト(汚れている・鉄分)
3．明黄灰色細粒砂～極細粒砂
4．灰黄色中礫混極細粒砂～細粒砂
5．灰褐色粘土ブロック混シルト(汚れている)
6．暗灰黄色極細粒砂
7．明黄灰色極細粒砂～細粒砂
8．暗灰色中礫混極細粒砂
9．淡灰色極細粒砂
10．淡灰褐色中礫混極細粒砂～細粒砂
11．灰色粘土質シルト
12．暗灰褐色粘土質シルト
13．暗灰褐色中礫混粘土質シルト
14．淡灰色粘土質シルト～細粒砂(グライ化)
15．淡灰褐色中礫混粘土質シルト
16．暗灰色粘土質シルト～極細粒砂の互層
17．暗灰色中礫混粘土質シルト
18．灰色シルト～粘土質シルト
19．褐灰色細粒砂混粘土
20．灰色粗粒砂～粘土質シルト
21．灰黄褐色極細粒砂～粘土の互層
22．青灰色粘土質シルト(グライ化)
23．灰青色粘土～極細粒砂の互層(グライ化)

第５図　樋101平面・断面図(Ｓ＝１／30)

砂混シルト・淡黄灰色細粒砂混粘土質シルトで、全体に鉄分を多く含んでいる。遺物は丸瓦４点・平瓦20点が出土しており、丸瓦１点(１)、平瓦１点(２)を図化した。調整は共に凸面縄目タタキ後ナデ、凹面布目、端部はナデである。２はヘラケズリにより角を落としており、凹面の縁辺のみをナデている。２の凹面には、桶枠痕が縦方向に平行する段となって明瞭に認められる。

ＳＰ101～103

ＳＫ101北東部でまとまって検出された。平面形はＳＰ101･103が円形、ＳＰ102が楕円形を呈する。規模はＳＰ101が46×41cm・深さ10cm、ＳＰ102が33×20cm・深さ13cm、ＳＰ103が43×37cm・深さ10cmを測る。埋土はいずれも灰色粗粒砂混シルトで鉄分を含む。いずれのピットからも遺物は出土していない。

桶101

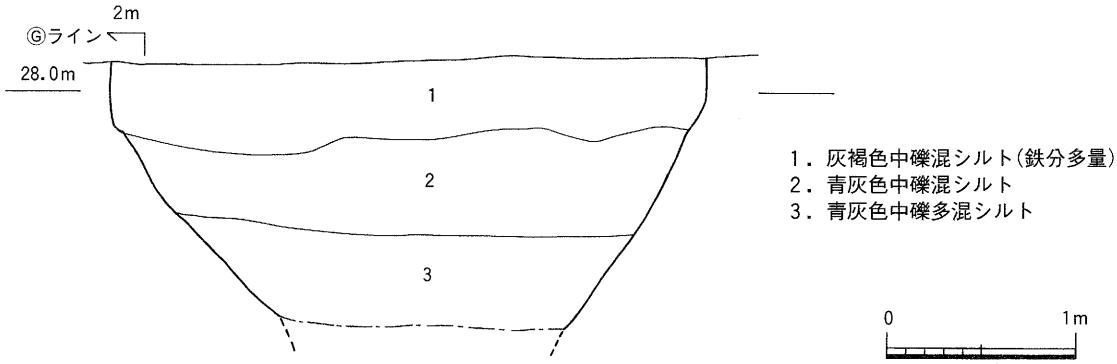
２区中央に位置し、木製の樋管と樋門の杭痕、また設営時の樋管補強の石材を検出した。樋管は検出長105cmで、北調査区外に続く。厚さ約８cmの板材を管状に組み合わせて釘で固定したもので、断面は横約30cm・縦約40cmの長方形を呈する。樋門は抜き取られており、樋管の両側に位置する杭の痕跡のみが確認された。杭は直径約11cmを測り、間隔は205cmを測る。補強石材は径10～60cmの石材を樋管の両側に石垣状に並べたものである。遺物は断割りの際に近世の平瓦１点、中世頃の平瓦10点の他、須恵器片が１点出土した。平瓦１点(３)を図化した。調整は凸面縄目タタキ、凹面布目、広端面ヘラケズリ、側端面ナデである。凹面の両側縁は幅２～４cmがナデられ布目が消されている。最大幅26.0cmを測る。

桶102

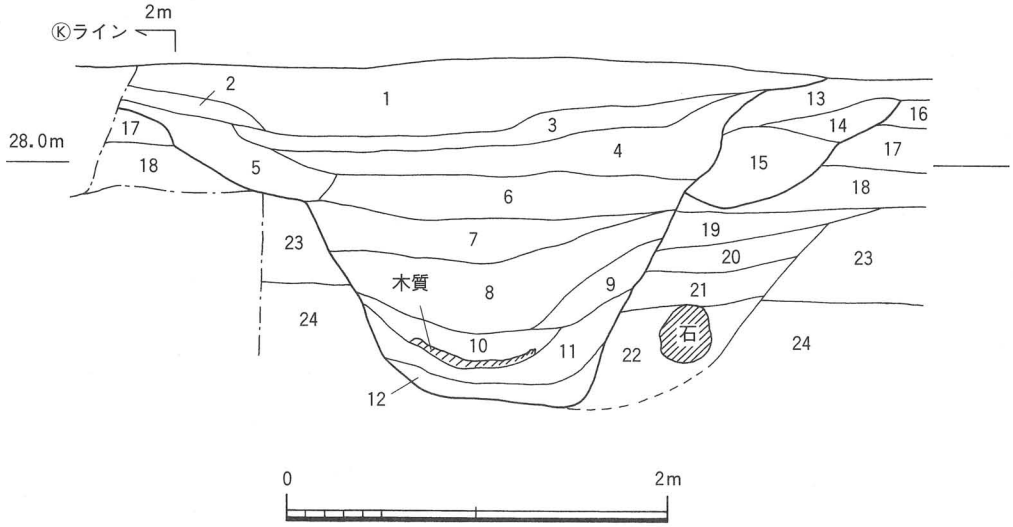
５区で検出したもので、調査時点でまだ機能していた鳥居状の樋門を有する樋の掘方である。完掘はしていない。幅2.5～3.0m・深さ1.5m以上を測り、断面形状は逆台形と思われる。埋土は上から灰褐色中礫混シルト(鉄分多量)・青灰色中礫混シルト(グライ化)・青灰色中礫多混シルト(グライ化)が水平に堆積している。埋土からは近世までの丸瓦３点・平瓦６点が出土した。

桶103

９区で検出した樋掘方で、樋管はすでに取り除かれている。底部には樋門となる２本の杭の下部のみが、また樋管を補強する石材が遺存している。掘方規模は、検出長約3.5m、深さ約1.8m、上幅は検出面で2.1～3.0m、西壁では約4.0m、下幅は約1.0mを測る。杭は直径約12cmを測る丸太材で、約1.4mの間隔で設置されており、底から70～80cmを残して上部が切り取られている。



第６図　桶102西壁断面図(Ｓ＝１／40)



1．暗黄灰色細粒砂混粘土質シルト
2．灰色シルト
3．灰褐色中礫混シルト
4．灰黄色極細粒砂～中礫混粘土(南部グライ化)
5．黄灰褐色極細粒砂～中礫混粘土
6．灰色極細粒砂混粘土(グライ化)
7．暗灰色極細粒砂混粘土(ブロック状で汚れている・グライ化)
8．暗灰黄色粘土混極細粒砂(ブロック状で汚れている・グライ化)
9．暗黄灰色粘土混極細粒砂(グライ化)
10．暗黄灰色細粒砂混粘土質シルト(グライ化・下部に植物)
11．暗灰青色細粒砂混粘土質シルト(グライ化)
12．褐色中礫混極細粒砂
13．灰黄色極細粒砂混シルト
14．灰黄色粘土混極細粒砂
15．灰褐色極細粒砂混粘土
16．暗灰黄色極細粒砂混シルト
17．灰黄色極細粒砂混シルト
18．褐灰色細粒砂混粘土質シルト
19．暗褐色細粒砂混粘土質シルト
20．暗灰青色粗粒砂混粘土質シルト
21．褐色粗粒砂混粘土質シルト
22．暗青灰色細粒砂混粘土質シルト
23．暗灰青色粗粒砂混粘土質シルト
24．暗灰色粗粒砂～中礫

第７図　樋103西壁断面図(Ｓ＝１／40)

遺物は中世頃の丸瓦１点、平瓦10点、瓦質製品１点、平安時代の瓦器椀１点、弥生時代後期～古墳時代前期の土器２点(４・５)の他、樋に使用されていたものかどうかは不明であるが鉄釘１点(６)が出土している。４は庄内式期古相頃に比定される甕で、外面は平行タタキ後ハケである。口径17.0cmを測る。５は弥生時代後期頃の甕底部である。６はやや鋭角に折れ曲がっている。断面方形を呈し、頭部はやや扁平になり拡張され、先端は尖り気味である。断面径0.7cm・復元長12.0cmを測る。

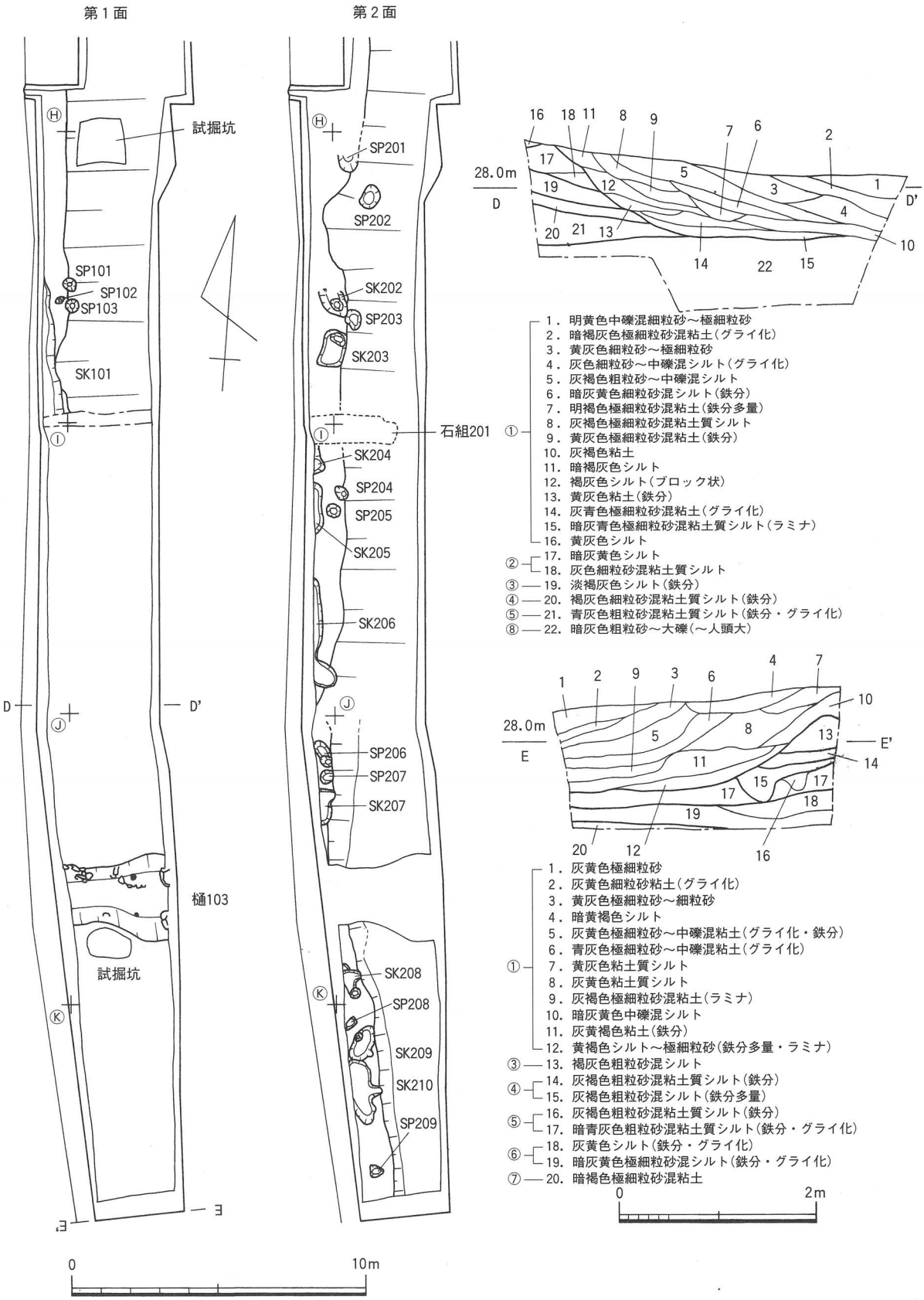
すでに機能を終えている**樋101・103**についても、**樋102**と同様に鳥居状の樋門を有する構造のものと考えられる。いずれも近世以降のものであろう。

突出部

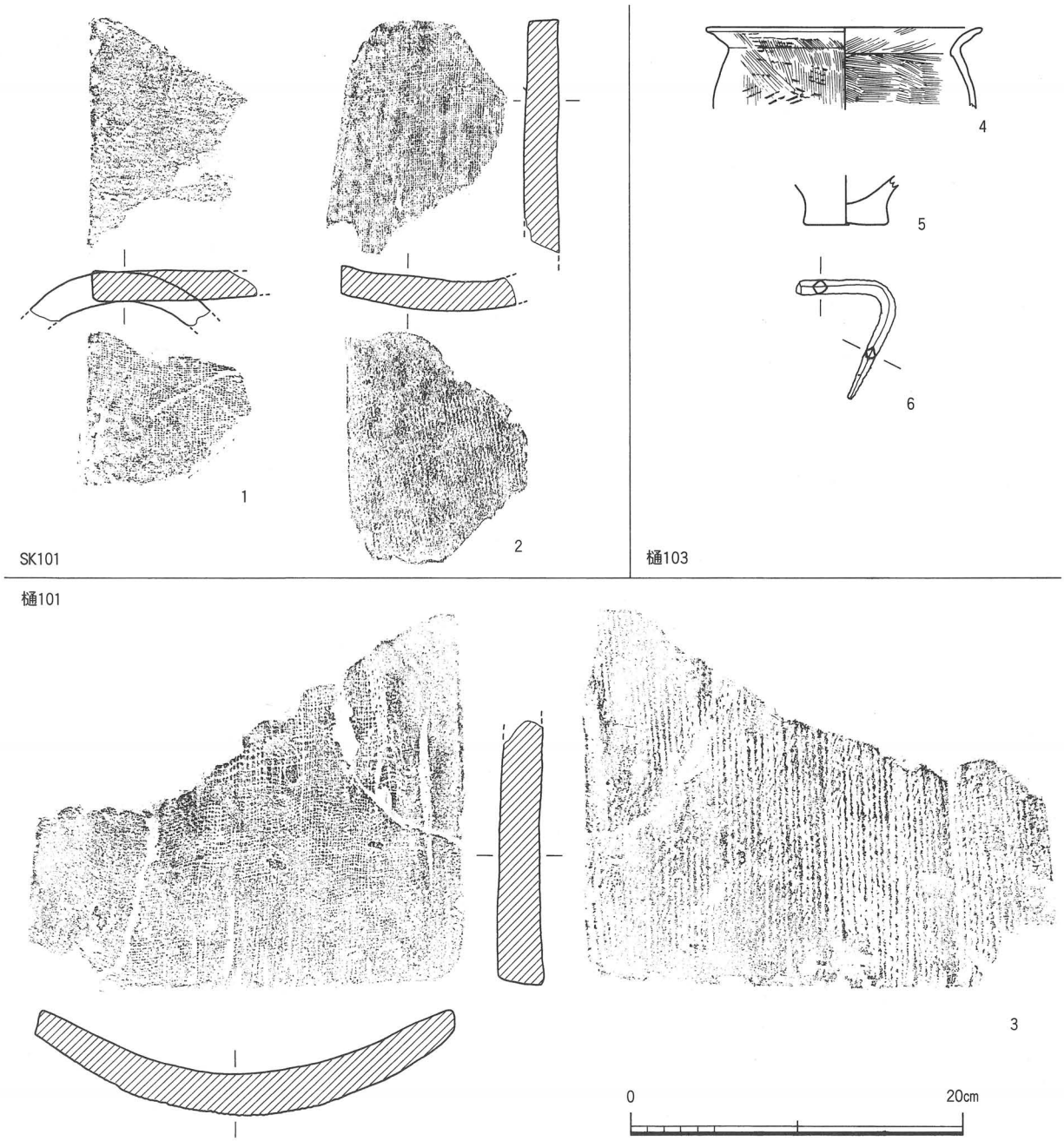
４区南部～５区北部にかけて池の肩が池内、つまり東に向かって方形に突出しており、この部分を**突出部**とした。規模は南北3.3m・東西2.5mを測り、南北断面は台形を成す。上面の標高は約28.4～27.9mを測り、東に緩やかに下がる。断ち割りによる断面観察では砂礫が優勢な土層が東に下がる堆積状況で、粘土ブロックを含む層がみられることから盛土により構築されたものと考えられる。上面にはピット等の遺構も認められず性格は不明である。遺物は、断ち割りトレンチから時期不明の土師器片５点・須恵器甕片１点の他、瓦では近世までの軒平瓦１点・丸瓦19点・平瓦56点が出土している。軒平瓦１点(50)を図化したが、詳細は後述する。

第①層出土遺物

池の堆積土である第①層には弥生時代後期以降の遺物が含まれている。７～21を図化した。なお瓦については後述する。土師器皿(７)は口径9.6cm・器高1.4cmを測る。調整はナデである。瓦器椀(８)は口径12.4cm・器高3.1cm・高台径4.0cmを測る。高台は低く粘土紐状を呈し、内面の圏

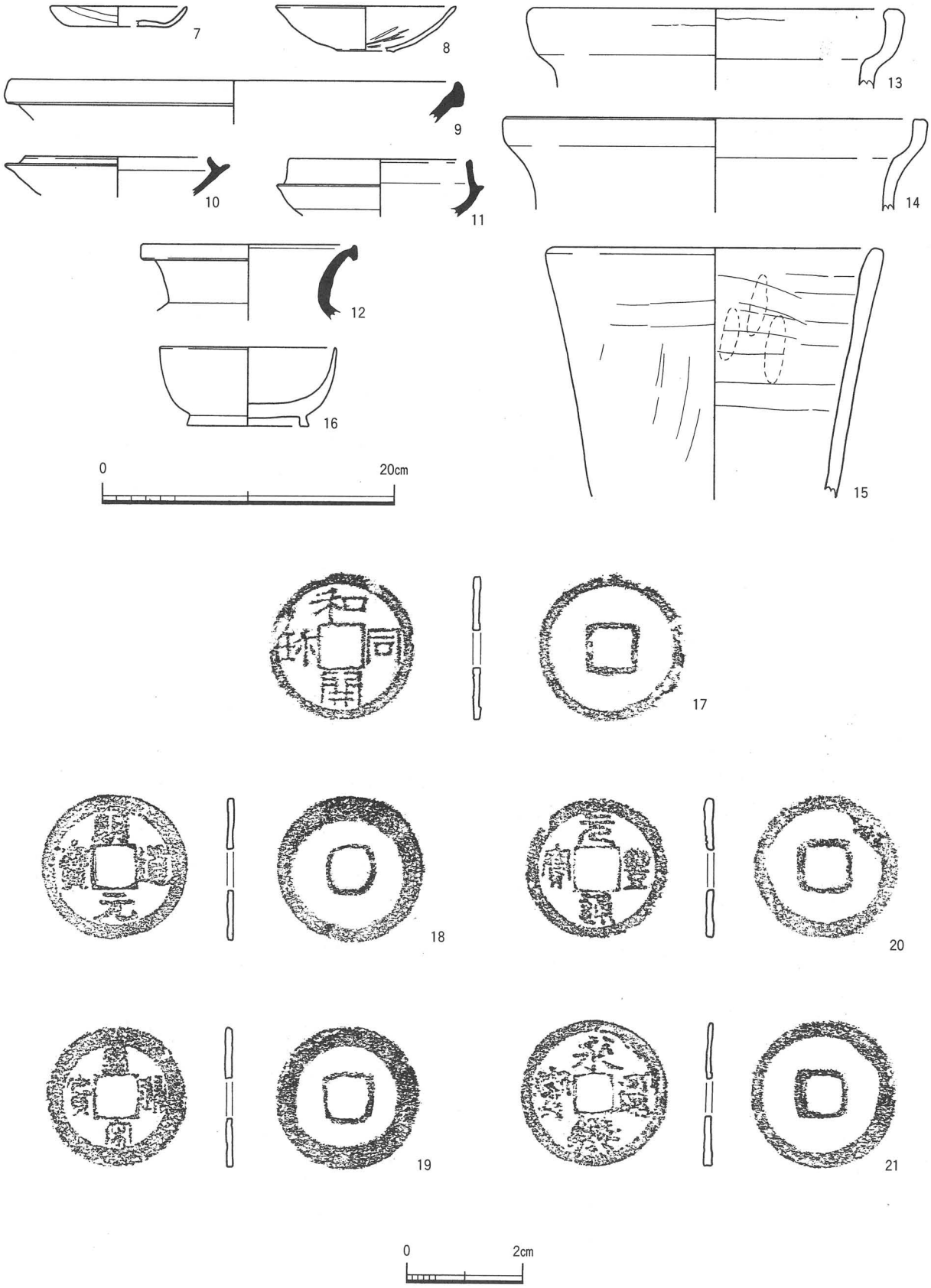


第８図　７区～10区平面・断面図（Ｓ＝平面１／200・断面１／60）



第９図　第１面遺構出土遺物（Ｓ＝１／４）

線状暗文は粗い。東播系須恵器鉢（９）と共に13世紀後半に比定される。須恵器杯身(10・11)は、10がＴＫ209型式で７世紀初頭頃、11がＴＫ208型式で５世紀中葉頃に比定される。須恵器壷(12)は褐灰色を呈する。６世紀代のものと考えられる。土管(13～15)は周辺での溜池等の調査で通有に認められる瓦質土管である。おそらく樋管に使用されていたものであろう。類例からみて13・14のような受け口状端部の反対側が、15のような直口状を呈すると思われる。14がやや焼成不良である。漆器椀(16)は約１／２が残存しており、口径12.1cm・器高5.4cmを測る。[註3]一部が火を受けている。銅銭は５点(17～21)出土した。[註4]17は「和同開珎」(708年初鋳・新和同)である。９区で東



第10図　第①層出土遺物（S＝1／4・1／1）

壁が崩落した際に偶然発見されたもので、八尾市域においては当時としては四例目の出土であった。18～20は北宋銭で、18は「明道元寶」(1032年初鋳)、19は「皇宋通寶」(1038年初鋳)、20は「元豊通寶」(1078年初鋳)である。21は明銭「永楽通宝」(1408年初鋳)である。出土地点は３区－16、４区－11、５区－18～20、７区－12、８区－８・21、９区－７・９・10・13～15・17である。

写真２　和同開珎出土状況

第２面

第⑤層上面で土坑10基(ＳＫ201～210)・ピット９個(ＳＰ201～209)を検出した。このうちＳＫ209・210については第④層上面からの遺構である。土坑・ピットは６～９区にみられるが、第１面と同様に調査区西壁際でのみ検出される。また第⑤層中で石組遺構１基(石組201)を検出した。出土遺物から第２面の時期は鎌倉時代以降と考えられ、この面を構成する第⑤層はこの時期の整地層の可能性がある。第⑤層からは多量の瓦が出土している。

ＳＫ201～210

ＳＫ202・203・208・209の底部にはピット状の窪みが認められることから、これらは柱穴の可能性がある。８区のＳＫ204～206の各埋土は同一層であり、西壁ではＳＫ204の上位に褐灰色細粒砂混粘土質シルト(グライ化)、その上層としてＳＫ205・206の上位に褐灰黄色粗粒砂混粘土質シルト(グライ化)がみられる。これらが遺構埋土の上層となるならば、本来は３基の土坑は一連の遺構であったと捉えられる。法量等は表２にまとめた。出土遺物は下記のとおりである。

ＳＫ202－中世頃の丸瓦１・平瓦１、須恵器杯身片１、須恵器片１。

ＳＫ203－近世の平瓦１、中世頃の平瓦４、古墳時代後期に比定される須恵器杯２。

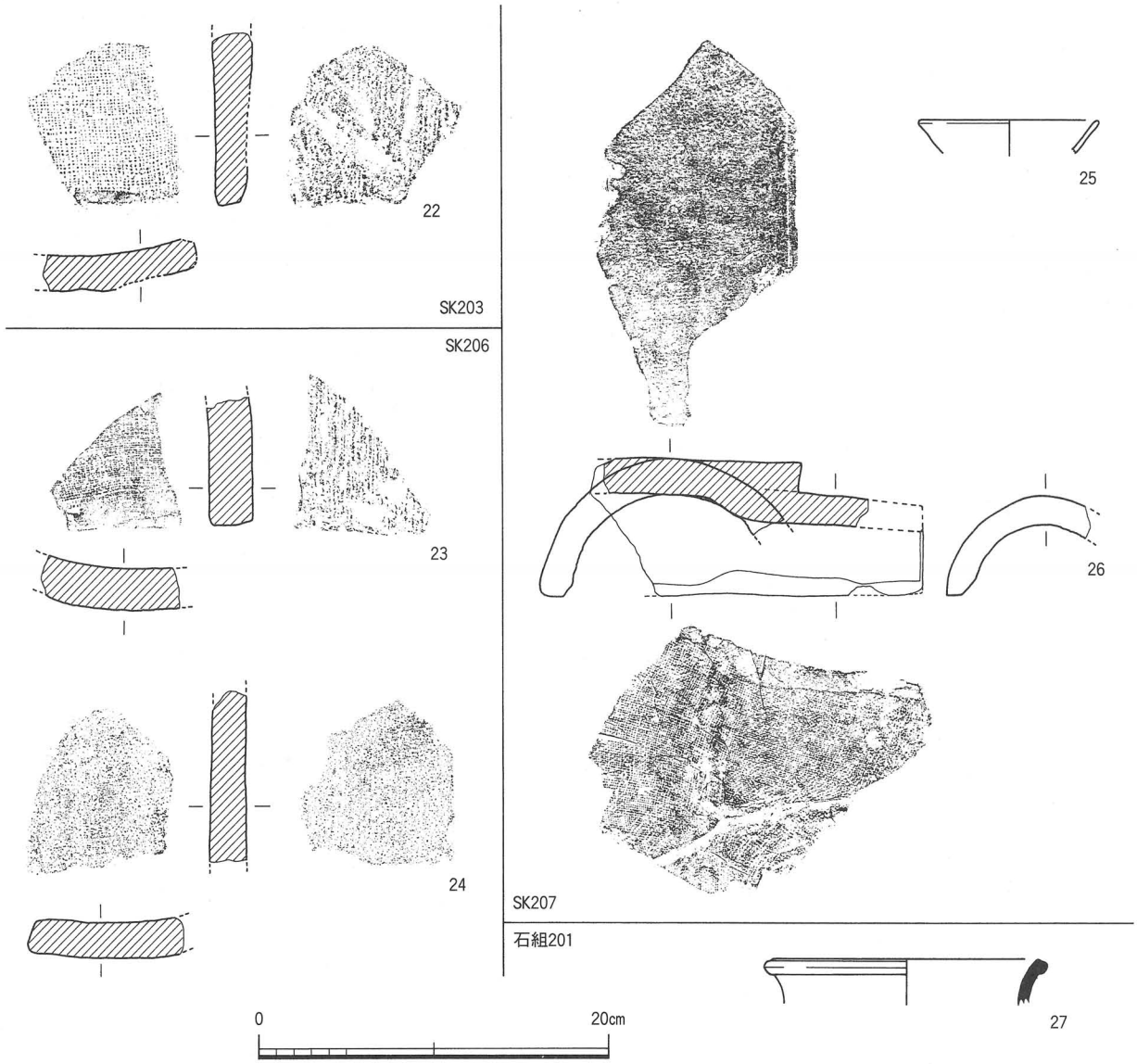
ＳＫ206－中世頃の平瓦２。

ＳＫ207－中世頃の丸瓦１・平瓦３、土師器片１、須恵器片１、鎌倉時代の瓦器椀１。

これらのうちＳＫ203の平瓦１点(22)、ＳＫ206の平瓦２点(23・24)、ＳＫ207の瓦器椀１点(25)、丸瓦１点(26)を図化した。22は凸面縄目タタキ、凹面布目で、凹面広端縁をナデている。23は凸面縄目タタキ、凹面布目、広端面ナデで、凹面広端縁をナデている。焼成良好で色調は褐色を呈する。24は凸面縄目タタキ、凹面布目、広端面ナデで、凹面広端縁をナデている。やや焼

表２　第２面土坑法量表(cm)

遺構名	地　区	平面形	径	深さ	埋　　土
ＳＫ201	６区	不　明	330×60以上	25	暗灰褐色シルト(鉄分)
ＳＫ202	７区	不　明	77×120以上	31	黄灰褐色粗粒砂混粘土質シルト(鉄分)
ＳＫ203	７区	長方形	123×80	8	〃
ＳＫ204	８区	不　明	100×33以上	23	灰黄色粗粒砂混粘土質シルト(鉄分)
ＳＫ205	８区	不　明	173×30以上	12	〃
ＳＫ206	８区	不　明	325×75以上	32	〃
ＳＫ207	９区	不　明	121×52以上	10	灰黄色粗粒砂混粘土質シルト
ＳＫ208	９区	不　明	129×63以上	16	灰黄色極細粒砂混粘土質シルト
ＳＫ209	９～10区	楕円形	131×78	23	暗灰褐色中礫混シルト
ＳＫ210	10区	不　明	228×116以上	12	〃



第11図　第２面遺構出土遺物（Ｓ＝１／４）

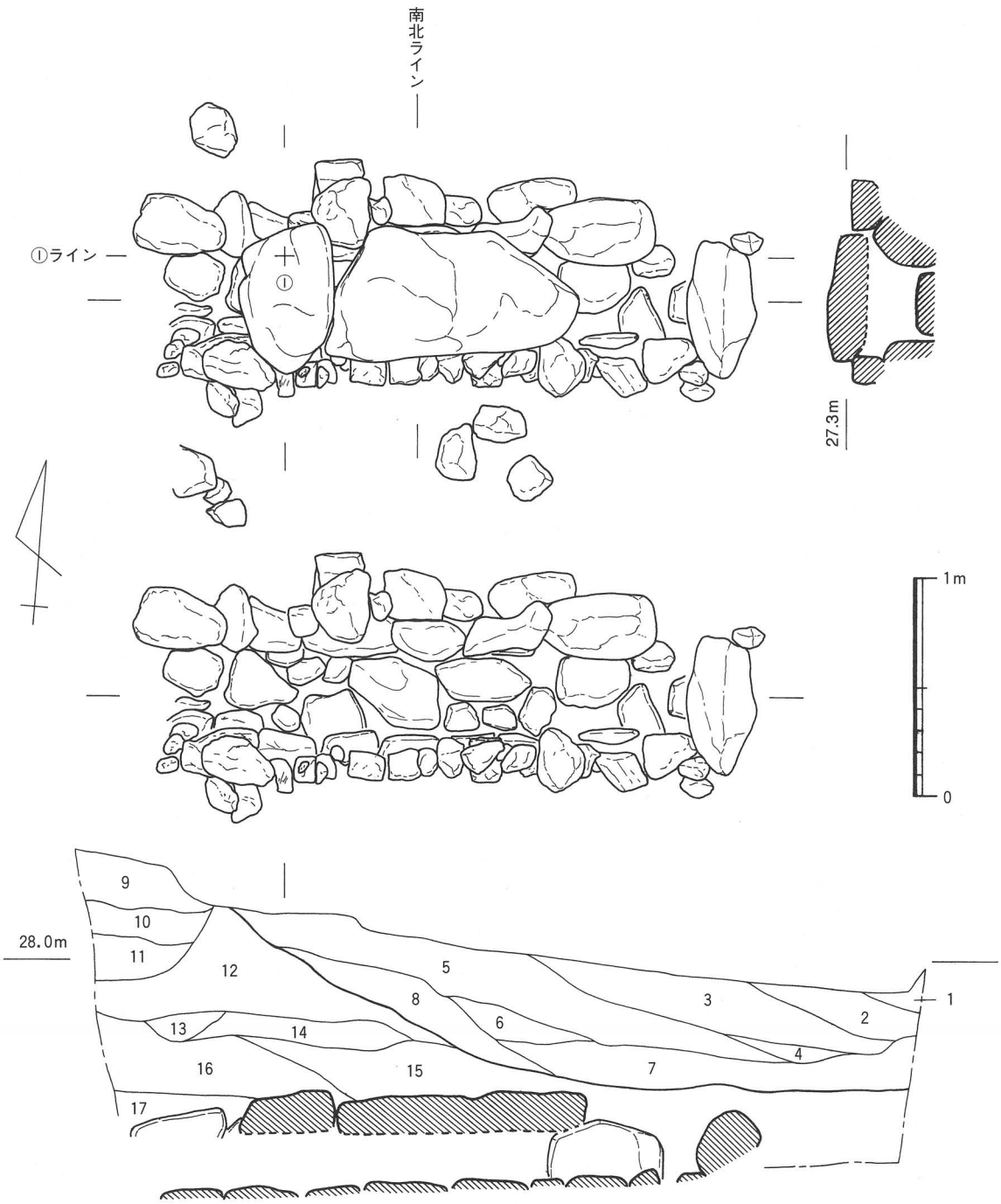
成不良で色調は淡褐色を呈する。25は小片のため口径はやや不確実で、調整等不明である。26は凸面の縄目タタキをほぼナデ消している。凹面は布目で、側縁はヘラケズリにより面取りされる。また玉縁に及ぶ紐痕が残る。成形では、玉縁部は胴部と連続し、肩部が剥離した部分の胴部外面には、粘土板切り取りの際に生じたと考えられる斜め方向の糸切り痕が認められる。

ＳＰ201～209

直線的に並ぶような企画性は認められず、また平面形や規模においても不統一で性格は不明である。池に関連するものならば柵に伴う杭列等が考えられる。各ピットから遺物は出土していない。法量等は**表３**にまとめた。

石組201

７区・８区の間で検出した。検出長約2.8mを測る東西方向に長い石組遺構で、西は調査区外に続いている。一見、竪穴式石室を思わせる施設である。構造は、径10～60cmの石材を約35cm間隔に２列２段に並べて北・南側壁とし、東側壁は１石である。この内側に径10～45cmの底石を敷



1．灰色細粒砂混粘土
2．灰黄色極細粒砂混粘土
3．暗褐色粗粒砂～中礫混シルト（鉄分）
4．灰色細粒砂混粘土
5．褐灰色粗粒砂～中礫混シルト（鉄分多量）
6．灰褐色細粒砂混粘土（鉄分多量）
7．暗灰色極細粒砂混粘土
8．灰黄色極細粒砂混粘土（ブロック状）
9．暗灰黄色シルト
10．灰色シルト
11．暗灰褐色シルト
（9～11：ＳＫ101）
12．暗褐灰色中粒砂混粘土質シルト（鉄分多量）
13．暗灰黄色粘土混中砂（鉄分）
14．明灰青色細粒砂混粘土質シルト（グライ化）
15．暗灰色細粒砂混粘土質シルト（グライ化）
16．青灰色細粒砂混粘土質シルト（グライ化）
17．暗灰色細粒砂混粘土質シルト（グライ化）

第12図　石組201平面・断面図（Ｓ＝１／30）

き詰め、側壁間に蓋石を架けて、内部を空洞にするものである。構築の順序では底石敷設が先行している。石材はいずれも平坦面を内側に向けており、特に底石ではそれが顕著に認められる。なお北側壁の東端には石材が存在しない。蓋石は２石が遺存しており、東の石は南北60×東西

表３　第２面ピット法量表(cm)

遺構名	地　区	平面形	径	深さ	埋　　土
ＳＰ201	７区	不　明	70×50以上	33	黄灰褐色粗粒砂混粘土質シルト(鉄分)
ＳＰ202	７区	楕円形	85×59	18	〃
ＳＰ203	７区	不定形	67×54	17	〃
ＳＰ204	８区	楕円形	50×36	24	明褐色極細粒砂混粘土質シルト(鉄分)
ＳＰ205	８区	円　形	47×39	12	〃
ＳＰ206	９区	楕円形	99×43	43	灰黄色粗粒砂混粘土質シルト
ＳＰ207	９区	円　形	43×43	5	〃
ＳＰ208	９区	楕円形	44×25	30	灰黄色極細粒砂混粘土質シルト
ＳＰ209	10区	不定形	42×35	15	〃

120cm・厚さ約10cmの長大な板状の石が使用されている。内部空間の高さは約20cmを測る。底石の上面のレベルは西が若干低くなっている。当遺構の性格は明確ではないが、樋・暗渠といった導水施設が考えられる。この場合、北側壁東端の石材欠落部分が取水口となろう。第⑤層中で検出されたもので、掘方が認められないことから、整地の際に構築されたものか、あるいは逆に廃絶されたものと捉えられるが、明確ではない。遺物は内部から中世頃の丸瓦２点・平瓦２点、古墳時代後期に比定される須恵器杯身１点・壷１点(27)が出土した。また蓋石上面(第⑤層中)で中世頃の平瓦１点(83)が出土している。27は口縁端部を外方に肥厚させる壺で、外面に灰が被る。口径16.2cmを測る。６世紀代のものと考えられる。83については後述する。

出土瓦

調査では多量の瓦が出土しており、総点数は約1300点を数える。特に二次堆積である池の堆積土の第①層、及び包含層である第⑤層からのものが多くを占め、それぞれ976点・185点を数える。第①層からの出土量では６区以南が特に多い。ここではすべての軒丸瓦・軒平瓦、及び第①層・第②層・第⑤層からの出土瓦類についてまとめて扱う(28～85)。

文様から軒丸瓦は６種類(Ⅰ～Ⅵ類)、軒平瓦は２種類(Ⅰ・Ⅱ類)に分類した。

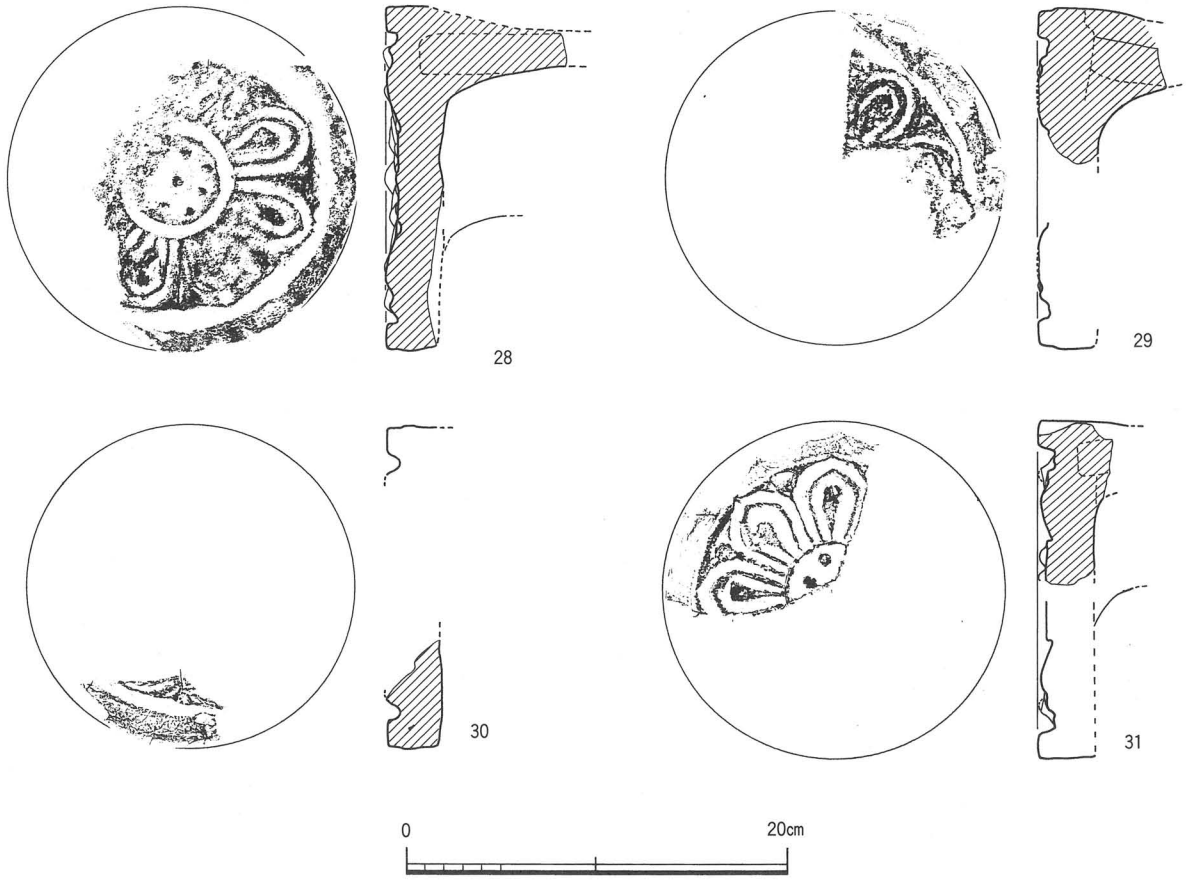
◆軒丸瓦ＩＡ類［重弁八弁蓮華文］(28～30)

28は瓦当径18.0cm・瓦当厚2.2cmを測る。周縁は素文の直立縁で、外面に段を成している。幅1.3cm・高さ0.7cmを測り、高さでは中高縁に分類される。花弁と中房は幅0.6cmの凹線により画されている。中房は直径4.9cm・高さ0.2cmを測り、１＋８の蓮子を方形に配している。花弁は幅約0.5cm・高さ0.1～0.4cmを測る断面三角形の隆起線により表現され、先端が尖り最も高くなる。長さ3.8～4.3cm・幅2.7cmを測る。子葉は肉厚で花弁よりも高く盛り上がり、先端は丸い。長さ3.0cm・幅1.3cmを測る。間弁は楔形で連続し、凹線まで伸びて花弁を区画するもので、頂部は尖る。丸瓦部は厚さ1.9cmを測る。調整は丸瓦接合部分内面が横方向のナデ、丸瓦部凹面布目で、他は摩滅のため不明である。色調は灰色で、断面は灰黄色である。胎土は密で角閃石を多く含み、0.3cm以下の砂粒を多く含む。焼成はやや不良。なお子葉の一枚に頂部の潰れが認められる。

29は中房周囲の凹線がわずかに確認でき、文様の特徴や法量からみてＩＡ類とした。28より厚手であるが、色調・胎土・焼成は類似している。

30はＩＢ類の可能性もあるが、間弁の特徴からＩＡ類とした。28・29より砂粒を多く含み、焼成が良好で、この点ではＩＢ類(31)に類似する。

ＩＡ類は、『八尾市史』に掲載されている教興寺出土資料(大通寺所蔵)と同意匠である。[註5]



第13図　出土軒丸瓦１（Ｓ＝１／４）

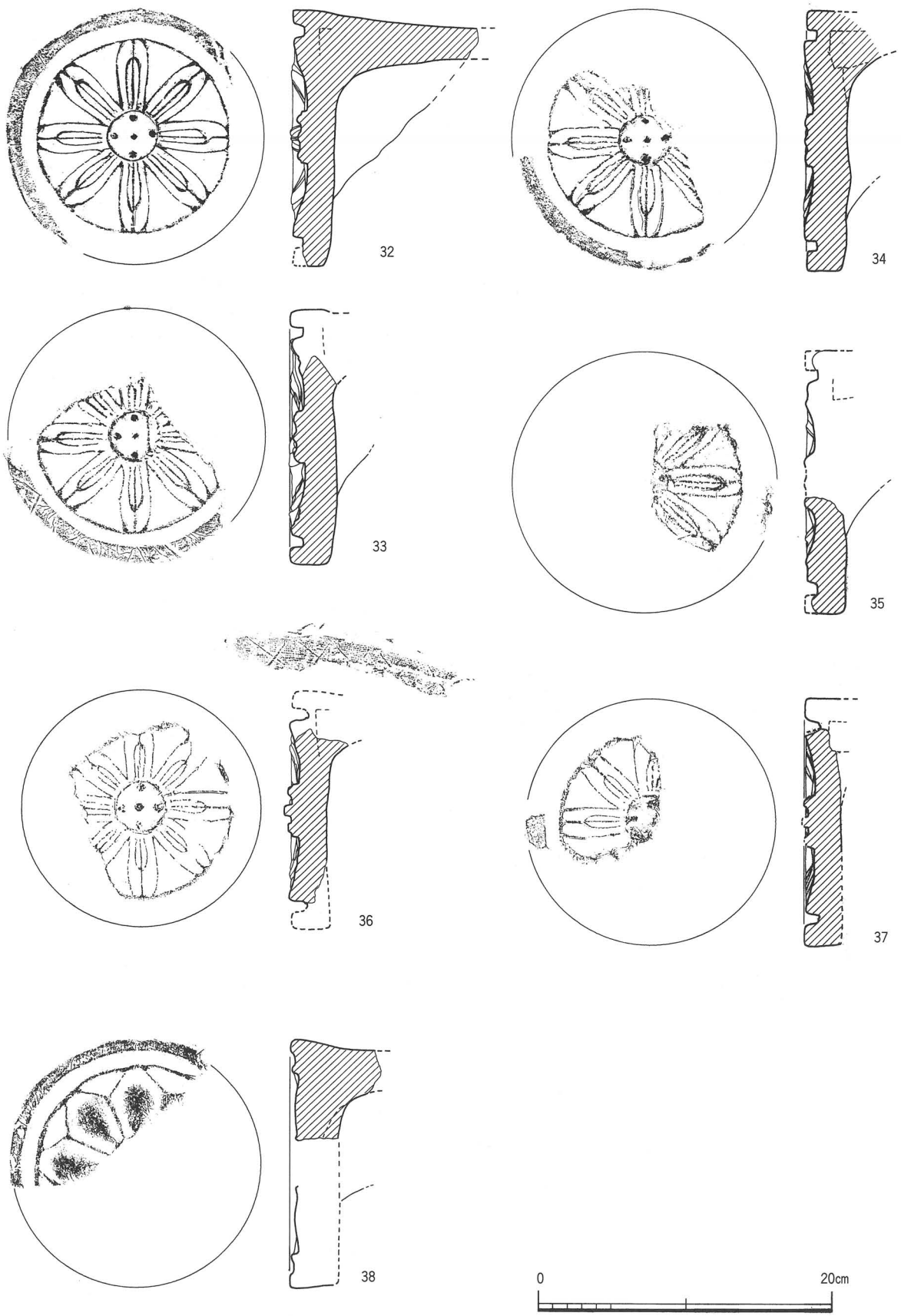
◆軒丸瓦ＩＢ類［重弁八弁蓮華文］（31）

31は瓦当径17.8cm・瓦当厚2.2cmを測る。周縁は素文の直立縁で、ＩＡ類と同様に外面に段を成している。幅1.3cm・高さ0.9cmを測り、高さでは中高縁に分類される。中房は直径5.3cm・高さ0.3cmを測り、１＋８の蓮子を方形に配していると思われる。花弁は長さ4.0cm・幅3.1cmを測り、先端は尖る。子葉は肉厚で花弁よりも高く盛り上がり、先端は丸味をもつがややくぼむものがある。長さ3.0cm・幅1.4cmを測る。間弁は楔形で連続し、中房まで伸びて花弁を区画するもので、頂部に直径約1.0cmの珠文を配している。調整は瓦当裏面がナデで他は不明。色調は灰色である。胎土は密で角閃石を含み、0.2cm以下の砂粒を多く含む。焼成良好。

ＩＢ類は教興寺では初の出土で、八尾市所在の「西郡廃寺」出土のものに類似する。[註6]

◆軒丸瓦Ⅱａ類［単弁八弁蓮華文］（32～35）

32は瓦当径17.5cm・瓦当厚1.8cmを測る。周縁は素文の直立縁で、幅1.2cm・高さ0.7cmを測り、高さでは中高縁に分類される。内区は中央から外に向かって反り上がり、周縁よりも高くなる。このため周縁との間に幅0.9cmの凹線が生じているが、この部分が外区とも捉えられる。中房は直径3.5cm・高さ0.6cmを測り、１＋４の蓮子を花弁の方向に合わせて方形に配している。花弁は長さ4.9cm・幅2.2cmを測り、肉厚さは無く、幅0.2～0.6cmの隆起線により表現されている。花弁内の子葉は長さ3.4cm・幅0.9cmを測り、同じく隆起線により表現されているが、花弁よりも高く盛り上がっている。花弁中央には稜線を置く。丸瓦部は厚さ2.1cmを測る。調整は瓦当裏面が不



第14図　出土軒丸瓦２（Ｓ＝１／４）

定方向のナデ、丸瓦部は縦方向のナデで、凹面に布目が残る。色調は灰色で、断面は灰黄褐色である。胎土は密で角閃石を含み、0.3cm以下の砂粒を少量含み、1.0cmの中礫もみられる。焼成はやや不良である。

文様の特徴からみて32～35の４点は同笵と思われ、35については明確ではないが32～34は瓦当面の方向も一致する。35のみ焼成が良好である。

Ⅱａ類は教興寺では初の出土である。

◆軒丸瓦Ⅱｂ類［単弁八弁蓮華文］（36・37）

Ⅱａ類と同意匠であるが、法量が異なりⅡｂ類とした。瓦当径17.0cm・瓦当厚1.8cm・周縁幅1.5cm・周縁高0.7cm・花弁長4.2cm・花弁幅2.0cm・子葉長2.5cm・子葉幅0.9cm・中房径3.5cm・中房高0.5cmを測る。Ⅱａ類と異なる点は、花弁が短く、また花弁の長さに対する子葉の長さの比率が１割程度小さいこと、子葉の盛り上がりが低いこと、中房内の蓮子が高くまた中心の蓮子が他の蓮子より突出することが挙げられる。また花弁はⅡａ類の先端が切れたような形状である。調整は瓦当裏面が不定方向のナデで、36の瓦当裏の丸瓦接合部には、接合強化のための格子状沈線の痕跡、および丸瓦凹面の布目の痕跡が明瞭に残っている。色調は灰色で、断面は明赤褐色である。胎土は密で角閃石を含み、0.5cm以下の砂粒を含む。焼成は良好で硬質である。

36・37の２点は同笵と思われるが、文様は180度回転している。胎土・焼成共に酷似している。

Ⅱｂ類は教興寺では初の出土である。文様や法量からみて『八尾市史』掲載の「高麗寺」出土のものはこのⅡｂ類であろう。

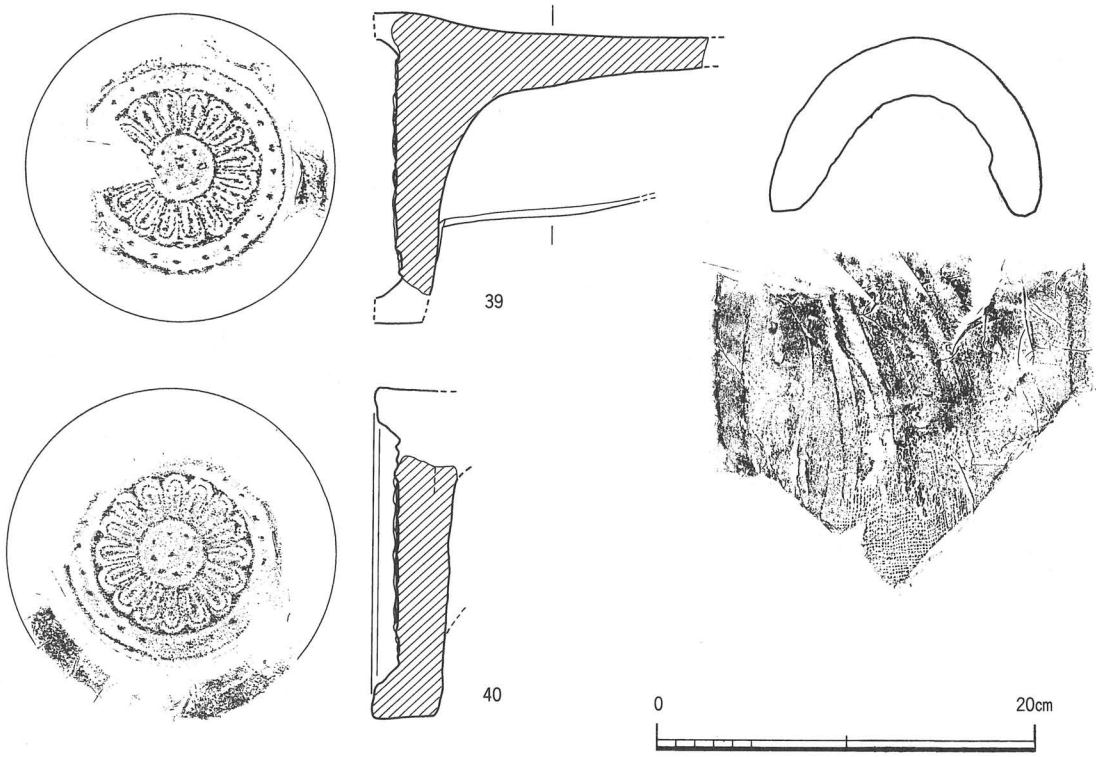
◆軒丸瓦Ⅲ類［素弁八弁蓮華文］（38）

38は瓦当径17.0cm・瓦当厚2.8cmを測る。周縁は素文の直立縁で、幅0.9cm・高さ0.6cmを測り、高さでは中高縁に分類される。外区は内区とは界線で画され、一段高くなり、幅1.0cmを測り素文である。内区と中房も界線で画されていると思われ、中房は復元径3.4cmを測る。花弁は長さ4.6cm・幅3.7cmを測る。文様に肉厚さは無く花弁中央がやや盛り上がる程度で、花弁の輪郭や界線は隆起線により表現されている。調整は丸瓦部凸面が縦方向のナデで他は不明である。色調は灰色で、断面はにぶい褐色である。胎土は密で角閃石・赤色酸化粒を含み、0.3cm以下の砂粒を含む。焼成やや不良。

Ⅲ類は教興寺では初の出土で、『八尾市史』掲載の「心合寺」出土のものと同意匠である。同型式の軒丸瓦については現在３種類が確認されている（心合寺Ａ～Ｃ類とする）。中房内には中心から花弁基部に八方に伸びる隆起線を置くもので、車輪状の中房を成す特徴がある。Ａ・Ｂ類が７世紀中葉・後半に比定され、Ｃ類は平安時代以降にＡ・Ｂ類を模したものとされている。今回出土のⅢ類はＡ・Ｂ類のどちらかであるが、花弁の長さや瓦当厚からみておそらくＢ類であろう。

◆軒丸瓦Ⅳ類［細弁十六弁蓮華文］（39・40）

瓦当径約16.9cm・瓦当厚2.7cmを測る。周縁は素文で、幅1.3cm・高さ1.3cmを測る。形状は内側が外傾し、高さは高縁に分類される。外区は幅1.3cmで、径0.5cmの珠文24個が巡り、外側には界線が巡る。内区は直径8.5cmを測る。花弁は幅0.2～0.3cmの隆起線により表現されており、長さ2.4cm・幅1.1cmを測る。子葉はわずかに盛り上がる程度で、長さ1.8cm・幅0.6cmを測る。間弁は中房まで伸びて花弁を画するもので、連続して巡るため内区・外区を画する界線状を成している。中房は直径3.6cmを測る界線で内区と画され、１＋８の蓮子を円形に配している。39の丸瓦



第15図　出土軒丸瓦３（Ｓ＝１／４）

部は厚さ1.8cm・高さ9.5cm・幅14.0cmを測る。調整は瓦当裏面不定方向のナデ、丸瓦部縦方向のナデで、凹面には布目が残る。色調は黄灰色で、断面はにぶい橙色である。胎土は密で角閃石・赤色酸化粒を多く含み、0.2cm以下の砂粒を含む。焼成良好。40は文様の特徴から同笵と思われ、文様は180度回転している。色調は灰黄色である。胎土は密で角閃石・赤色酸化粒を多く含み、0.3cm以下の砂粒を含む。焼成やや不良。

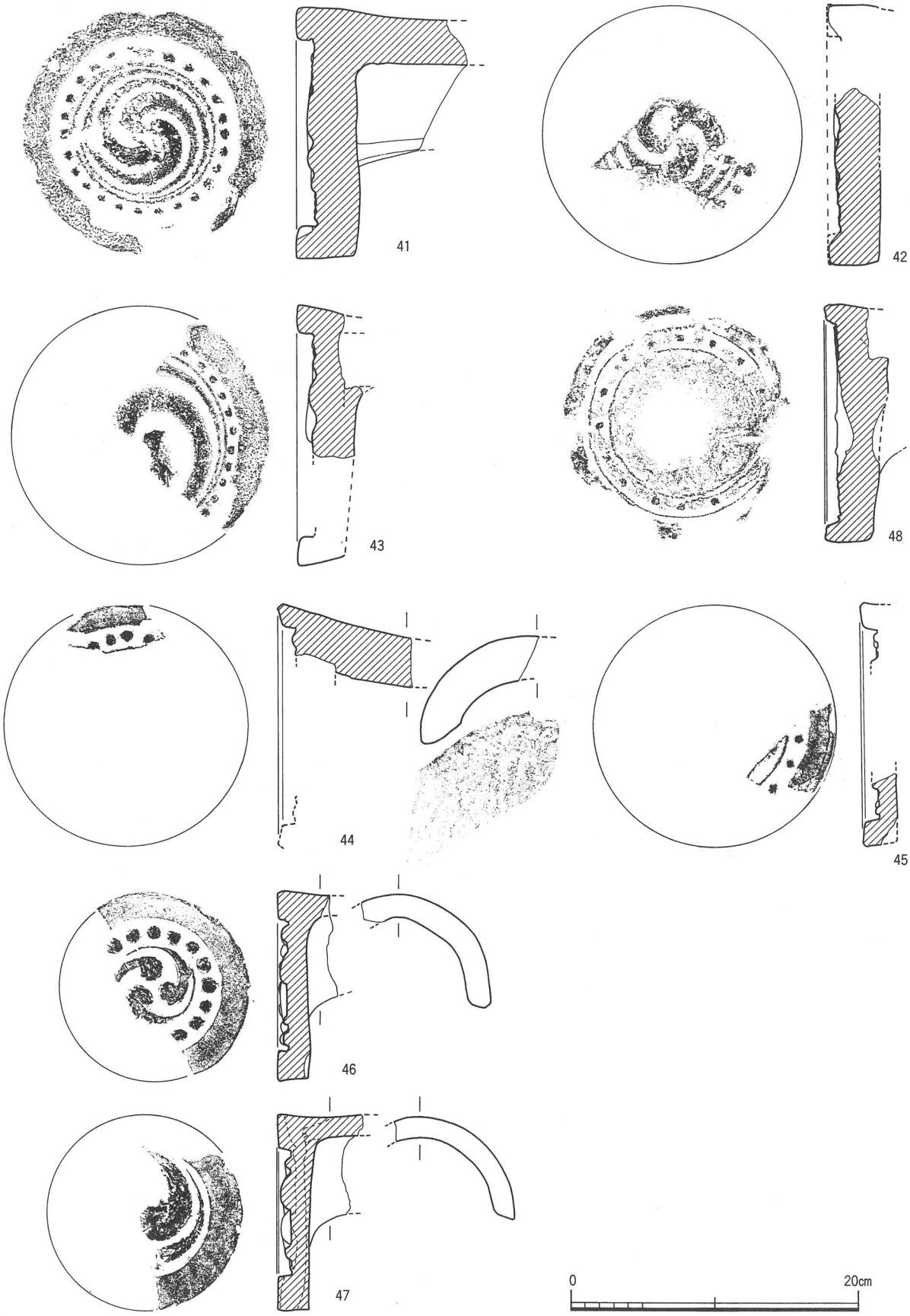
Ⅳ類は、『八尾市史』に掲載されている教興寺出土資料(大通寺所蔵)と同意匠である。セットとなる軒平瓦は、同書掲載の均整唐草文軒平瓦であろう。[註7] 奈良時代後期に比定される。

Ｖ類は三つ巴文軒丸瓦である。文様から６種類に分類できる(ＶＡ類～ＶＦ類)。ＶＡ類・ＶＢ類が鎌倉時代末～室町時代初頭、ＶＣ類・ＶＤ類が近世頃、ＶＥ類・ＶＦ類が近世～近代に比定されよう。

◆軒丸瓦ＶＡ類［三つ巴文］(41・42)

41は瓦当径17.4cm・瓦当厚3.0cmを測る。周縁は素文の直立縁で、幅2.2cm・高さ1.2cmを測り、高さでは高縁に分類される。内区と外区は界線により画され、外区には26個の珠文が巡る。内区は右巻き三つ巴文である。頭部は尖り気味で、中央でほぼ接する。頭部から尾部へのくびれは無く、尾は約一周して界線とは接しない。なお瓦当面には笵ずれがみられ、中央や珠文帯に文様の潰れた部分がある。丸瓦部は厚さ3.1cmを測る。調整は瓦当下部側面が周縁に沿ったナデ、丸瓦部凸面が縦方向のナデ、凹面布目である。瓦当面には離れ砂が認められる。色調は黄灰色で、断面は灰黄褐色である。胎土は密で角閃石を含む。焼成良好。

42は文様や法量、胎土が類似し同類に含めた。色調は暗灰色で断面は灰黄褐色である。



第16図　出土軒丸瓦４（Ｓ＝１／４）

◆軒丸瓦ＶＢ類［三つ巴文］(43)

瓦当径18.0cm・瓦当厚2.8cmを測る。周縁は素文の直立縁で、幅1.9cm・高さ1.2cmを測り、高さでは高縁に分類される。内区と外区は界線により画され、外区には推定34個の珠文が巡る。内区は右巻き三つ巴文で、巴は非常に太く、巴間の隙間がほとんどない。頭部は尖り気味で、中央で接する。頭部から尾部へのくびれは無く、尾は約3/4周して界線とは接しない。丸瓦部は厚さ1.7cm・高さ7.7cm・幅12.8cmを測る。調整は丸瓦部凸部が縦方向のナデで、全体に摩耗が著しく他は不明である。瓦当面には離れ砂が認められる。色調は黄灰色で、断面は灰黄褐色である。胎土は密で角閃石を多く含み、0.5cm以下の中礫を含む。角閃石・赤色酸化粒を含む。焼成良好。

◆軒丸瓦ＶＣ類［三つ巴文］(44)

瓦当径16.8cmを測る。周縁は素文の外傾内斜縁で外端部が面取りされ、幅1.5cm・高さ1.3cmを測り、高さでは高縁に分類される。内区と外区は界線により画され、外区には珠文が巡る。内区は三つ巴文と思われるが不明である。丸瓦部は厚さ3.0cmを測る。調整は丸瓦部凸面が縦方向ナデ、凹面は布目で、斜め方向の糸切り痕が認められる。瓦当面には離れ砂が認められる。色調は暗灰色で、断面は灰色である。胎土は密で角閃石を含む。焼成良好。

◆軒丸瓦ＶＤ類［三つ巴文］(45)

瓦当径16.8cm・瓦当厚1.2cmを測る。周縁は素文のやや外傾縁で外端部が面取りされ、幅1.7cm・高さ1.2cmを測り、高さでは高縁に分類される。内区と外区は界線により画され、外区には珠文が巡る。内区は左巻き三つ巴文と思われる。調整は瓦当側面が周縁に沿ったナデである。瓦当面に離れ砂が認められる。色調は暗灰色で、断面は灰白色である。胎土は密で角閃石を多く含む。焼成良好。

◆軒丸瓦ＶＥ類［三つ巴文］(46)

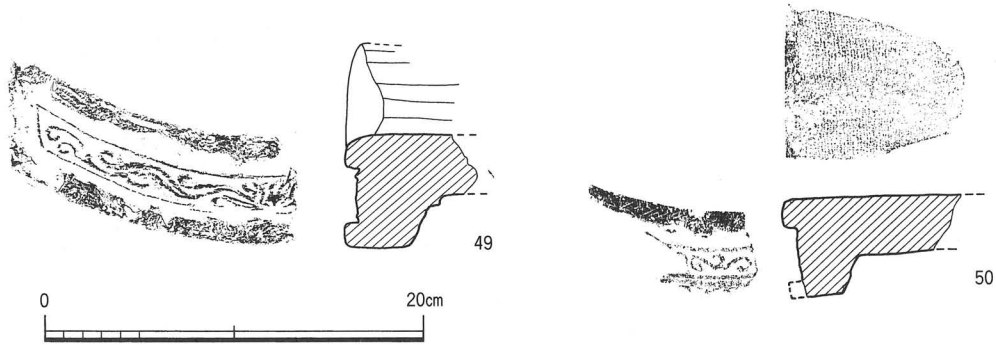
瓦当径13.2cm・瓦当厚1.4cmを測る。周縁は素文の直立縁で外端部が面取りされ、幅2.0cm・高さ0.7cmを測る。高さでは中高縁に分類される。内区・外区間に界線は無く、外区には16個の珠文が巡る。内区は左巻き三つ巴文で、頭部は丸く、鋭角的にくびれて尾は約半周する。丸瓦部は厚さ1.7cm・高さ7.7cm・幅12.8cmを測る。調整は瓦当裏面ナデ、丸瓦部凸面が縦方向ナデで、瓦当裏面下部の周縁に沿ったナデが、丸瓦部側面に連続している。色調は暗灰色～灰色で光沢があり、断面は灰白色である。胎土は密で角閃石を含み、0.5cm以下の小礫を含む。焼成良好で硬質である。

◆軒丸瓦ＶＦ類［三つ巴文］(47)

瓦当径13.6cm・瓦当厚1.2cmを測る。周縁は素文の直立縁で、幅2.3cm・高さ1.0cmを測り、高さでは高縁に分類される。三つ巴文は左巻きで、頭部は丸く、鋭角的にくびれて尾は約半周する。尾は頂部に稜を成し断面三角形を呈する。丸瓦部は厚さ1.4cm・高さ7.1cm・幅13.2cmを測る。調整は丸瓦部凸面が縦方向ナデで、瓦当下部側面及び裏面下部の周縁に沿ったナデが、丸瓦部側面に連続している。丸瓦部内面には糸切り痕が認められる。瓦当は丸瓦前端面に貼られ、瓦当裏面と丸瓦前端面の接合面には、接合強化のための圏線状の沈線が認められる。色調は暗灰色で光沢があり、断面は灰白色である。胎土は密で角閃石を含み、１cm程度の中礫を数個含む。焼成良好で硬質である。

◆軒丸瓦Ⅵ類［文様不明］(48)

瓦当径16.5cm・瓦当厚2.9cmを測る。周縁は素文の直立縁で、幅1.1cm・高さ0.9cmを測り、高



第17図　出土軒平瓦（S＝1／4）

さでは高縁に分類される。内区と外区は界線により画され、外区には16個の珠文が巡り、珠文帯外側にも界線がある。内区は瓦当面中央部の剥離が著しく文様不明であるが、部分的に観察できる範囲からみて蓮華文や巴文ではないと思われる。また全体に摩耗し調整も不明である。色調は黄灰色で、断面は灰黄褐色である。胎土は密で角閃石・赤色酸化粒を多く含み、1cm以下の中礫を多く含む。焼成良好。

◆軒平瓦Ⅰ類［均整唐草文］(49)

外縁は直立縁で、瓦当部上端は面取りされる。外区・内区は幅0.2～0.3cmの界線によって画され、外区は幅狭で素文である。顎は段顎である。唐草文の中心飾り部分は潰れて不明瞭であるが、類例からみて4葉と思われる。中心飾り下位から派生する2本の支葉は、下上下上下下の順に反転する。平瓦部は凹面布目を縦方向ナデで消し、広端部を面取りする。色調は暗灰色である。胎土は密で角閃石を少量含み、0.3cm以下の砂粒を含む。焼成は良好である。

三つ巴文の軒丸瓦ⅤA類とセットになると思われる。同意匠の瓦が「若江寺」(東大阪市若江遺跡)で出土しており、法量等からみて同笵である可能性が高い。[註8] 鎌倉時代末～室町時代初頭に比定される。

◆軒平瓦Ⅱ類［均整唐草文？］(50)

外縁は直立縁で、瓦当部上端は面取りされる。外区・内区は幅0.2～0.3cmの界線によって画され、外区は幅狭で素文である。顎は段顎である。文様は唐草の反転部分がみられ均整唐草文であろうが全容は不明で、文様の隆起は0.1cm以下で低く不鮮明である。瓦当面には離れ砂の付着が顕著である。平瓦部は凹面布目を一部縦方向ナデで消し、凸面は縦方向ナデである。色調は暗灰色である。胎土は粗。焼成良好で非常に硬質である。鎌倉時代末～室町時代初頭に比定される。

◆丸瓦

第①層から8点(51～58)、第⑤層から2点(80・81)を図化した。詳細は**表6**にまとめた。

51は瓦当が欠落した軒丸瓦で、凹面の瓦当接合部には接合強化のため斜格子状の沈線が、また端面には平行する沈線が認められる。これは軒丸瓦Ⅱb類の特徴と一致する。

◆平瓦

第①層から17点(59～68・71～77)、第②層から2点(78・79)、　第⑤層から4点(82～85)を図化した。平瓦の調整では凹面布目が圧倒的に多い。凸面は縄目タタキ、縄目タタキ＋ナデが多い。85は凸面に文字と思われる陽刻スタンプ文を施しているが解読不能である。平瓦とした中で、厚

表4　軒丸瓦一覧表

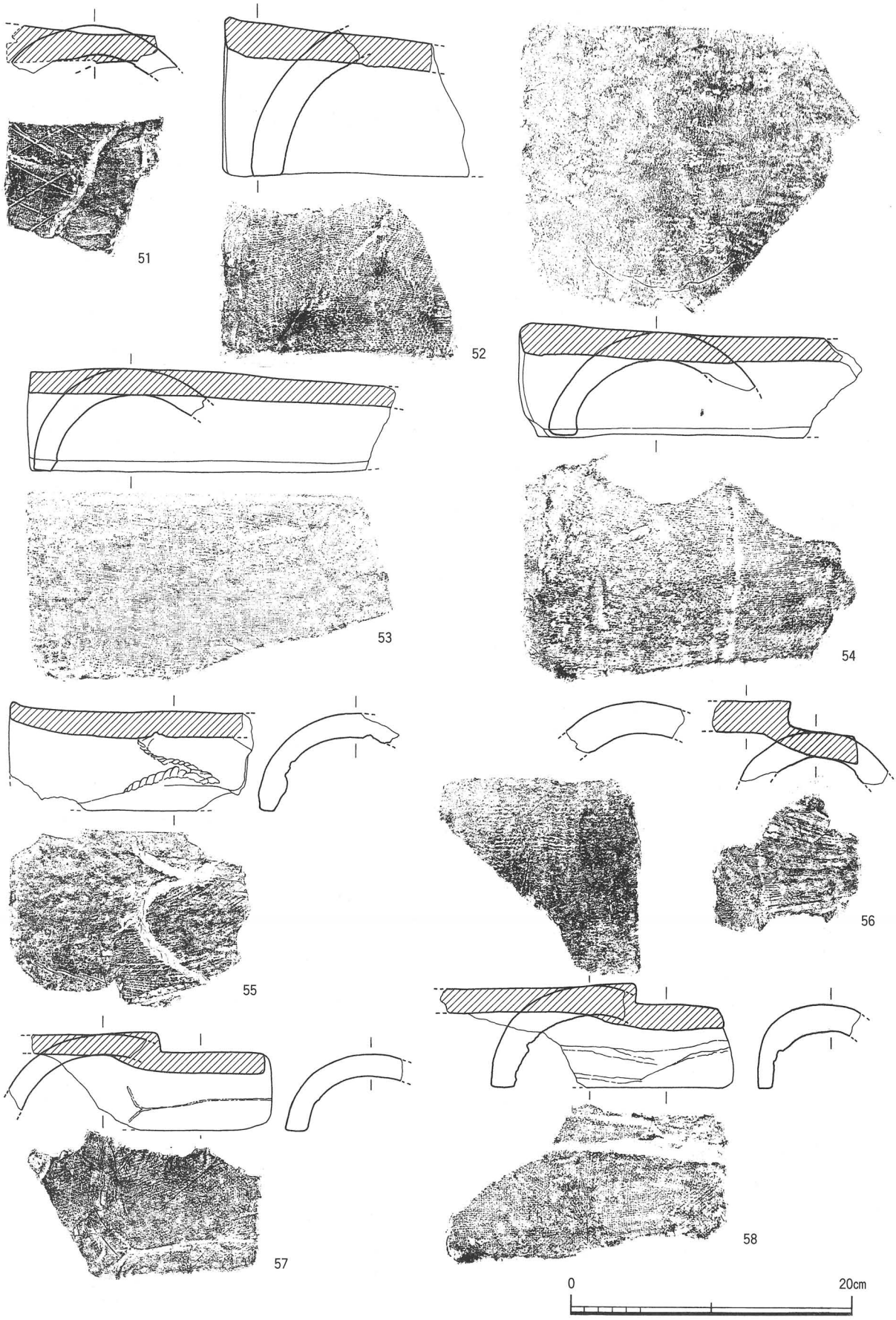
分類	番号	瓦当 径	厚さ	内区 径	中房 径	中房 高さ	蓮子 数	蓮子 径	蓮子 高さ	花弁 数	花弁 長さ	花弁 幅	子葉 長さ	子葉 幅	外区 文様	外区 幅	珠文 数	珠文 径	珠文 高さ	周縁 文様	周縁 幅	周縁 高さ	周縁 形状	出土地点 地区	出土地点 層位
ⅠA	28	(18.0)	2.2		4.9	0.2	1+8	0.8	0.2	8	3.8～4.3	2.7	3.0	1.3						素	1.3	0.7	直立	2区	第①層
	29	(18.0)	2.7				(1+8)			8	4.0	2.8	3.0	1.4						素	1.3	0.6	直立	6区	第①層
	30	(17.0)	2.1				(1+8)			8										素	1.5	0.7	直立	1区	第①層
ⅠB	31	(17.8)	2.2		(5.3)	0.3	(1+8)	0.8	0.4	8	4.0	3.1	3.0	1.4						素	1.3	0.9	直立	9区	第⑤層
Ⅱa	32	17.5	1.8	13.5	3.5	0.6	1+4	0.6	0.3	8	4.9	2.2	3.4	0.9	凹	0.9				素	1.2	0.7	直立	7区	第①層
	33	(17.5)	2.1	(13.5)	3.5	0.7	1+4	0.7	0.3	8	4.8	2.1	3.4	0.9	凹	0.8				素	1.3	0.8	直立	7区	第①層
	34	(17.9)	2.3	(13.7)	3.5	0.7	1+4	0.7	0.3	8	4.8	2.1	3.4	0.9	凹	0.9				素	1.4	0.7	直立	8区	第①層
	35	(18.0)	2.2	(13.5)	(4.0)	0.6	(1+4)	0.6	0.2	8	4.9	2.1	3.5	0.9	凹	1.0					(1.3)			8区	第②層
Ⅱb	36	—	1.8	12.2	3.5	0.5	1+4	0.7	0.5	8	4.3	2.1	2.6	0.9	凹									6区	第①層
	37	(17.0)	1.8	(12.4)	(3.6)	0.4	(1+4)	0.9		8	4.2	2.0	2.5	0.9	凹	0.9					1.5	0.7	直立	3区	第①層
Ⅲ	38	(17.0)	2.8	(12.8)	3.4					8	4.6	3.7			素	1.0					0.9	0.6	直立	8区	第①層
Ⅳ	39	(16.3)	2.7	8.5	3.6	0	1+8	0.4	0.1	16	2.4	1.1	1.8	0.6	珠文	1.3	(24)	0.5	0.2	素	1.3	(1.2)	内側外傾	5区	樋102
	40	(17.4)	2.7	8.5	3.6	0	1+8	0.5	0.1	16	2.4	1.1	1.8	0.6	珠文	1.3	(24)	0.5	0.2	素	1.3～1.7	1.3	内側外傾	6区	第①層
					巴 頭径	巴 頭高																			
ⅤA	41	17.4	3.0	9.7	1.5	0.4									珠文	1.3	(26)	0.8	0.2	素	2.2	1.2	直立	7区	第⑤層
	42	(17.6)	2.8		1.6	0.4									珠文	1.4		0.6	0.1	素	(2.2)			2区	第①層
ⅤB	43	(18.0)	2.8	(11.7)	2.5	0.8									珠文	1.0	(34)	0.7	0.2	素	1.9	1.2	やや外傾	4区	第①層
ⅤC	44	(16.8)													珠文	1.4		0.9	0.3	素	1.5	1.3	外傾内斜	2区	第①層
ⅤD	45	(16.8)	1.2												珠文	1.3		0.7	0.4	素	1.7	1.2	やや外傾	2区	第①層
ⅤE	46	13.2	1.4		1.8	0.5									珠文	1.7	(16)	1.2	0.4	素	2.0	0.7	直立	2区	第①層
ⅤF	47	(13.6)	1.2		2.4	0.6											0			素	2.3	1.0	直立	2区	第①層
Ⅵ	48	16.5	2.9	10.5											珠文	1.5	(16)	0.6	0.2	素	1.1	0.9	直立	8区	第①層

（　）は復元値・推定値

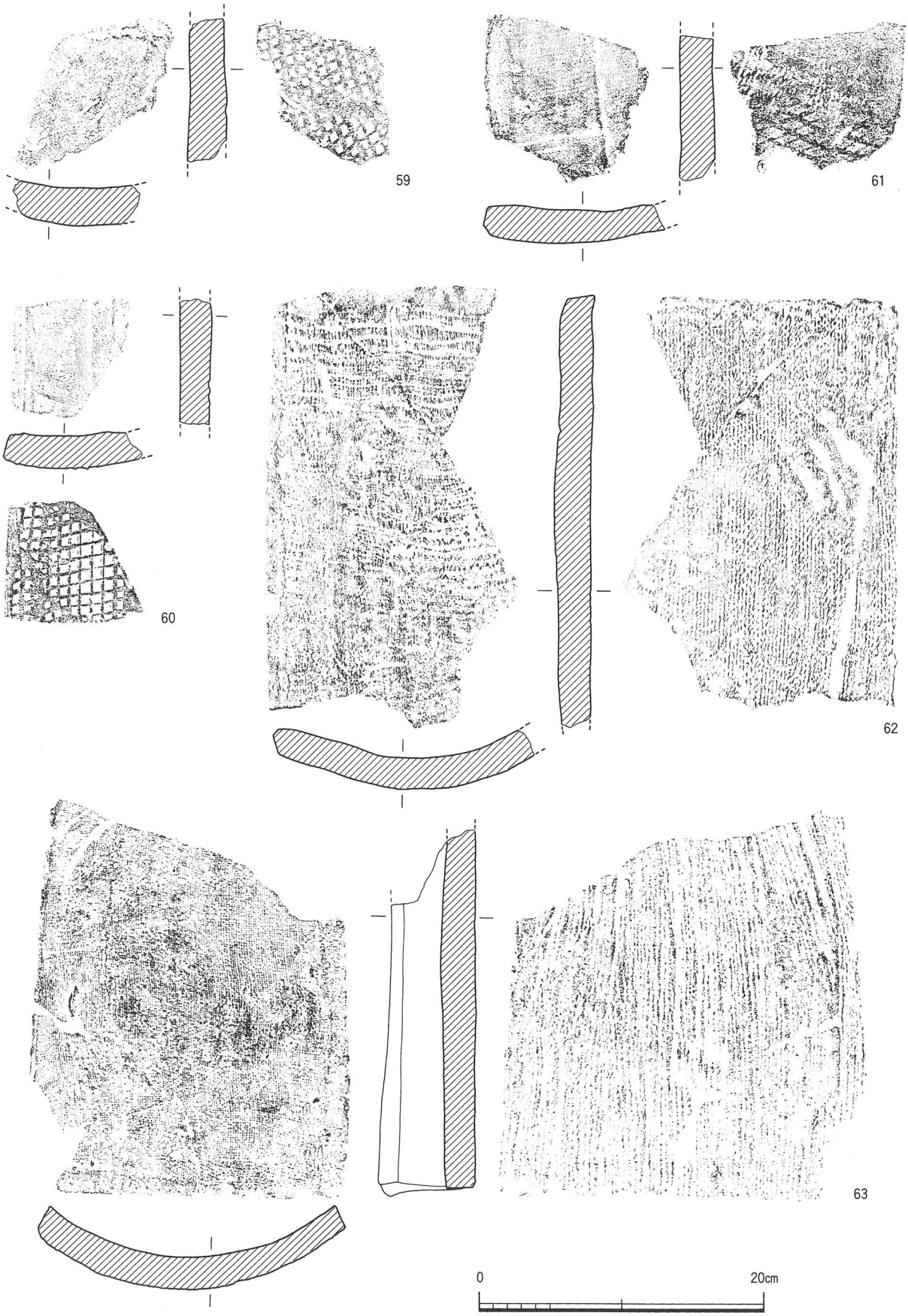
表5　軒平瓦一覧表

分類	番号	瓦当 縦	横	厚さ	外縁 上幅	外縁 下幅	外縁 脇幅	外縁 高さ	内区 縦	内区 横	外区 上幅	外区 下幅	外区 脇幅	顎下幅	平瓦部厚さ	出土地点 地区	出土地点 層位
Ⅰ	49	5.6	(28.0)	3.9	1.8	1.3	1.1	0.6	2.1	(24.8)	0.4	0.3	0.5	3.6	3.1	4区	第①層
Ⅱ	50	5.1		3.1	1.5	1.0		0.7	1.5		0.6	0.6			2.8	4区	突出部

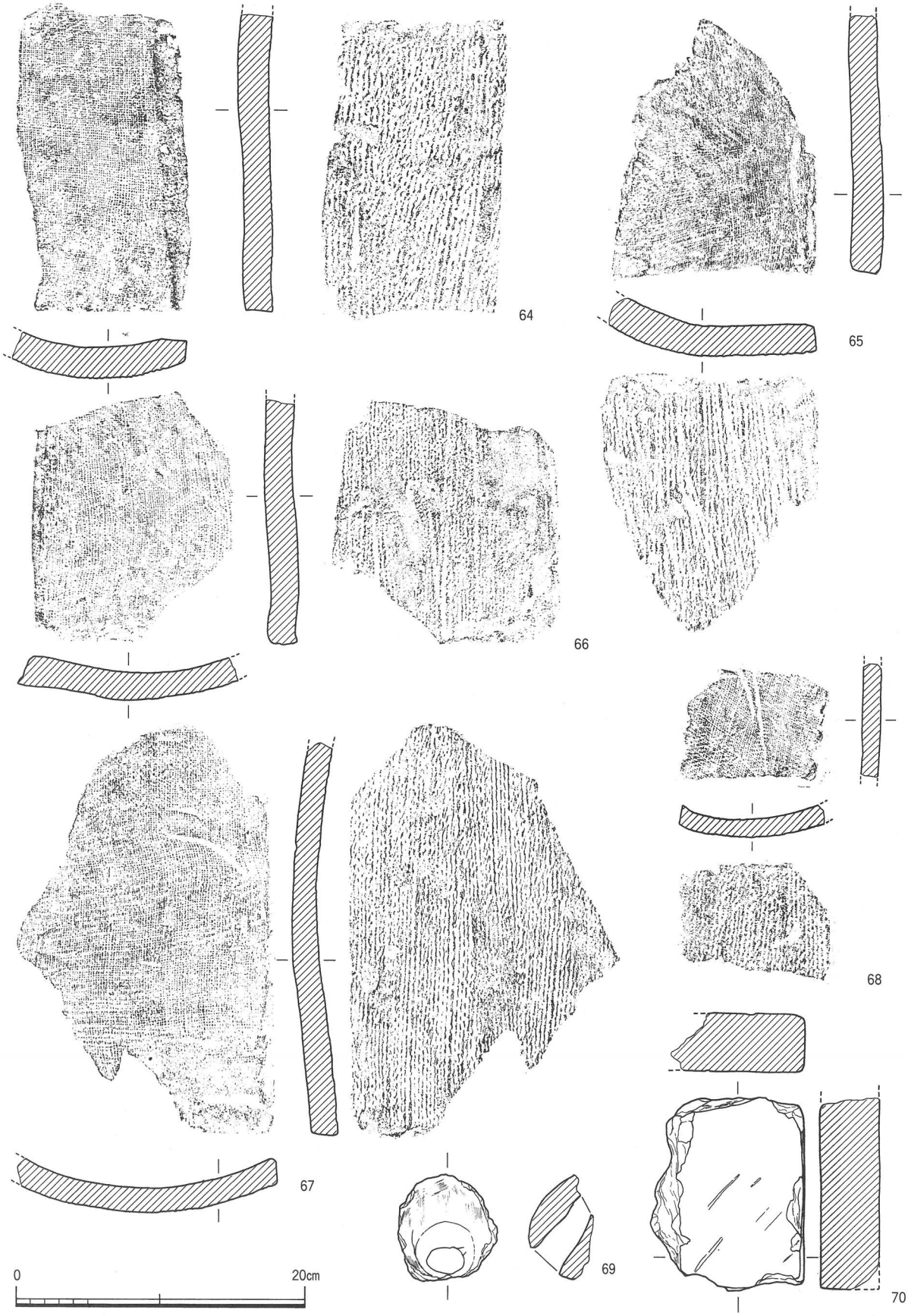
（　）は復元値・推定値



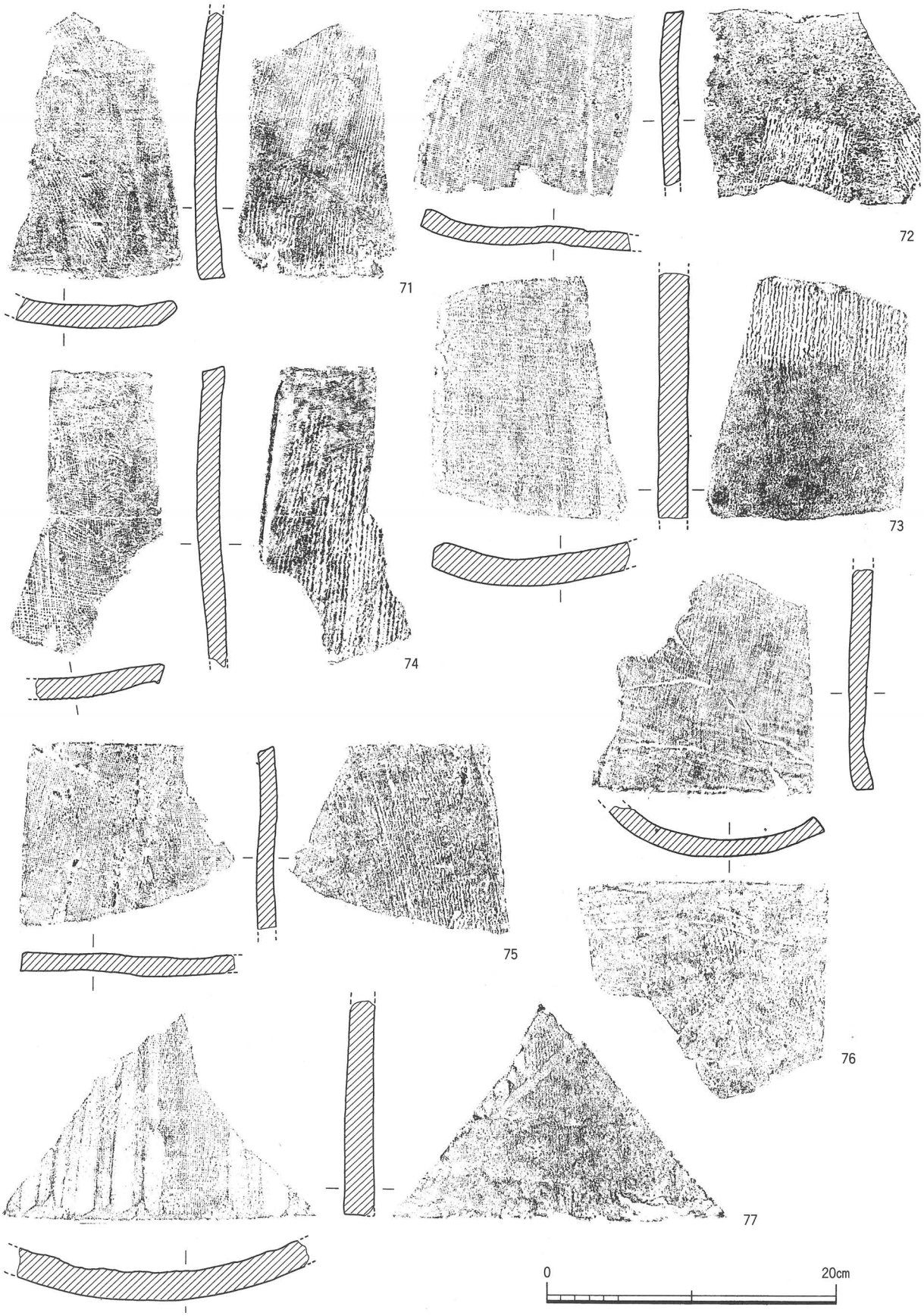
第18図　第①層出土丸瓦（S＝1／4）



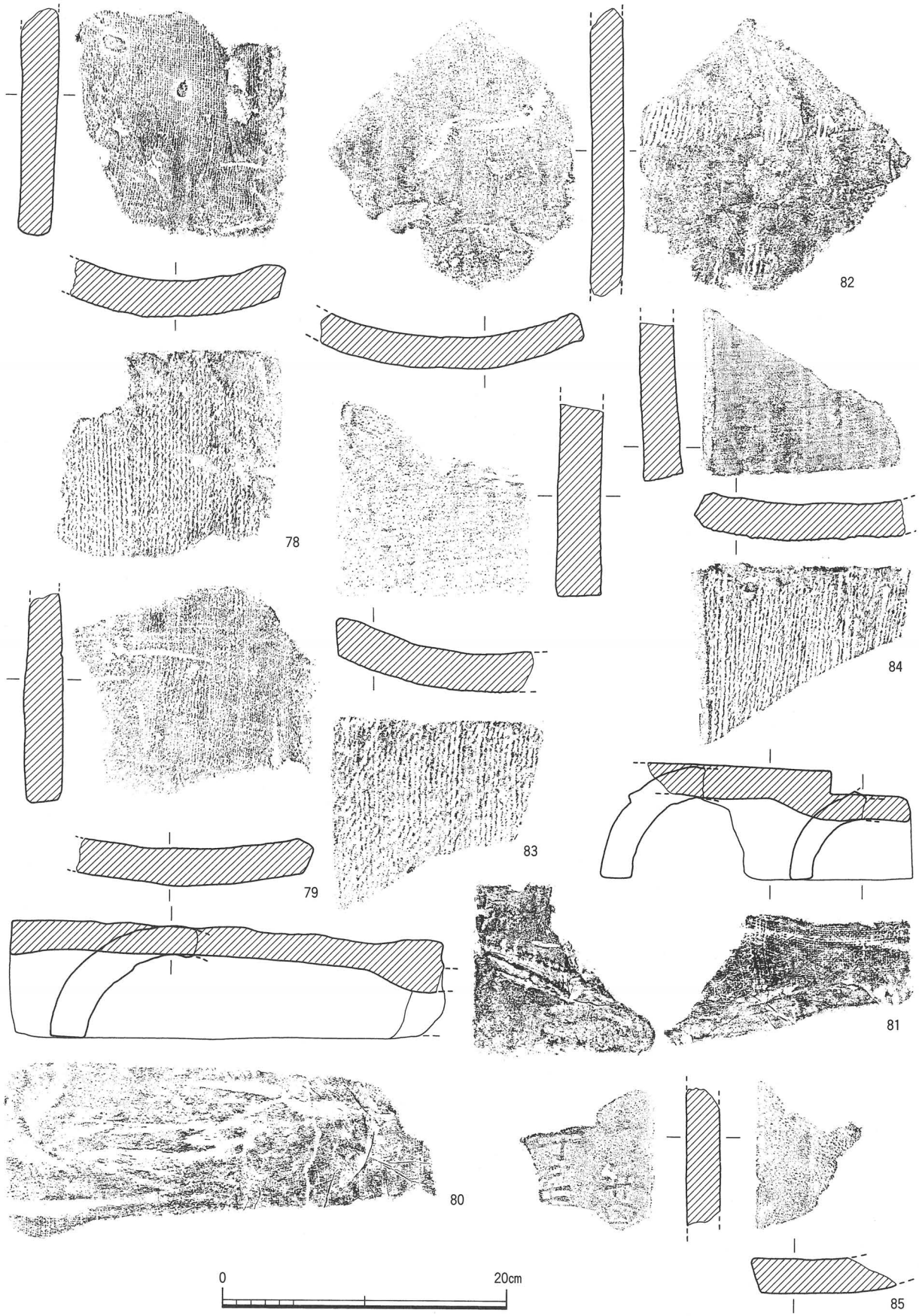
第19図　第①層出土平瓦１（Ｓ＝１／４）



第20図　第①層出土平瓦２、他（Ｓ＝１／４）



第21図　第①層出土平瓦３（Ｓ＝１／４）



第22図　第②層・第⑤層出土瓦（S＝1／4）

表6　丸瓦一覧表

	調整				端部断面形状			厚さ (cm)	備考	地区	層位
	胴部		玉縁部								
	凸面	凹面	凸面	凹面	側縁部	胴部前	玉縁後				
51	D	D	−	−	−	−	−	2.0	軒丸瓦	8区	第①層
52	D	F	−	−	Ⅰ	Ⅱ	−	2.0		8区	第①層
53	D	F	−	−	Ⅱ	Ⅰ	−	1.9		8区	第①層
54	C+D	F	−	−	Ⅱ	Ⅱ	−	2.0		5区	第①層
55	D	F+D	−	−	Ⅲ	Ⅲ	−	1.8	凹面吊り紐痕	2区	第①層
56	D	F	D	F+E	−	−	Ⅰ	2.2	胴部と玉縁部は一体	7区	第①層
57	D	F	D	F	Ⅰ	−	Ⅰ	1.5	玉縁部張合わせ	6区	第①層
58	C+D	F	D	F	−	−	Ⅰ	1.7	胴部と玉縁部は一体	9区	第①層
80	D	F	−	−	Ⅰ	Ⅰ	−	2.1		9区	第⑤層
81	D	F	D	F	Ⅰ	−	Ⅰ	2.2	胴部と玉縁部は一体　玉縁端部潰れる	8区	第⑤層

調整　凸面－A：格子タタキ　B：斜格子タタキ　C：縄目タタキ　D：ナデ　E：ハケ
　　凹面－F：布目　D：ナデ　E：ハケ

端部断面形状

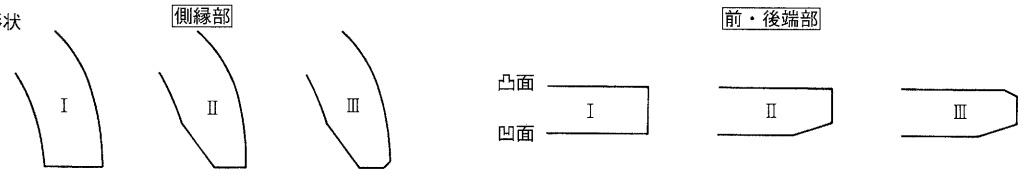


表7　平瓦他一覧表

	調整		端部断面形状			厚さ (cm)	備考	地区	層位
	凸面	凹面	側縁部	広端部	狭端部				
59	A	F+D	−	−	−	2.5		7区	第①層
60	A	F+D	Ⅳ	−	−	2.2		8区	第①層
61	B+C+D	F	Ⅳ	−	−	2.3	凹面桶痕	4区	第①層
62	C	F	Ⅱ	−	Ⅱ	2.3		8区	第①層
63	C	F	Ⅱ	Ⅱ	−	2.3	歪み大	9区	第①層
64	C	F	Ⅱ	Ⅰ	−	2.1	角を落とす　凸面離れ砂	6区	第①層
65	C	F	Ⅱ	Ⅱ	−	2.1	広端面の一部に布目	9区	第①層
66	C（+D）	F	Ⅱ	Ⅱ	−	1.9	側端面に布目　凸面ナデは一部	7区	第①層
67	C	F	Ⅱ	Ⅰ	−	1.7	側縁の面取りは一部	6区	第①層
68	C	F	Ⅰ	−	−	1.2		9区	第①層
69	D	−	−	−	−	4.4	鬼瓦の目と考えられる	7区	第①層
70	D	D	Ⅰ	Ⅰ	−	4.1	塼　表面に粘土接合痕	4区	第①層
71	C+E	F+E	Ⅲ	Ⅰ	−	1.4	側縁の面取りは前半部のみ	7区	第①層
72	C+D	F	Ⅱ	−	Ⅰ	1.2	歪み大	6区	第①層
73	C+D	F	Ⅱ	−	−	1.9		9区	第①層
74	C	F	Ⅱ	−	Ⅰ	1.5	凸面側端に粘土バリ	6区	第①層
75	C+D	F	Ⅱ	−	Ⅰ	1.2	歪み大　凹面布目につなぎ目	9区	第①層
76	C+D	F	Ⅰ	Ⅰ	−	1.3		9区	第①層
77	C+D	F+D	−	Ⅰ	−	1.8		7区	第①層
78	C	F	Ⅱ	Ⅰ	−	2.6		8区	第②層
79	D	F	Ⅱ	Ⅰ	−	2.6		8区	第②層
82	C+D	F	Ⅳ	−	−	2.2		9区	第⑤層
83	C	F	Ⅱ	Ⅰ	−	2.5	凹面桶痕	7区	第⑤層
84	C	F	Ⅳ	Ⅰ	−	2.5	凹面桶痕	7区	第⑤層
85	D	D	Ⅰ	Ⅰ	−	2.3	文字陽刻スタンプ　側縁上部角を丸くナデる	9区	第⑤層

調整　凸面－A：格子タタキ　B：斜格子タタキ　C：縄目タタキ　D：ナデ　E：ハケ
　　凹面－F：布目　D：ナデ　E：ハケ

端部断面形状

さ1.2～1.5cm程度の薄い一群がある(72・74・75)。焼成が良好堅緻で須恵質と呼べるもので、歪みが大きく、横断面に明瞭な反りが認められない。74は特徴的な側縁断面を呈している。これらは雁振瓦である可能性がある。なお出土した全破片中には雁振瓦と認定できるものはなかった。詳細は表7にまとめた。

◆その他

69は鬼瓦の目部分と考えられる。70は塼である。

〈軒丸瓦について〉

出土した軒丸瓦のうちⅠ類・Ⅱ類・Ⅲ類が飛鳥時代に比定されるものである。Ⅰ類は原山廃寺式、Ⅱ類は西琳寺式に分類されている。Ⅲ類については便宜上心合寺式としておく。これらの軒丸瓦は中～南河内地域において広く分布することが知られている。3種類が出土しているが、いずれも退化型式である。

原山廃寺式と西琳寺式については上田　睦氏が論考されており、以下のように要約できる。

・西琳寺式軒丸瓦は、大和の山田寺式の影響で7世紀中葉に南河内において成立した単弁形式軒丸瓦[註9]で、古市郡西琳寺を中心に分布している。山田寺式が『中央的瓦文様』であり、また西琳寺は中央政権で活躍していた有力豪族西文氏の氏寺であることから、西琳寺式軒丸瓦を採用している寺院(西琳寺式系寺院)は中央政権と関わりの強い氏族の氏寺であると推定されている。

・原山廃寺式軒丸瓦は、旧大和川右岸の大県郡・安宿郡を中心に分布する重弁形式軒丸瓦で、西琳寺式軒丸瓦と同様に7世紀中葉に成立する。西琳寺式軒丸瓦とは異なった分布を見せ共伴せず、また大和では認められないことから『在地的瓦文様』と位置付けられ、中央政権で活躍した氏族ではなく在地系氏族の氏寺(原山廃寺式系寺院)で採用されたとされている。

・7世紀第3四半期には原山廃寺式系寺院においても西琳寺式退化形式の軒丸瓦が採用されるようになる。これは『中央的瓦文様』を伝播させることによって、在地系寺院を中央系寺院集団に組み込むという中央政権による統制の結果とされている。

ⅠA類は上田氏分類の原山廃寺式ⅠAb型式にあたる。祖形であるⅠAa型式から派生し、中房の回りに凹線を配するものである。ⅠB類は上田氏分類の原山廃寺式ⅠBa型式にあたる。このⅠBa型式は、ⅠAa型式がⅡA型式の影響を受けて成立したものである。特徴としては間弁が珠文になり、花弁が短くなっている。文様の変化からみて、祖形であるⅠAa型式により近いⅠAb型式、つまりⅠA類が時期的に先行すると思われる。

Ⅱ類は上田氏分類の西琳寺式Be型式にあたる。西琳寺式の花弁が八弁から七弁に退化して成立した太平寺廃寺式(Bb型式)を祖形とし、ここから派生して八弁に戻ったものと位置付けられている。

さて上田氏の編年に照らし合わせると、7世紀中葉～第3四半期に比定されている原山廃寺式(Ⅰ類)が教興寺の創建瓦[註10]となり、7世紀第4四半期に比定される西琳寺式(Ⅱ類)、及び7世紀後半に比定される心合寺式(Ⅲ類)がこれに続く。

原山廃寺式・西琳寺式軒丸瓦の分布の中心である大県郡には、教興寺と同様東高野街道沿いに『河内六寺』(北から三宅寺・大里寺・山下寺・知識寺・家原寺・鳥坂寺)と呼ばれる古代寺院が立地しており、軒丸瓦の類似性からみて、教興寺はこれらの寺院から何らかの影響を受けていたものと思われる。なかでも知識寺(太平寺廃寺)では、ⅠB類(原山廃寺式ⅠBa型式)、及び文様

的にⅡ類(西琳寺式Ｂｅ型式)の原型といえる西琳寺式Ｂｂ型式が採用されており、教興寺に最も影響を及ぼした可能性がある。

限られた部分の調査ではあるが、出土量的には７世紀第４四半期の西琳寺式(Ⅱ類)が優勢で、教興寺は上田氏の言うところの中央系寺院集団に組み込まれた在地系寺院であると評価できる。ただ、今のところＩＡ類(原山廃寺式ＩＡｂ型式)は教興寺、Ⅱ類(西琳寺式Ｂｅ型式)は教興寺・高麗寺(北800ｍ)でのみ確認されており、大県郡では確認されていない。生駒西麓産の胎土の特徴である角閃石が多く含まれていることからも、高安郡で独自に発展した型式と考えられ、高安郡の独自性が窺えるのも事実である。西琳寺式(Ⅱ類)は今のところ教興寺・高麗寺でのみ確認されている。両寺は僧寺－尼寺という関係にあったのかもしれない。

今回の調査では、型式的に軒丸瓦Ⅰ類～Ⅳ類とセットになりうる軒平瓦は出土しなかった。三つ巴文軒丸瓦および軒平瓦は、1269年の教興寺再建以降の瓦であろう。

第３面

10区において第⑤層を除去すると、標高約27.6ｍで石室石材が検出され、第⑦層(第23図17層)上面に構築された古墳１基(**古墳**)を確認した。調査地の地名より当古墳を『**寺池１号墳**』と名付けた。なお石室全体を調査するため調査区を西に拡張した。

古墳

９～10区に位置している。

〈墳丘・周溝〉

墳丘盛土は後述する石室と同様に上部は削平されており、ベース面から高さ約60㎝が遺存しているのみである。盛土は８層の灰黄色極細粒砂～中礫混シルト(鉄分少量)が上層にあたると考えられ、下層が11層の暗灰黄色極細粒砂混シルトである。墓壙は平面、また断面観察においても認められず、墳丘上から墓壙を掘り込む手法ではなく、墳丘形成と並行して石室を構築している。石室の周囲については、西壁断面観察によると、石材の２段目までを積んだ後と、さらに３段目を積んだ後に、墳丘構築に先立って石材を固定するための盛土が成されているようで、この部分は固く締まっている(12～15層)。なおこれらの盛土にブロック状の堆積は認められなかった。

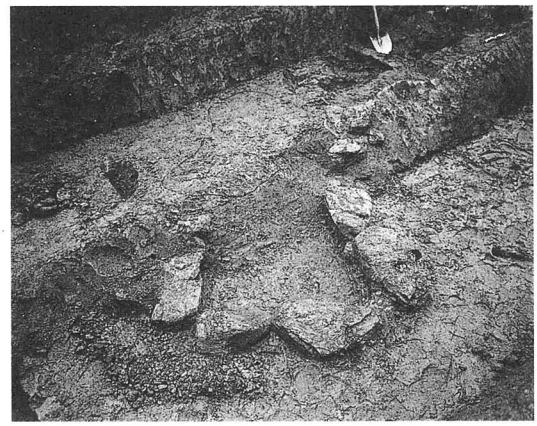
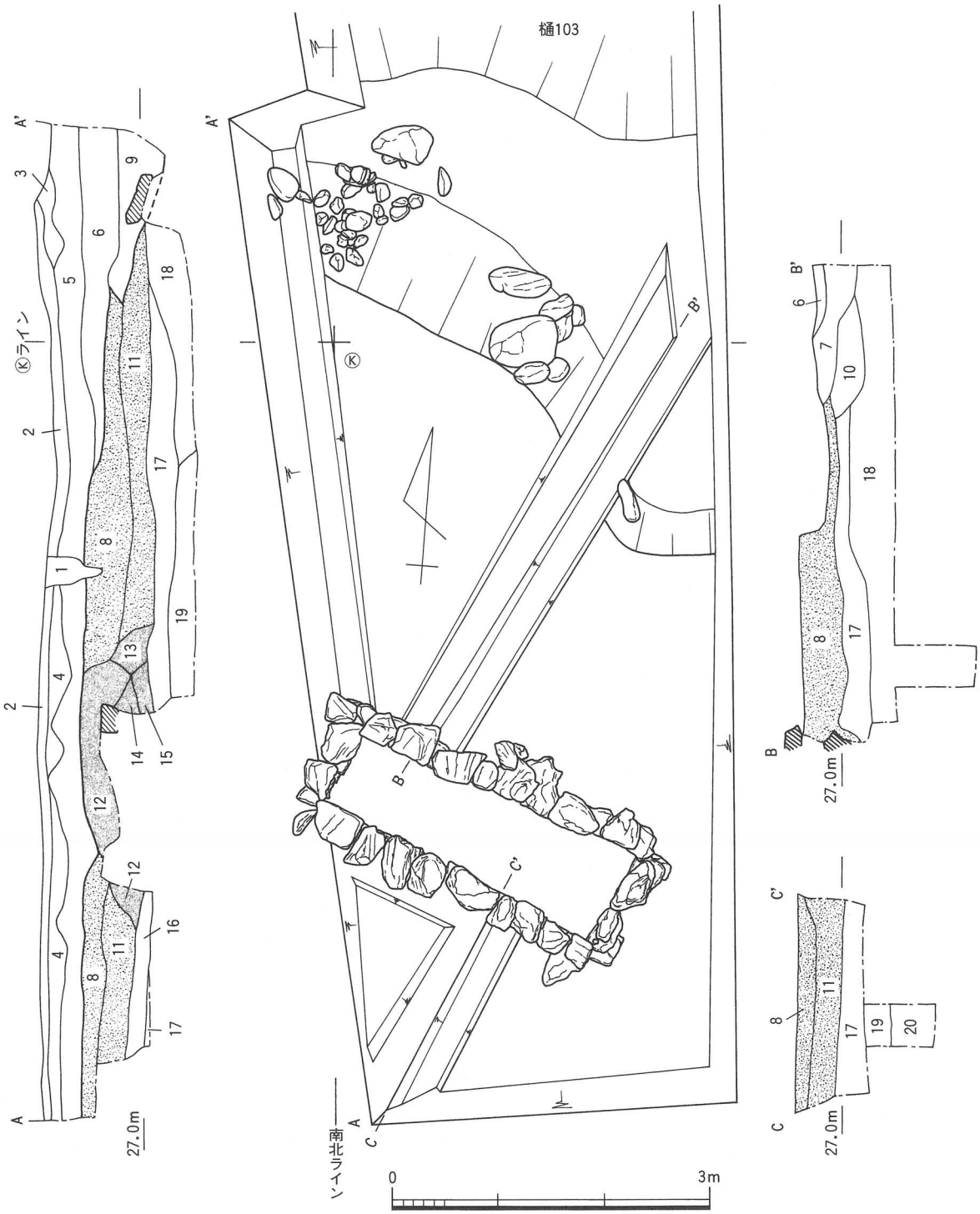


写真３　石室検出状況(南東から)

石室から北へ約4.0ｍ付近からベース面がなだらかに約35㎝下がっており、これが周溝の内側部分にあたると考えられる。周溝埋土(９・10層)は灰色細粒砂～中礫・暗灰色極細粒砂～中礫混粘土質シルトで、拳大～人頭大の石が多量に含まれている。これらの石は葺石の可能性もあるが、元位置を保っていると認定できるものは見られず、周溝に転落したものと考えられる。また周溝上層部には直径70㎝を測るような巨石もみられ、これは後世に石室を破壊した際に投棄された石室石材であると考えられる。周溝外側ラインについては不明で、**樋103**により削平されているのかもしれない。周溝をもたない形式の古墳も考えられ、この場合は周溝とした底部付近が墳丘裾部と捉えられる。

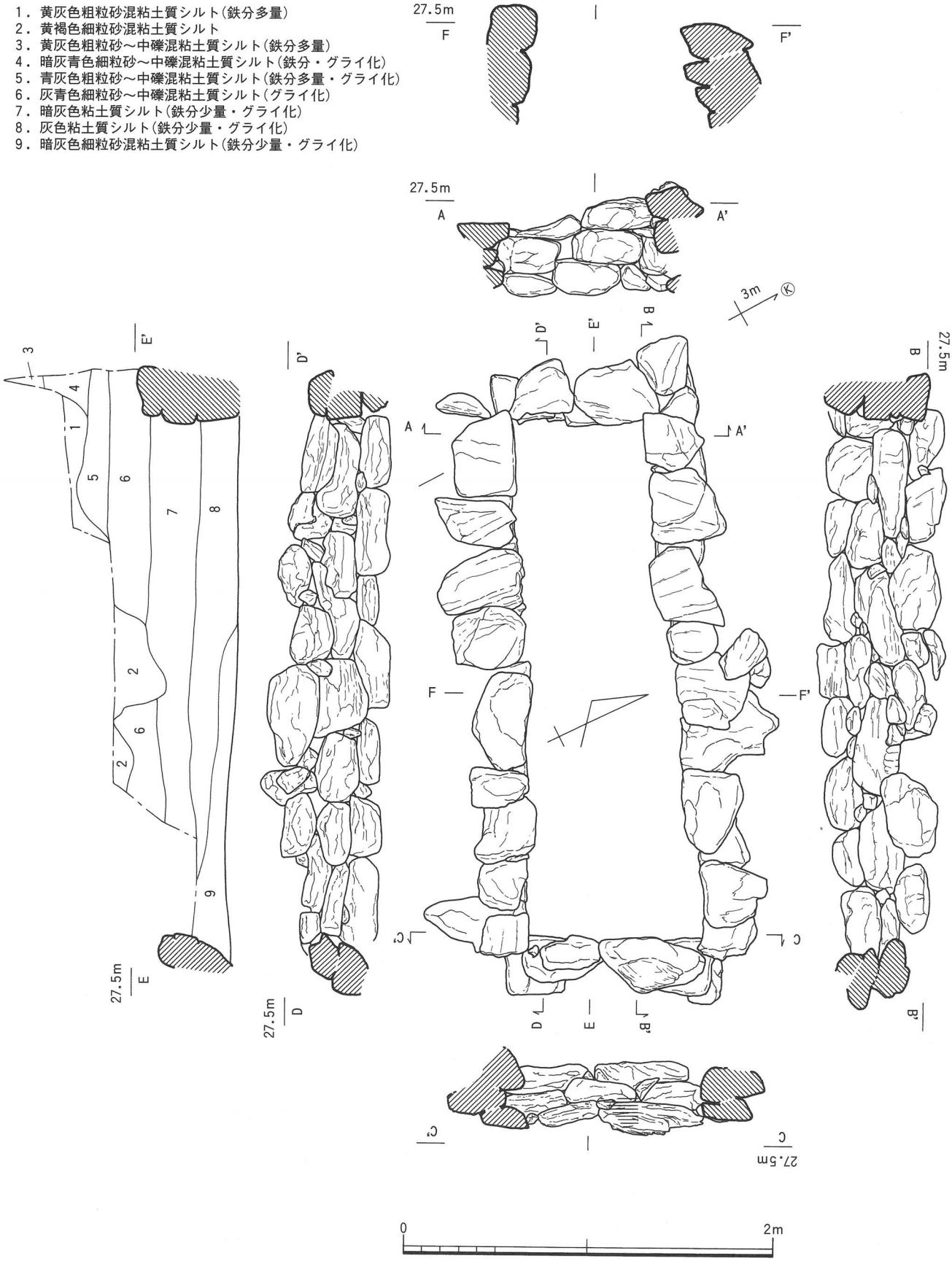
当古墳は直径８～10ｍ程度の円墳あるいは方墳と考えられる。



1．黄灰色細粒砂混粘土質シルト(鉄分)
2．暗灰青色細粒砂～中礫混粘土質シルト(鉄分・グライ化)
3．暗灰黄色中礫混シルト
4．青灰色粗粒砂～中礫混粘土質シルト(鉄分多量・グライ化)
5．灰青色細粒砂～中礫混粘土質シルト(グライ化)
6．暗灰青色細粒砂混シルト(鉄分多量・グライ化)
7．暗灰色粗粒砂～中礫
8．灰黄色極細粒砂～中礫混シルト(鉄分少量)
9．灰色細粒砂～中礫
10．暗灰色極細粒砂～中礫混粘土質シルト
11．灰黄色細粒砂混シルト
12．明褐灰色極細粒砂混シルト(鉄分多量・固く締まる)
13．黄灰色細粒砂混シルト(鉄分)
14．灰黄色細粒砂混粘土質シルト
15．黄灰色細粒砂混粘土質シルト
16．暗灰黄色極細粒砂
17．暗灰褐色極細粒砂～中礫混粘土質シルト
18．暗灰黄色極細粒砂混シルト(固く締まる)
19．暗灰色粗粒砂～中礫多混シルト(固く締まる)
20．暗灰黄色細粒砂(湧水層)

第23図　古墳平面・断面図(S＝1／60)

1．黄灰色粗粒砂混粘土質シルト(鉄分多量)
2．黄褐色細粒砂混粘土質シルト
3．黄灰色粗粒砂～中礫混粘土質シルト(鉄分多量)
4．暗灰青色細粒砂～中礫混粘土質シルト(鉄分・グライ化)
5．青灰色粗粒砂～中礫混粘土質シルト(鉄分多量・グライ化)
6．灰青色細粒砂～中礫混粘土質シルト(グライ化)
7．暗灰色粘土質シルト(鉄分少量・グライ化)
8．灰色粘土質シルト(鉄分少量・グライ化)
9．暗灰色細粒砂混粘土質シルト(鉄分少量・グライ化)



第24図　古墳石室平面・断面図(S＝1／30)

〈主体部〉

主体部は10区に位置し、主軸を座標北から西に約64度振った竪穴式石室である。石室構築面のレベルは標高約27.0mを測る。石室は天井部を含め上部の石材が削平されており、基底石からほぼ3段目までの高さ50～60cmが遺存している。基底石はベースとなる第⑦層を数cm～20cm掘り込んで設置されている。

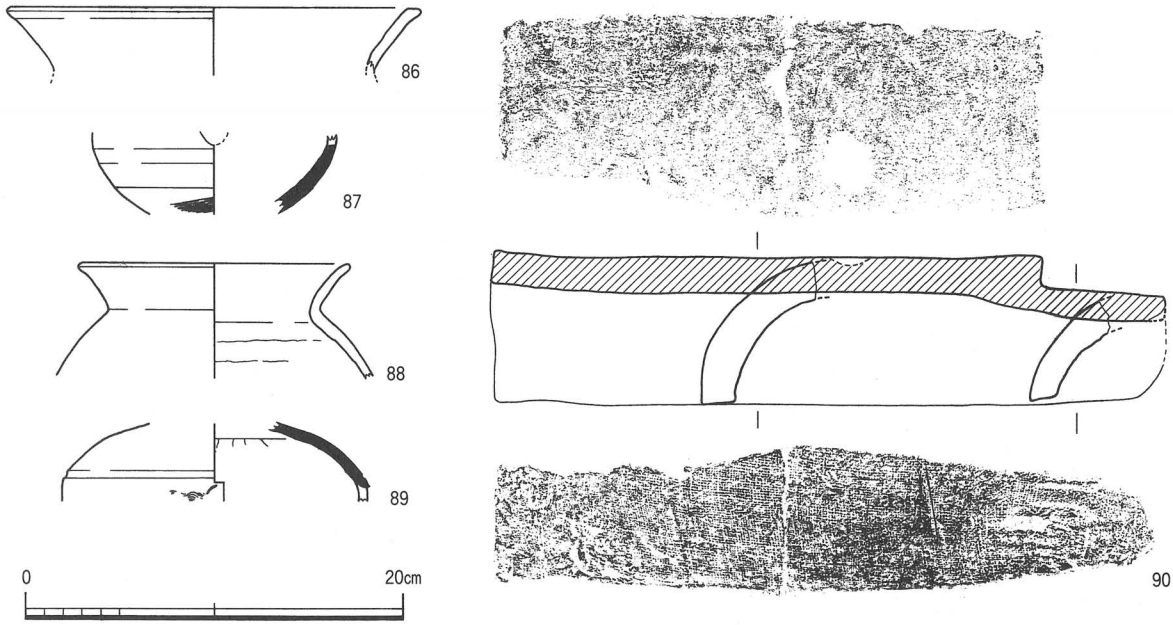
写真4　古墳掘削状況(北西から)

石室の内法規模は床面で長辺約2.90m・西小口辺約0.87m・東小口辺約1.00m、3段目付近でそれぞれ約2.80m・約0.75m・約0.92mを測り、平面では東にゆくほど幅が広くなっている。また断面では特に横断面が持ち送り状になっているが、意図的なものか、あるいは上部削平に伴い石材が内側に倒れ込んだものなのかは不明である。

石材は平面30～50cm・厚さ10～20cmのやや扁平な自然石を使用している。石材の平坦面を意識的に内側に向けているようであるが、石材の大きさによる使い分けや積み方に規則性は認められない。石材の隙間には小形の石を充填している。石室内埋土は鉄分を含みグライ化が著しく、ほぼ水平な堆積状況である。

〈遺物〉

石室内埋土から副葬品や棺材・鉄釘等は検出されなかった。出土遺物は、弥生時代後期～古墳時代前期布留式期に比定される土器39点、須恵器瓹1点の他、瓦器椀の小片1点がある。弥生時代後期～古墳時代前期布留式期の土器については小片がほとんどであり、石室構築の際に第⑦層から捲き上げられたものと捉えられよう。86・87を図化した。86は古墳時代前期布留式期新相に比定される土師器甕口縁部である。生駒西麓産の胎土である。87は須恵器瓹で、底体部の小片で



第25図　古墳出土遺物(S＝1／4)

ある。底部外面に平行タタキを施す。６世紀前半のものか。

周溝埋土からは弥生時代後期～古墳時代前期布留式期に比定される土器12点、須恵器13点、時期不明の土師器片21点の他、瓦６点が出土した。88～90を図化した。88は土師器甕で、剥離のため調整等は不明である。体部内面に粘土接合痕が明瞭に認められる。89は須恵器瓹の肩部で、外面に灰が被る。体部中位文様帯に波状文を施すもので、５世紀代に収まるものと思われる。90は丸瓦である。凸面は縄目タタキをほぼナデ消し、凹面は布目で前端縁約５cmが雑にナデられている。全長35.8cm・胴部長29.0cmを測る。

写真５　古墳調査状況（南東から）

石室・墳丘を覆う第⑤層、及び周溝埋土には多量の瓦等が含まれている。石室内出土の瓦器椀を考え合わせて、当古墳は鎌倉時代頃に削平されたものと考えられる。

第４節　寺池１号墳の竪穴式石室の石材

奥田　尚

１．はじめに

調査により、偶然、竪穴式石室の下部が発見されたのであるが、八尾市内で竪穴式石室の石材、規模が確認されたのは初めてである。西ノ山古墳や心合寺山古墳には竪穴式石室が予測されるが、どのような石材が使用されているのか、また、どのような石室でどのような石組みであるのか等については皆無である。柏原市では竪穴式石室が多く確認され、かつ、石組みや石種についても調査が成されている。古墳の規模が小さいためであるのか、理由は不明であるが、板石を使わずに花崗岩の自然石が使用されている。

石材は基底から３段ぐらい残存する。石材を裸眼で観察した。

２．石材の石種

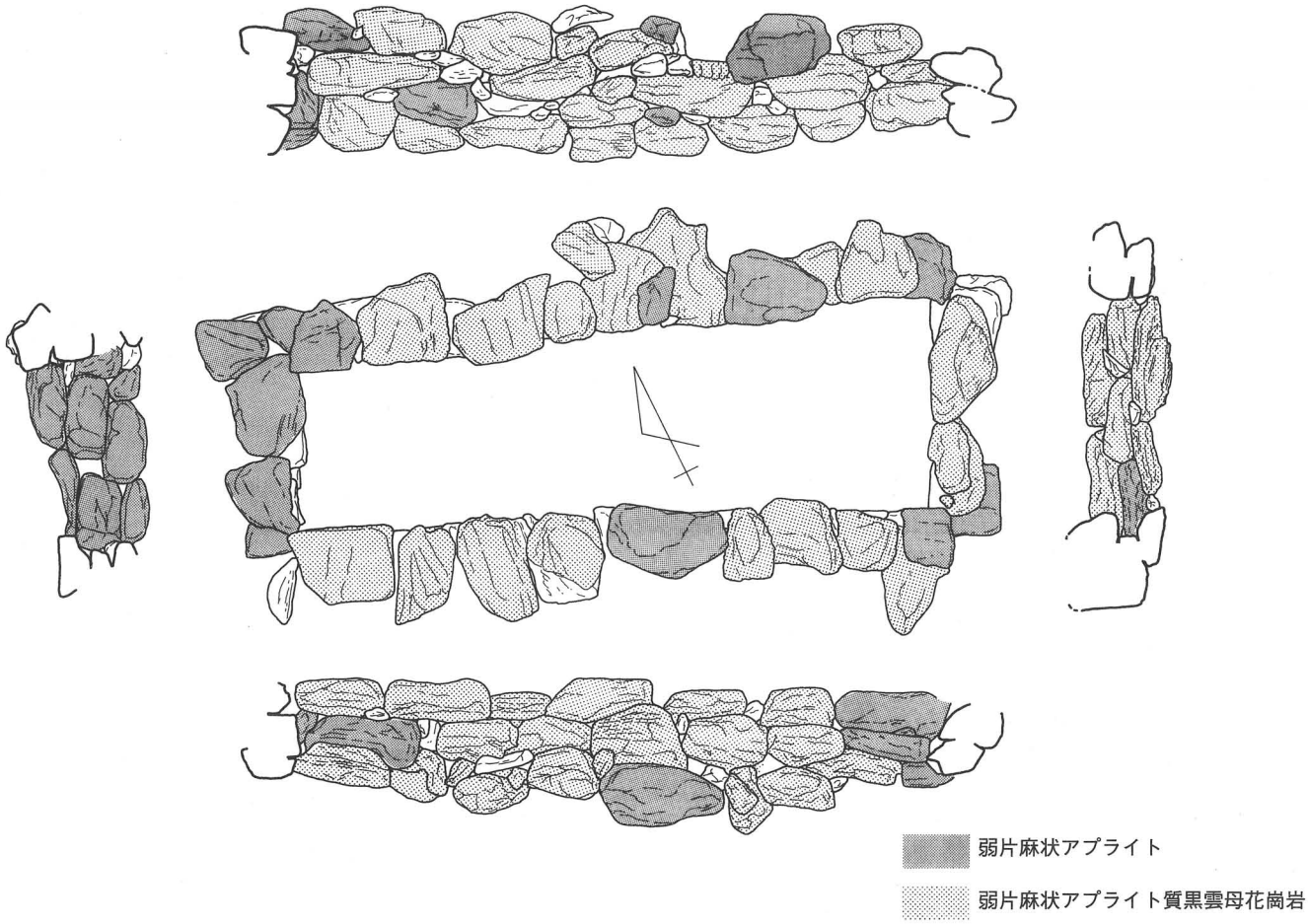
石室と墳丘の裾部と推定される付近に並んでいた葺石と推定される石材を観察した。石種は弱片麻状アプライト質黒雲母花崗岩と弱片麻状アプライトである。石室と葺石とにはおなじ石種が使われている。石種の特徴について述べる。

弱片麻状アプライト質黒雲母花崗岩：色は灰白色、礫形が角・亜角である。僅かに片麻状を示す。石英・長石・黒雲母からなる。石英は無色透明、粒径が１～２㎜、量が中である。長石は灰白色、１～３㎜、量が非常に多い。黒雲母は黒色板状、粒径が１～1.5㎜、量がごく僅かである。

弱片麻状アプライト：色は白色、礫形が角・亜角である。僅かに片麻状を示す。石英、長石からなる。石英は無色透明、粒径が１～２㎜、量が中である。長石は灰白色、粒径が１～２㎜、量が非常に多い。

３．採石地

遺跡付近は中位段丘に位置する。池等に使用されている石材は、東方の山地から供給された弱片麻状アプライト質黒雲母花崗岩や弱片麻状アプライトである。東方の生駒山地に分布する岩石



第26図　古墳石室の石材

種は地域により異なる。生駒山から鳴川峠付近までには斑糲岩が分布する。鳴川峠から高安山の北方までには弱片麻状黒雲母花崗岩が分布し、平群町福貴畑から大窪の東部には閃緑岩、高安山付近には縞状をなす細粒の片麻状黒雲母花崗岩や斑状片麻状黒雲母花崗岩が分布する。黒谷から神宮寺にかけては弱片麻状アプライト質黒雲母花崗岩や弱片麻状アプライトが分布し、部分的に斑状を示す部分もある。このような岩石分布の影響をうけて、西へ流出する谷には岩石分布と同じ礫がみられる。

石室に使用されている石材の石種は寺池付近にみられる石材や東方の谷にみられる礫の石種と同じであり、岩相も同じである。また、礫形も同じであることから、付近の石を集めて造った石室であるといえる。

4．おわりに

竪穴式石室が使用される終わりの時期に造られた奈良市野神古墳の場合、石室の壁石に川原石が積まれ、和歌山市大谷古墳では石室がなく、石棺が直接埋められている。このような時期には竪穴式石室が退化して、石室が造られない場合もあり、特別に決められた場所から石材を運んでいないことが多い。今回の発掘例からだけでは、この高安山麓では普通の例か、特別なものか、時期を示すものか結論を得難い。今後、同様な石室が発見されることを期待したい。

第３章　第２次調査（ＫＯ92－２）

第１節　調査方法

今回の調査は、当調査研究会が教興寺跡内で行なった第２次調査である。第１次調査と同様、寺池改修工事に伴う調査で、調査地は寺池の南東部護岸の内側に沿っている。調査区の平面形はＬ字形を呈しており、規模は幅約6.0m、長さは東西約26.0m・南北約15.0m、面積約190㎡を測る（調査地については**第１・２図**参照）。

地区割については、まず調査区の平面形に合わせた任意の10mメッシュ上の交点に、Ｌ字形にポイントを設定した（西からⒶ～Ⓓ）。そして地区名は、Ⓑ以西を１区、Ⓑ～Ⓒ間を２区、Ⓒ以北を３区とした。なお、このメッシュの南北ラインは、座標北から西に約3.9度振っている。

調査にあたっては、池の底部から0.3～0.4mを機械掘削し、以下の1.0～2.0mについては人力掘削により調査を実施した。

土層断面については調査地外周にあたる３区北壁・東壁、２区南壁、１区南壁・西壁、そして各地区間に残した畦により観察した。

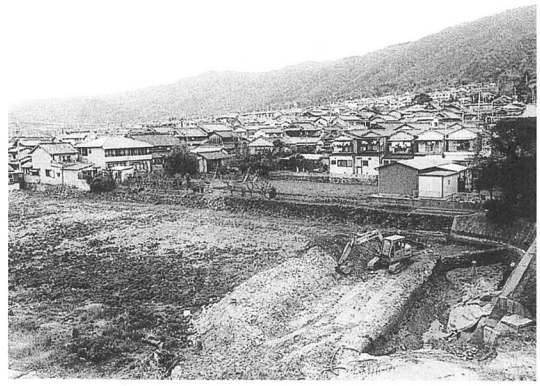


写真６　調査地から東方を望む

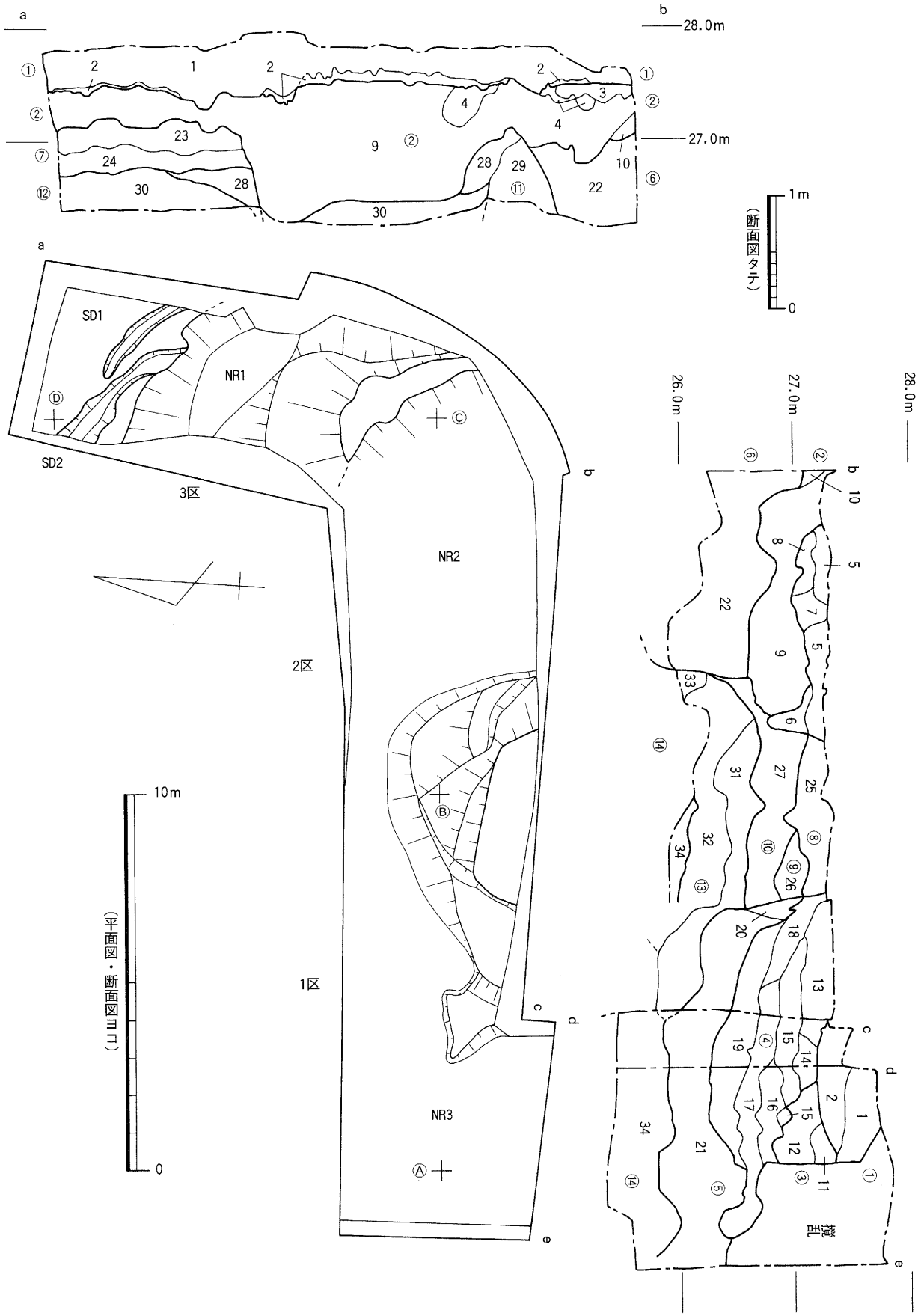
表８　基本層序対応表

基本層序	層番号	層名
①	1	暗青灰色粘土～極細粒砂の互層
	2	暗灰黒色粗粒砂～極細粒砂混粘土質シルト（腐植土）
②	3	灰色粗粒砂～中礫
	4	灰青色シルト混極細粒砂
	5	暗灰黄色シルト混極細粒砂
	6	暗灰色中礫混極細粒砂
	7	黄灰色中礫混極細粒砂
	8	暗褐色シルト混極細粒砂
	9	灰褐色粗粒砂～大礫（人頭大）
	10	青灰色シルト混極細粒砂
③	11	暗灰黄色極細粒砂混粘土質シルト
	12	暗灰色中礫～極細粒砂
④	13	暗灰色中礫～粗粒砂混粘土質シルト
	14	暗灰色中礫～極細粒砂混粘土質シルト
	15	暗灰黄色極細粒砂混粘土質シルト
	16	暗灰色中礫混粘土質シルト
	17	暗灰色極細粒砂混粘土質シルト
	18	暗灰黒色中礫～極細粒砂混粘土質シルト
	19	暗灰褐色シルト～粗粒砂（ラミナ）
⑤	20	暗灰色中礫～極細粒砂混粘土質シルト
	21	暗灰褐色粗粒砂～大礫（人頭大）
⑥	22	暗青灰色粗粒砂～巨礫（～50cm）
⑦	23	暗褐灰色細粒砂混粘土
	24	青灰褐色細粒砂混粘土
⑧	25	暗灰褐色粗粒砂～中礫混シルト
⑨	26	暗灰黄色粗粒砂～中礫混粘土質シルト
⑩	27	暗青灰色極細粒砂～中礫混粘土質シルト
⑪	28	青灰色中礫混粘土質シルト
	29	暗灰褐色粗粒砂～中礫混シルト
⑫	30	青灰色粘土混粗粒砂～大礫（拳大）
⑬	31	青灰色粗粒砂混粘土質シルト
	32	暗灰黄褐色粗粒砂混粘土
	33	暗褐色粗粒砂混粘土質シルト
⑭	34	暗褐灰色粗粒砂～大礫（人頭大）

第２節　基本層序

ここでは基本層序は第○層と表記し、個々の層名と区別した（**表８**参照）。

第①層は寺池の堆積土にあたり、底部には腐植土が堆積している。近代までの遺物を含む。第②層はＮＲ１の堆積土で、３区で検出した。溝遺構を覆い、ＮＲ２の上部にも及んでいる。人頭大までの礫を多量に含む砂礫層の第９層は土石流によるものと考えられ、上部にはシルト～極細粒砂層も見られる。奈良時代頃までの遺物を含んでいる。第③層は１区で見られ、西に行くほど層厚を増す。ＮＲ３の埋没の最終堆積部分であるが、落ち込み



第27図　調査区平面・断面図（S＝1／150・断面縦1／50）

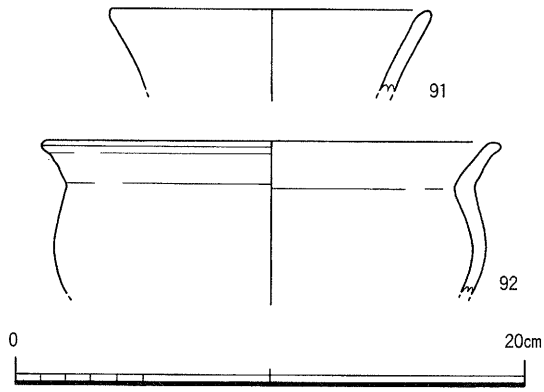
等の遺構である可能性もある。弥生時代後期の土器片を多く含んでいる。第④層はＮＲ３の上部堆積部分で、中礫～極細粒砂を多く含む粘土質シルトを基調とする。最上層の第13層からは古墳時代前期の土器片が出土している。第⑤層はＮＲ３の下部堆積層で、第９層と同様に土石流による堆積と考えられ、層相も類似している。縄文土器を含んでいる。ＮＲ２に堆積する第⑥層も土石流による堆積であろうが、径50cmを測るような巨礫が含まれる。時期不明の土師器・須恵器の他、縄文土器を含んでいる。第⑦層は３区で検出した溝遺構のベース層となる粘土層である。遺物は出土していない。第⑧層はＮＲ２・３の肩となるシルト層で、縄文土器、及び弥生時代後期の土器を含んでいる。第⑨・⑩層は縄文土器を多く含んでおり、第⑬層が縄文時代後期～晩期のベース層であろう。第⑪層はＮＲ２の東肩となる層で、縄文土器を含んでいる。第⑫層以下からは遺物は出土していない。第⑫・⑭層は砂礫層で、縄文時代後期以前の土石流・洪水層である。

第３節　検出遺構と出土遺物

３区北部の第⑦層上面で溝２条（ＳＤ１・２）を検出した。また調査区の大部分を占める埋没した河川（ＮＲ１～３）と、縄文時代の包含層を検出した。河川については、検出状況からみて北側で全てが合流するものと考えられ、谷状の地形が考えられる。河川はいずれも大礫を主とする砂礫層で埋没しており、流水状態は確認できなかった。

ＳＤ１

北西－南東方向のやや弧状を呈する溝で、検出長約2.9m・幅約40cm・深さ10～20cmを測る。埋土は拳大の礫を多量に含む灰褐色砂礫で、この遺構面を覆い、また南部のＮＲ１に堆積する第９層と一連のものである。古墳時代前期頃と考えられる土器片が１点(91)出土している。91は土師器広口壷の口縁部と考えられる。調整は不明である。



第28図　ＳＤ１・ＮＲ１出土遺物（Ｓ＝１／３）

ＳＤ２

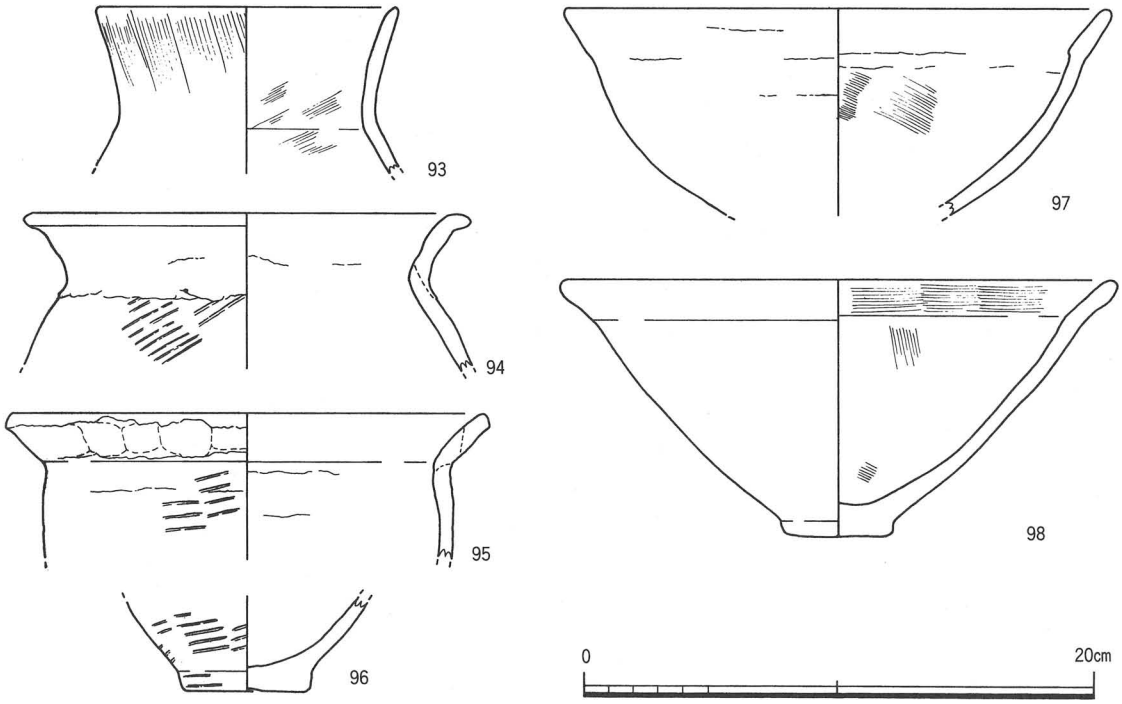
ＳＤ１南側に平行する溝で、南部でＮＲ１に取り付いている。検出長約4.1m・幅30～80cm・深さ約10cmを測る。埋土はＳＤ１と同様である。遺物は出土していない。

ＮＲ１

３区で検出した河川で、幅約５ｍを測る。北側は第⑦層、南側は縄文土器を含む第⑪層を肩としている。堆積土は第９層の灰褐色粗粒砂～大礫（～人頭大）で、層厚約1.1ｍを測る。層位的に見てＮＲ２より埋没の時期は下る。堆積土からは縄文土器・弥生土器・庄内式土器・埴輪片・奈良時代頃の土器が出土している。土師器鉢(92)を図化した。調整は口縁部～体部内面ヨコナデ、体部外面ナデである。古墳時代後期～奈良時代のものであろう。

ＮＲ２

２区の大部分を占める河川で、幅約８ｍを測る。堆積土は、上層が第５層～第８層のシルト～極細粒砂層、中層がＮＲ１の堆積土である第９層の灰褐色粗粒砂～大礫（～人頭大）、下層が第22



第29図　第③層出土遺物（S＝1／3）

第30図　第⑬層上面遺物出土状況（S＝1／20）

層の暗青灰色粗粒砂～巨礫（～50cm）である。縄文土器、時期不明の土師器・須恵器を含んでいる。

ＮＲ３

１区の大部分を占める河川で、幅９ｍ以上を測る。堆積土は、上層が第13～19層の中礫～極細粒砂を多く含む粘土質シルト、下層が第21層の暗灰褐色粗粒砂～大礫（～人頭大）である。上層は

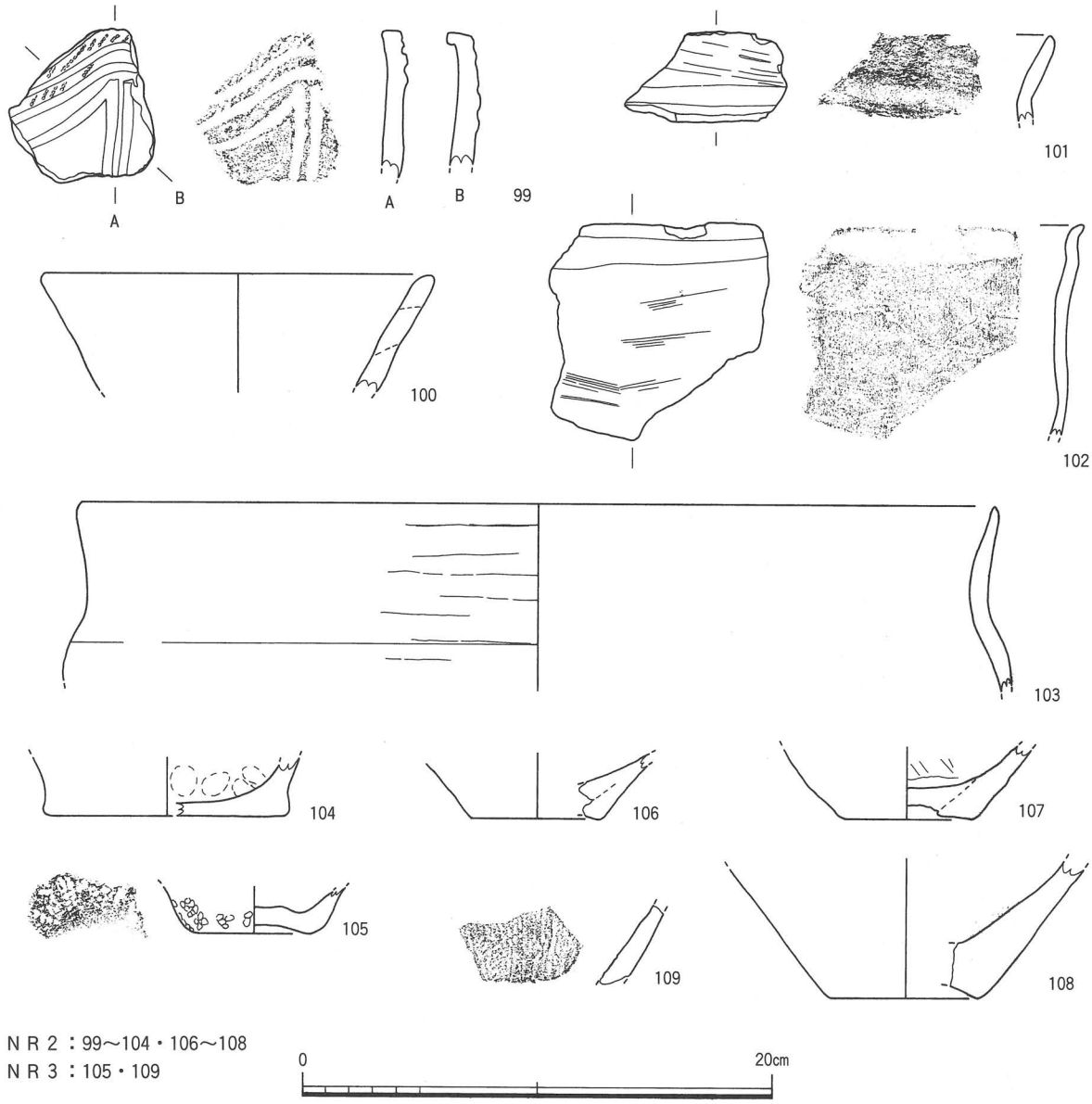
層厚０～1.0mを測り、西部ほど厚く堆積している。下層からは縄文土器が少量出土している。上位の第③層出土土器からみて弥生時代後期以前に埋没している。

第③層出土遺物

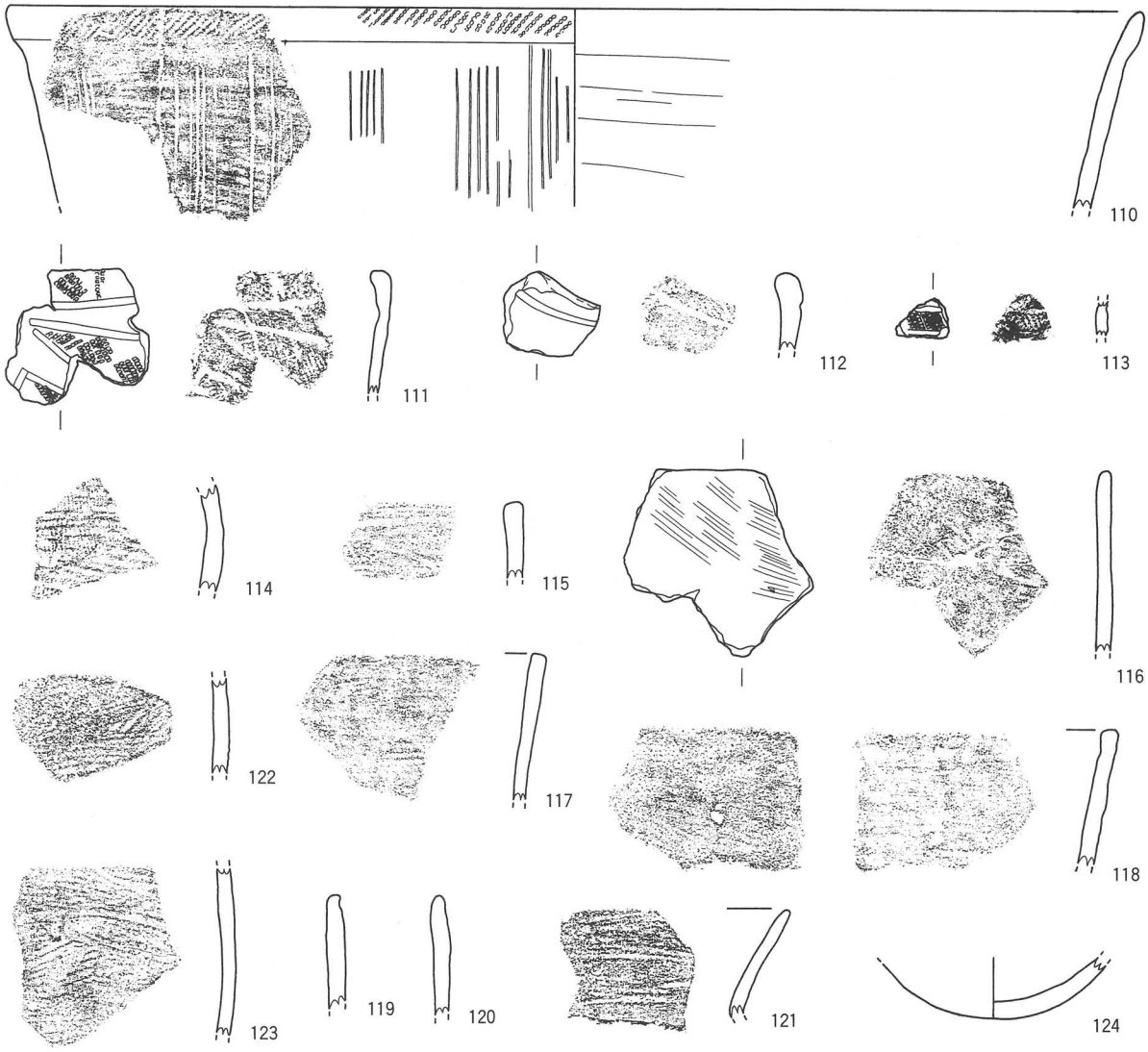
壷(93)・甕(94～96)・鉢(97・98)を図化した。93は外面タテハケ、内面ヨコハケを施す。94・95は口縁部や頸部に粘土接合痕を明瞭に残す雑な作りで、95では口縁部のヨコナデも施されていない。96は甕底部である。97・98は口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ、内面ハケ後ナデで、98の口縁部内面はハケである。98は同一固体と思われる上部と下部を図上で復元したもので、口径22.0cm・器高10.1cmを測る。これらの土器の時期は弥生時代後期に比定される。

縄文土器

調査では、河川の堆積土、１～２区間の南部で確認した第⑧～⑩層、及び３区の第⑪層から縄文土器が出土した（99～129)。第⑧～⑩層はＮＲ２～ＮＲ３間の南壁側に、4.5×1.5mの規模で



第31図　ＮＲ２・３出土遺物（Ｓ＝１／３）



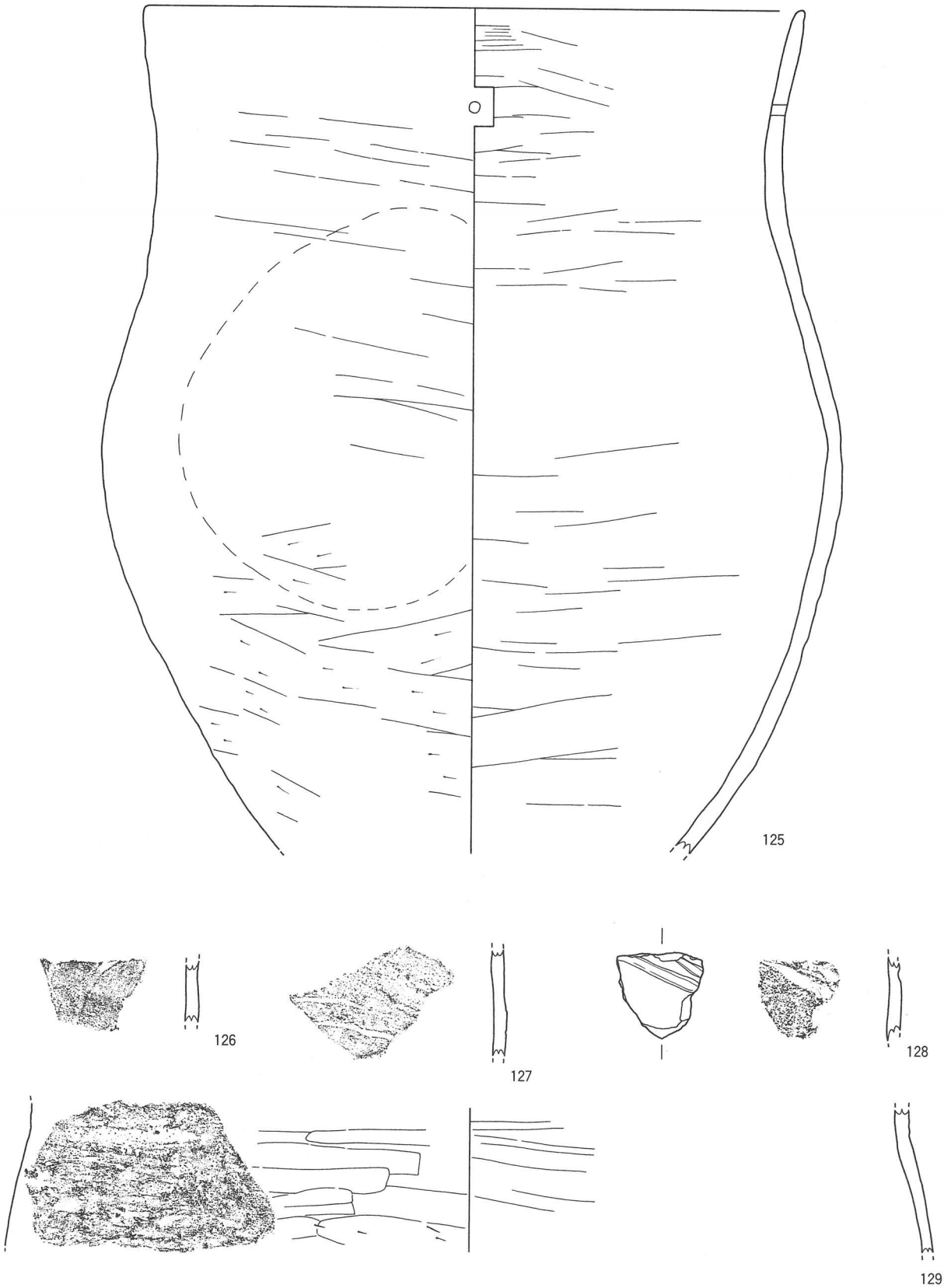
第⑧層：111
第⑨層：117・118・120・121・124
第⑩層：110・112～116・119・122・123

0　20cm

第32図　第⑧～⑩層出土遺物（S＝1／3）

北に舌状に張り出す状況で、また第⑪層はＮＲ１～ＮＲ２間にわずかに遺存している。このうち第⑩層中（第⑬層上面）では破片がまとまった状況が確認され、第⑬層上面が縄文時代の生活面であった可能性が高い。土器の出土レベルは標高26.7～26.8mを測る。縄文土器はほとんどが小破片であり、時期等不明な点が多いが、無文の粗製土器が多くを占め、他に後期の中津式土器・縁帯文土器がみられる。出土地点は、ＮＲ２－99～104・106～108、ＮＲ３－105・109、第⑧層－111、第⑨層－117・118・120・121・124、第⑩層－110・112～116・119・122・123・125、第⑪層－126～129である。

99は沈線で区画された波状口縁部に擦消縄文を施す精製の深鉢である。口縁端部は波状口縁の谷部分では内側に屈曲している。100～103はナデ調整や条痕文からなる粗製土器である。100は浅鉢であろう。調整はナデで口径16.8cmを測る。101～103は深鉢である。101は口縁が外反する



第⑩層：125
第⑪層：126～129

第33図　第⑩・⑪層出土遺物（S＝1／3）

形態で、頸部外面がやや窪む。口縁端部については不確実でさらに伸びるのかもしれない。口縁部外面は二枚貝条痕の可能性があり、内面はナデである。102の外面には繊維束によると思われる条痕が認められる。101・102は外面に煤が付着する。103は口径39.0cmに復元でき、102と共に波状口縁の可能性がある。104～108は底部で、104は平底、105～108は上げ底状を呈するが、105のみ底部～体部の屈曲が曲線的で他と異なる。105の外面には縄文、109の外面には縦方向のヘラミガキが施されているが、他は調整不明である。これらの土器の時期については、99は中津式土器で縄文時代後期初頭に比定される。縄文を施す105も後期のものであろう。101の頸部外面の窪みが凹線によるものとすると、晩期中葉の滋賀里Ⅲa式の特徴と捉えられ、102・103の形態も同時期に比定できることから、他の粗製土器についても、およそこの頃までの時期が考えられよう。

110～113は縄文を施す精製土器である。110は縁帯文土器で、肥厚させた口縁端部外面に縄文を施す。頸部外面は横方向の二枚貝条痕の後、６本一組の垂下条線を施し、内面はナデである。口径46.8cmを測る。縄文時代後期中葉の北白川上層式２期に比定される。類例として周辺の遺跡では、東大阪市縄手遺跡で多く出土している。111～113は擦消縄文を施す精製土器で、同一個体の可能性がある。後期初頭の中津式土器に比定されるが[註11]、ＮＲ２出土の99に比して沈線は細く浅い。114～125は粗製土器である。114は体部片で、外面調整は横方向の貝殻腹縁押し引き文－いわゆる擬似縄文の後、条痕文と思われる。内面はナデ。115～121は口縁部で、121のみ口縁が外反する器形である[註12]。115～119は外面二枚貝条痕文と思われ、116は内面もその可能性がある。119・120は調整不明。122・123は体部片で、外面二枚貝条痕文、内面ナデである。124は丸底を呈する底部で、内外面ナデある。114～124の時期は不明である。125は粗製の深鉢である。第31層上面（標高26.7～26.8m）で約１m四方の範囲に約１/２個体分の破片が散在していたものである。調整は工具による横方向のナデで、体部外面下位はヘラケズリである。口縁端部から５cmの位置に、焼成前と思われる直径0.7cmの円孔一個を穿っている。外面には直径約20cmを測る黒斑がある。法量は口径33.5cm・体部径37.6cm・残存高42.7cmを測る。縄手遺跡では同様の器形の粗製深鉢が縁帯文土器に共伴しており、後期中葉の北白川上層式２期に比定されている。この例では同じく円孔が焼成後に穿たれている。晩期中葉の滋賀里Ⅲ式頃にも認められる器形であり時期は明確でない。

126～128は平行沈線を施す体部片で、調整はいずれもナデである。128は太く深い沈線の様相や胎土・焼成が、ＮＲ２出土の99と酷似しており、同一個体の可能性が高い。99も本来第⑪層のものと考えられる。129は粗製深鉢の頸部～体部片である。調整は外面が頸部横方向のナデ、あるいはヘラナデ、体部横方向のヘラケズリ、内面は横方向のナデである。

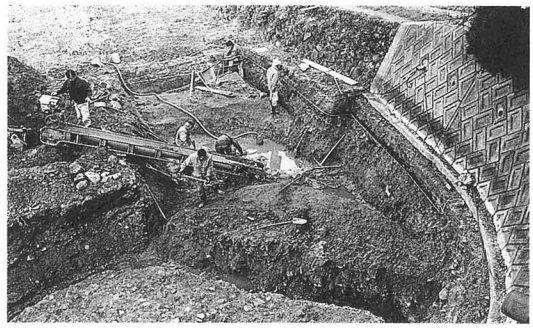


写真７　調査状況（南から）

第４章　まとめ

今回の第１次・第２次調査は池内の調査であり、調査地の大部分が池の堆積土で占められていた。このため面的に捉えられた部分はごく小面積であったが、縄文時代～近世の遺構・遺物を検出した。

第２次調査では縄文時代後期(晩期を含む可能性あり)の遺物包含層が確認され、生駒西麓地域における縄文時代の集落を考える上で重要な成果といえる。土器の出土状況から第⑬層上面が当該期の生活面であると考えられ、また出土した土器は遺存状態の良好なものが多く、当地の南部に集落が広がるものと考えられる。生駒西麓地域における周辺の縄文時代の集落としては、北の東大阪市の縄手遺跡・馬場川遺跡、八尾市域の水越遺跡・恩智遺跡、南の柏原市域[註13]の大県遺跡が、標高20m前後に営まれている。なお大県遺跡は早期、恩智遺跡は前期、他の遺跡は中期からの遺跡とされている。今回の調査により、後期からの郡川遺跡が新たに加わったことになる。調査地は、水越遺跡と恩智遺跡の中間点(両遺跡から約１km)に位置している。この包含層を削平する土石流により埋没した河川（ＮＲ１～３）が、調査区のほぼ全域で確認された。埋没の順序はＮＲ３→ＮＲ２→ＮＲ１と考えられ、時期は出土遺物から見てＮＲ３が弥生時代後期以前、ＮＲ２・１は古墳時代～奈良時代頃までの幅があり明確ではない。埋没状況から見て当該期の当地は、複雑に河川が入り組む急峻な地形の扇状地先端部付近であったことが窺われる。

第１次調査で検出した**古墳**－寺池１号墳－は、高安古墳群において初めて確認された竪穴式石室を主体部にもつ古墳である。石室・周溝内からは瓦器椀・瓦が出土しており、中世頃に削平されたようである。寺池１号墳に伴うと考えられる遺物は、石室・周溝から小片がわずかに出土したのみであるが、時期的には５世紀末～６世紀前半までに収まるものと捉えられる。

高安古墳群内では当地の北部に、すでに破壊されており明確な地点等も不明であるが、服部川地域の標高約170mに所在した森田山古墳が竪穴式石室であった可能性が指摘されている。出土した須恵器から５世紀末～６世紀初頭の時期が考えられている。また当高安古墳群の南に[註14]隣接する平尾山古墳群において、寺池１号墳に類似する石室を有する古墳が検出されている。この平野・大県第27支群３号墳は、斜面下方の谷底部付近で検出された独立墳で、立地条件も[註15]共通している。主体部は『無袖の横穴式、いわゆる竪穴系小石室』[註16]で、50cm位までの割石を使用している。規模は長さ3.06m・幅1.02～1.32mで、寺池１号墳の2.90m・0.87～1.00mより一回り大きいものである。時期的には供献された須恵器から６世紀前半に比定され、石室形態からも平尾山古墳群内では古い部類に位置付けられている。なおこの古墳については、約30m離れた丘陵頂部に構築された横穴式石室墳と主従関係にあり、被葬者の階層差を示しているという指摘がある。

高安古墳群内北部の楽音寺・大竹古墳群は、古墳時代前期から中期・後期まで系譜を辿[註17]れる古墳群である。これに対し南部は中期末～後期初頭の郡川西塚古墳・郡川東塚古墳を盟主墳とする新たな系譜の古墳群とされ、この東方の生駒山西麓部には続いて群集墳が形成されてゆく。郡川西塚古墳・郡川東塚古墳は寺池１号墳の北約600mに、また西約400mには中期末の塚本塚古墳が、いずれも低地に立地しており、寺池１号墳はこれらの古墳と併行かあるいはこれに続く時期に築かれている。寺池１号墳の東方の丘陵は高安古墳群内でも比較的古墳の少ない地域でもあり、同

時期の横穴式石室墳とは約800m、また時期の下る古墳とでも約200mの距離がある。立地条件から見ても群集墳を構成する古墳というより、これらの古墳と同様の独立墳として捉えるべきであろう。石室形態では、これらの古墳には横穴式石室が採用されており、この点では平野・大県第27支群３号墳と同様の性格を持つ古墳なのかもしれない。寺池１号墳は高安古墳群内では古く位置付けられると考えられ、横穴式石室導入期における竪穴式小石室を有する独立墳であると今のところ理解しておきたい。森田山古墳とともに、高安古墳群の成立過程を考えるうえで重要な古墳であるといえよう。

遺物では第１次調査において、飛鳥時代～中世にわたる教興寺に関連すると思われる大量の瓦が出土している。ほとんどが池の堆積土からの出土であるが、従来知られている軒丸瓦の他、高麗寺跡・心合寺跡、さらに若江郡西郡廃寺(萱振遺跡)出土の軒丸瓦と同意匠のものや初例となるものが認められる。飛鳥時代の軒丸瓦の類似性から、当高安郡の教興寺と南の大県郡に所在する寺院との密接な関係が確認されたといえる。

創建時、及び中世頃の教興寺の位置については、寺池周辺が推定地となっている。第１次調査地において、多量の瓦や銅銭「和同開珎」が出土していることからも間違いないもの[註18]と思われる。第２次調査地においても同様の状況を想定していたところ、瓦の出土は極少量であった。今回の調査における瓦の出土傾向からみて、少なくとも教興寺は寺池の南東部には存在していないといえ、寺池の西部～南西部が想定される。なお寺池は鎌倉時代頃の整地層と考えられる第⑤層を肩としており、寺池が現在の姿になるのは鎌倉時代以降であるといえる。整地の際には池の掘削に伴う土を盛った可能性が高く、第⑤層中にも多量の瓦が含まれていることからも、教興寺の位置については現在の寺池の位置を含めて検討する必要があろう。第⑤層中では特異な遺構として**石組201**が検出された。性格は明確ではないが寺池に付随する遺構であろう。

近世の遺構としては３基の樋（**樋101～103**）が検出された。現在の樋（**樋102**）は寺池西岸の中心付近から西側に通じているが、**樋101**の検出により、以前には北西角に設置されていた時期のあることが確認された。

註

註１　棚橋利光　1989「奈良街道」『歴史の道調査報告書　第四集』大阪府教育委員会
註２　吉岡　哲　1988「生駒山地西麓の古代寺院と高安城」『八尾市史（前近代）本文編』八尾市役所
註３　成海佳子　2000「Ⅷ　心合寺山古墳第３次調査（ＳＯ98－３）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告65』財団法人八尾市文化財調査研究会
註４　永井久美男　1996『日本出土銭総覧　1996年版』兵庫埋蔵銭調査会
註５　八尾市史編集委員会　1977『八尾市史　文化財編』八尾市役所
註６　広瀬雅信・他　1992「萱振遺跡」『大阪府文化財調査報告書第39輯』大阪府教育委員会
　　原田昌則　1996「Ⅱ萱振遺跡第７次調査（ＫＦ88－７）」『萱振遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告52』財団法人八尾市文化財調査研究会
註７　前掲註５
註８　福永信雄　1993『若江遺跡第38次発掘調査報告』財団法人東大阪市文化財協会
註９　上田　睦　1988「いわゆる王仁後裔氏族とその寺院－出土瓦からみた古代氏族の動向－」『網干善教先生華甲記念考古學論集』網干善教先生華甲記念会
註10　上田　睦　1997「中南河内の古代寺院」『第１回摂河泉古代寺院フォーラム　摂河泉の古代寺院とその周辺』泉南市教育委員会・摂河泉古代寺院研究会・摂河泉文庫

註11　芋本隆裕　1987「第２章　縄手遺跡第10次調査」『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要28　縄手遺跡・若江遺跡の調査－昭和61年度－』東大阪市教育委員会

註12　庄内昭男　1994「4.施文原体　貝殻文」『縄文文化の研究５　縄文土器Ⅲ』雄山閣出版

註13　大野　薫　1997「生駒山西麓域の縄紋集落」『河内古文化研究論集』柏原市古文化研究会編

註14　原田　修・久貝　健・島田和子　1976「特輯　清原得巌所蔵考古資料図録」『大阪文化誌　第２巻第２号』財団法人大阪文化財センター

註15　北野　重　1992「平尾山古墳群平野･大県支群－ミニゴルフ場建設に伴う－1991年度」『柏原市文化財概報　1991－Ⅲ』柏原市教育委員会

註16　竪穴系横口式石室の一形態という評価もある。
安村俊史　1996「高井田山古墳をめぐる諸問題」『高井田山古墳　柏原市文化財概報　1995－Ⅱ』柏原市教育委員会

註17　前掲註16

註18　吉岡　哲　1993「河内国高安郡「教興寺」について」『関西大学考古学研究室開設四拾周年記念考古学論叢』関西大学
吉岡氏は、寺池西方の二町四方の区画を古代の教興寺寺域に推定されている。

参考文献

瓦全般

・市本芳三　1995「第３章　日置荘遺跡出土瓦の分析」『日置荘遺跡』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター

・上田　睦　1987「藤井寺市及びその周辺の古代寺院（上)」『藤井寺の遺跡ガイドブック№２』藤井寺市教育委員会

縄文土器

・京都大学文学部博物館　1991『先史時代の北白川』

・嶋村友子　1987「八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅰ－恩智遺跡の調査－」『八尾市文化財調査報告14　昭和61年度国庫補助事業』八尾市教育委員会

・渟　斎　　1997「19.水越遺跡（95-582）の調査」『八尾市内遺跡平成８年度発掘調査報告書Ⅰ　八尾市文化財調査報告36　平成８年度国庫補助事業』八尾市教育委員会

図　　版

1・2区全景(西から)

3～6区全景(南西から)

7・8区全景(南から)

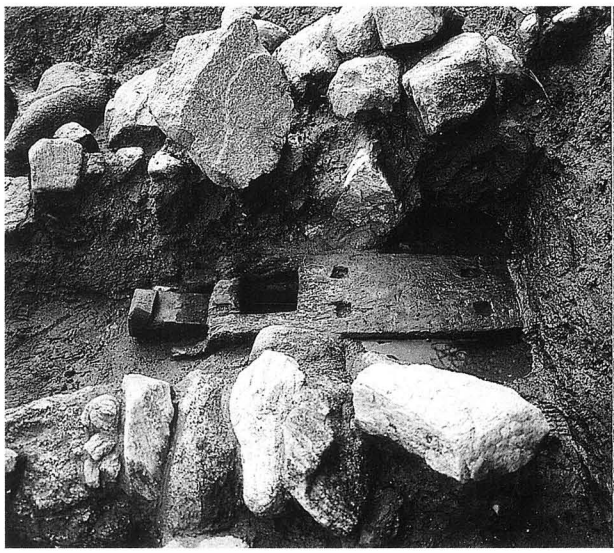
7区第1面(西から)

7区第2面(北西から)

9・10区第2面(南から)

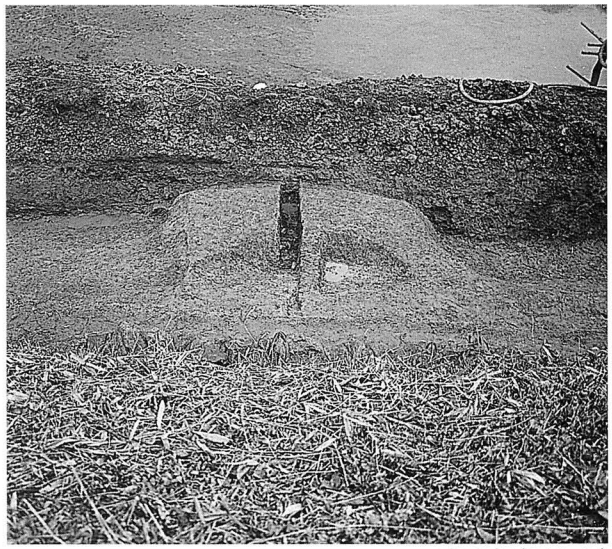
図版2　第1次調査

樋101全景（南から）



同上　木樋（東から）

同上　断ち割り（南から）



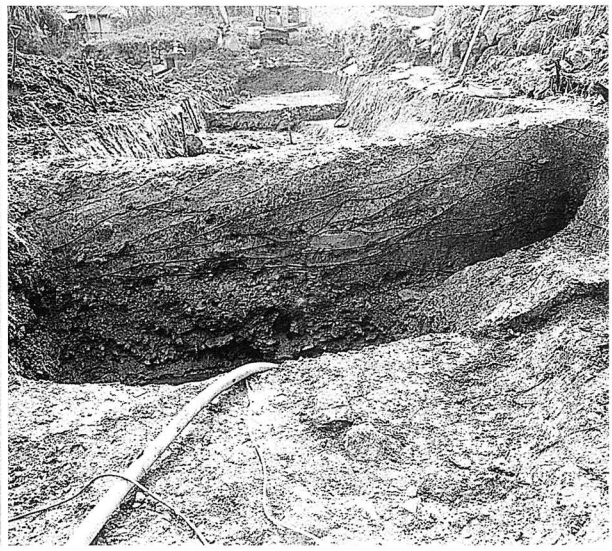
突出部（西から）

樋102全景（西から）

樋103全景（東から）

樋103全景（西から）

7・8区間畦（石組201上部）南壁（北から）

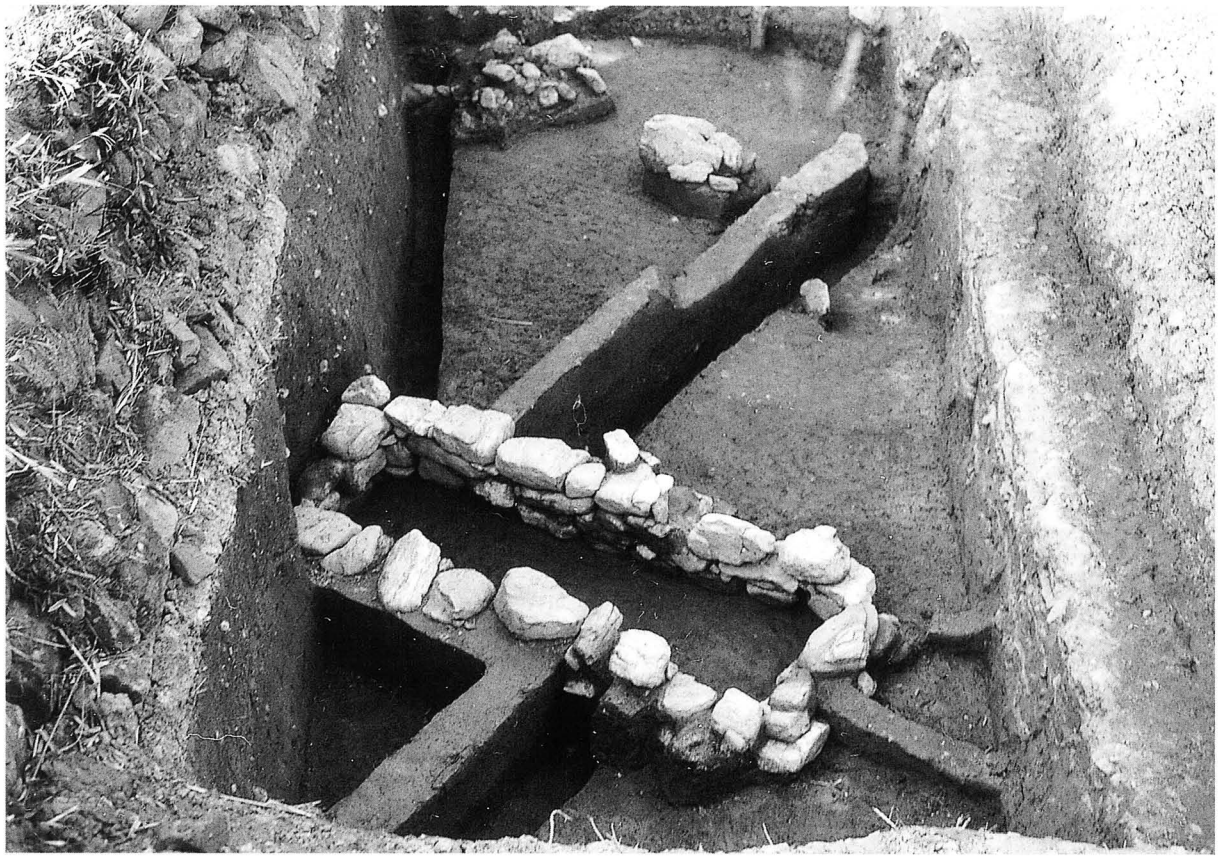


8・9区間畦南壁（北から）

石組201全景（東から）

同上（北から）

同上　蓋石除去状況（東から）



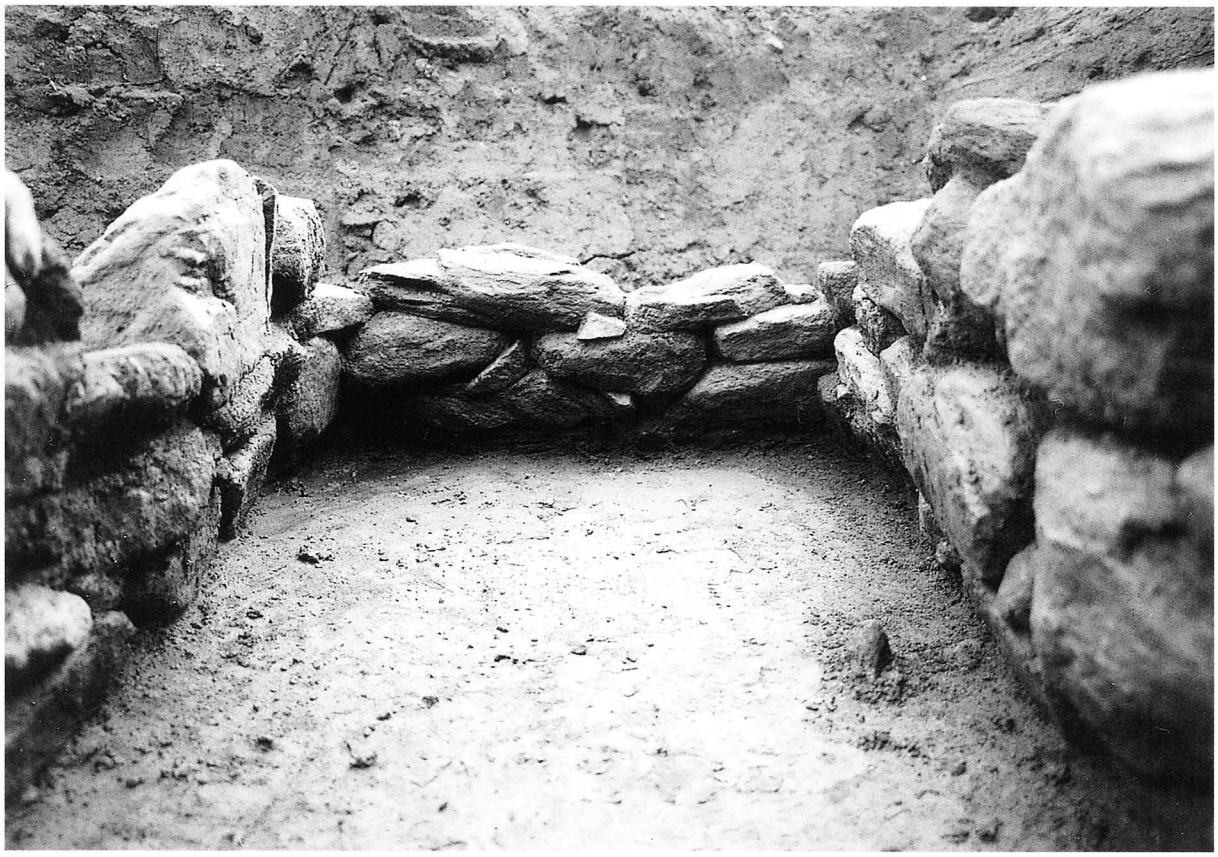
古墳全景（南から）

石室全景（南東から）

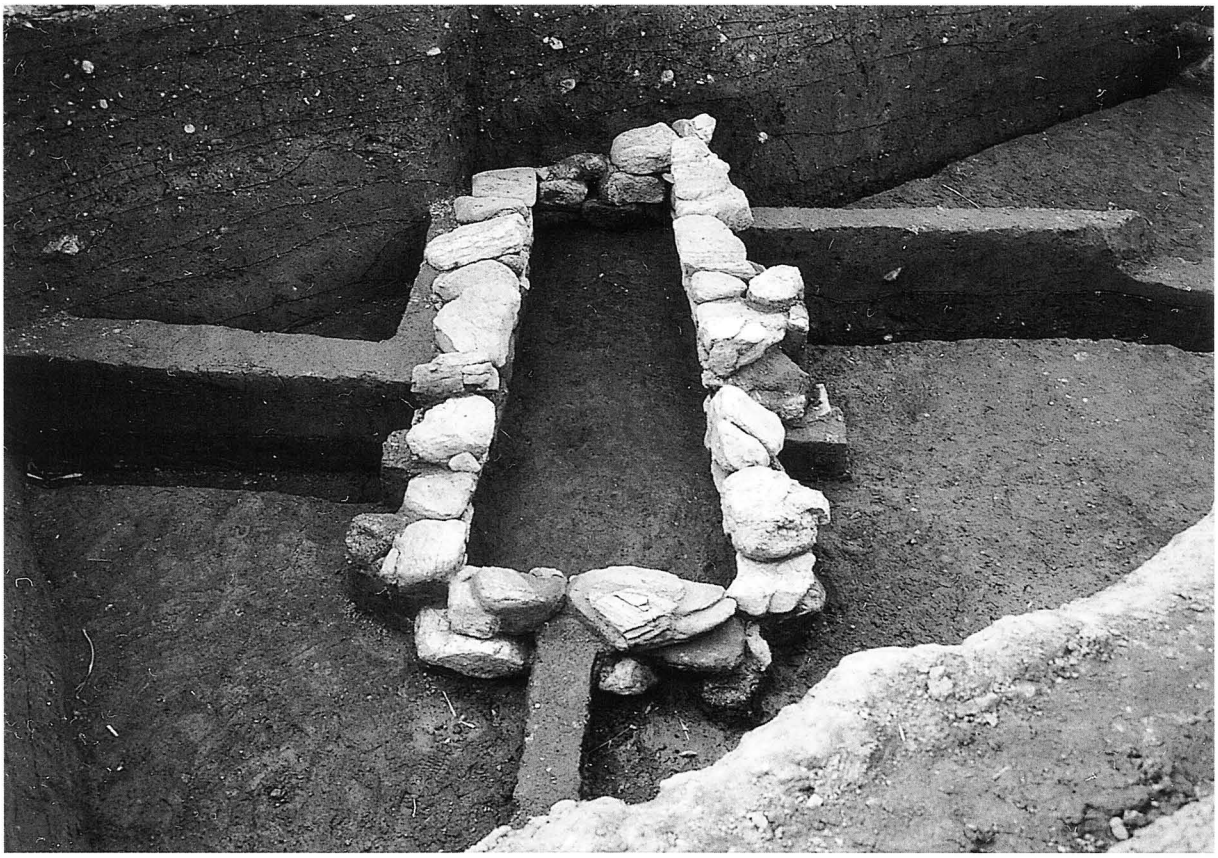
石室全景（北から）

同上（南から）

石室北小口（南東から）



石室南小口（北西から）



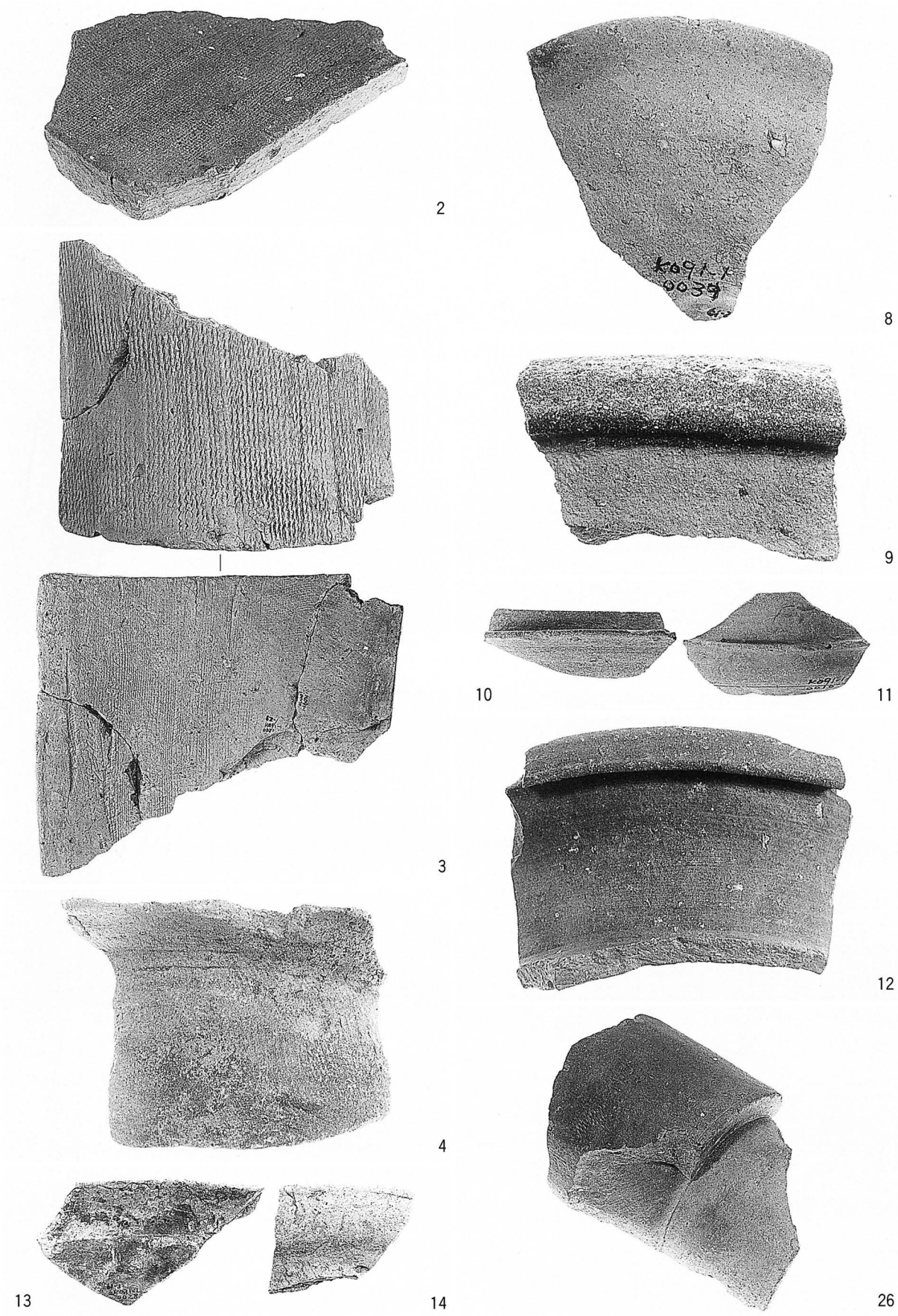
石室全景（南東から）

同上（北東から）

石室盛土西壁部分（東から）

古墳周溝部分（南東から）

図版10　第1次調査　出土遺物

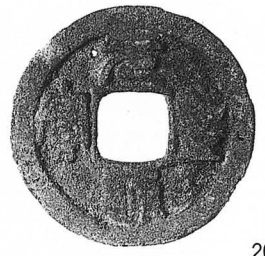


ＳＫ101（２）、樋101（３）、樋103（４）、第①層（８～14）、ＳＫ207(26)

図版11　第1次調査　出土遺物

18

19

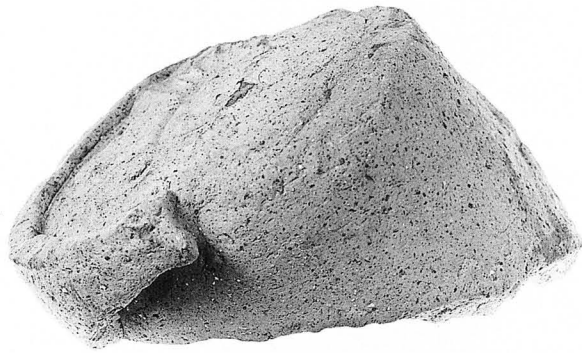


20

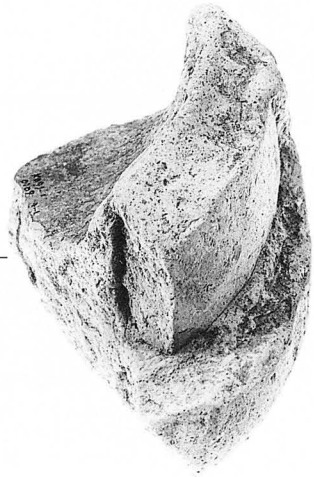
17

21

30



28

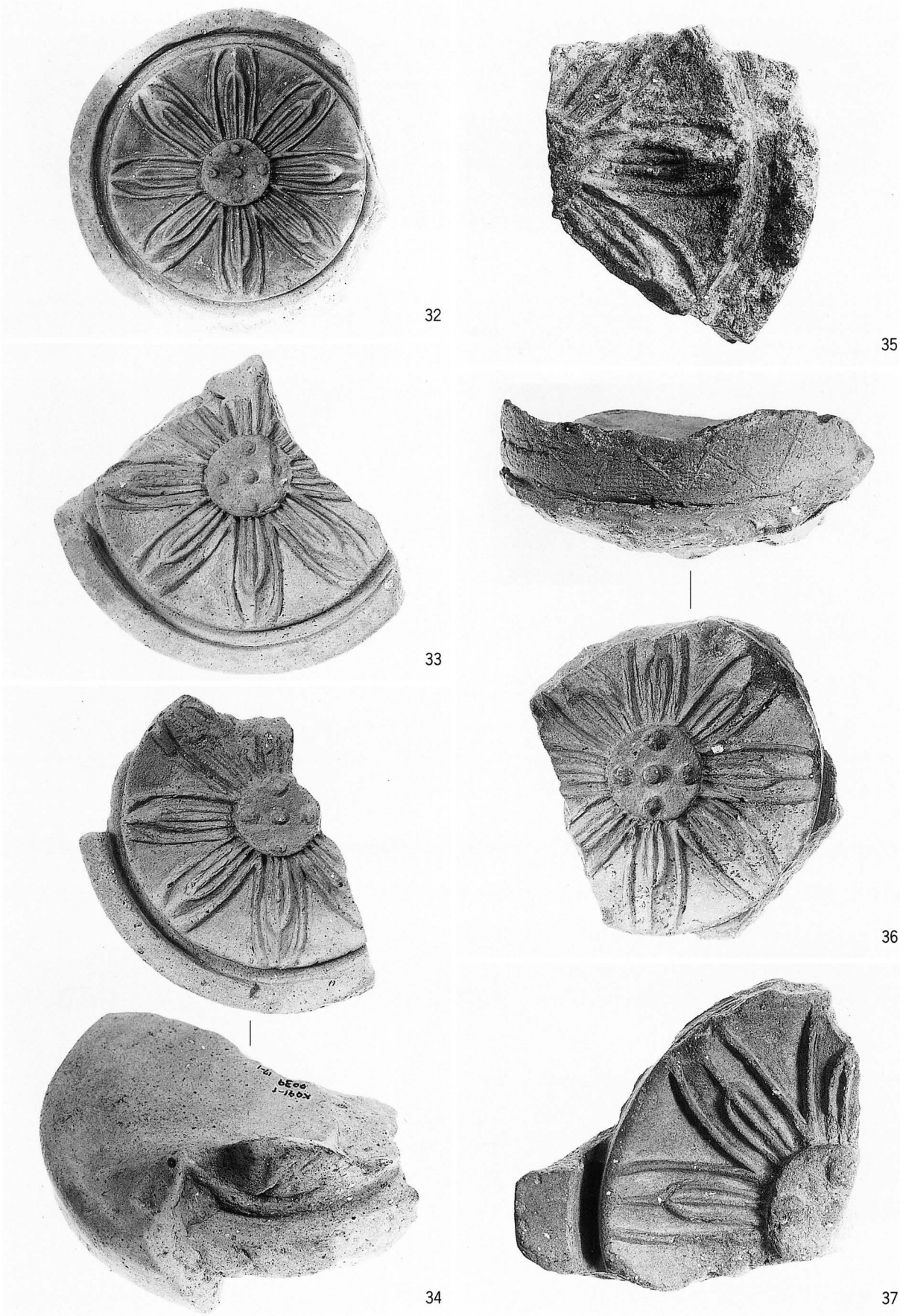


29

31

第①層(17～21・28～30)、第⑤層(31)

図版12　第1次調査　出土遺物



第①層(32～34・36・37)、第②層(35)

図版13　第1次調査　出土遺物

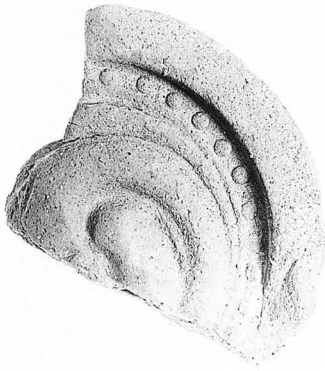
38

40

39

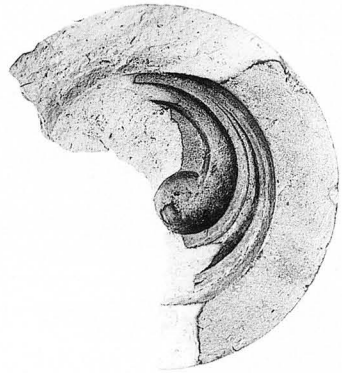
41

48



43

46



47

第①層(38・40・43・46～48)、樋102(39)、第⑤層(41)

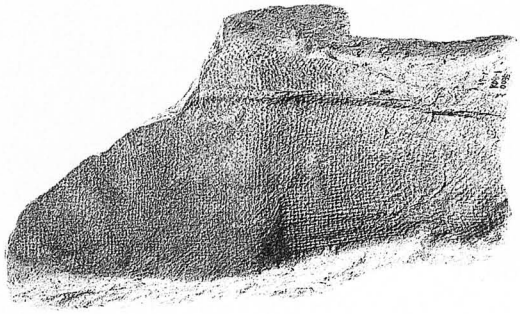
図版14　第1次調査　出土遺物

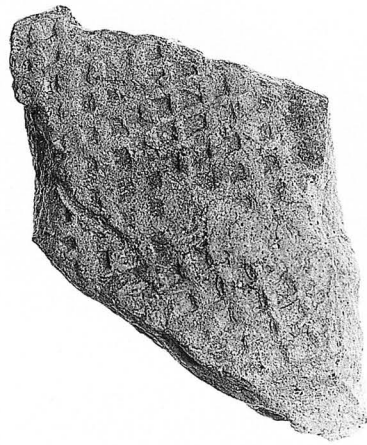
49

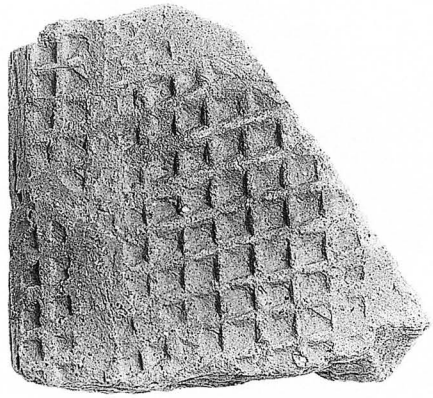
50

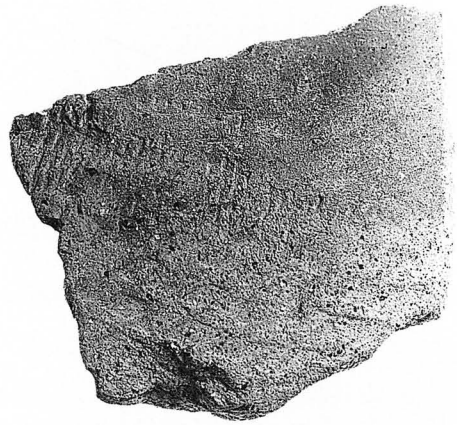
51

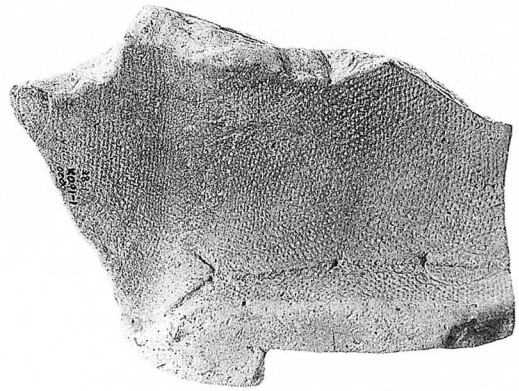
55


58


59

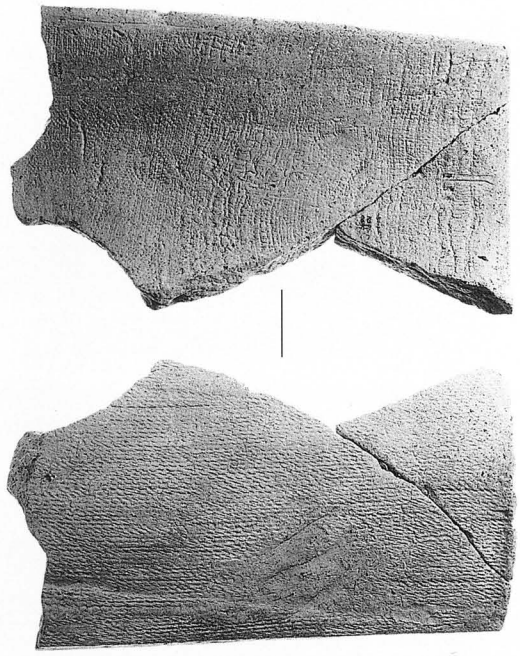

60


61

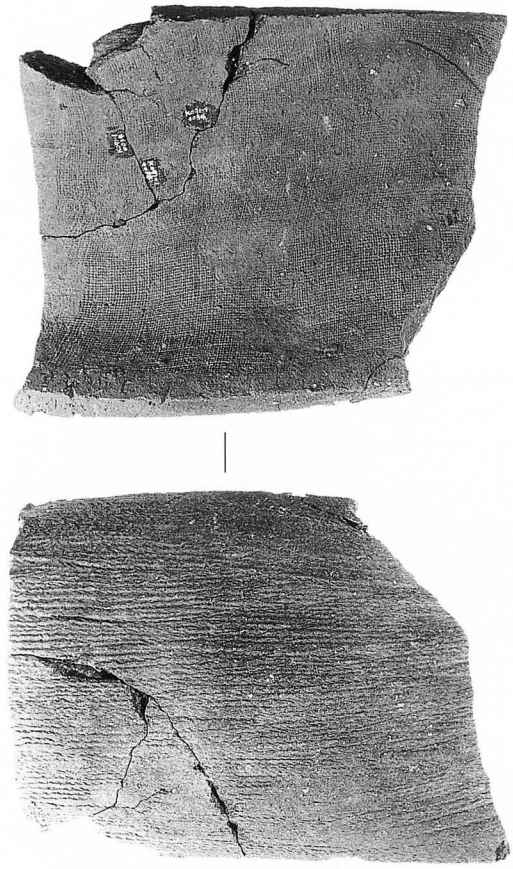

57

第①層(49・51・55・57・58～61)、突出部(50)

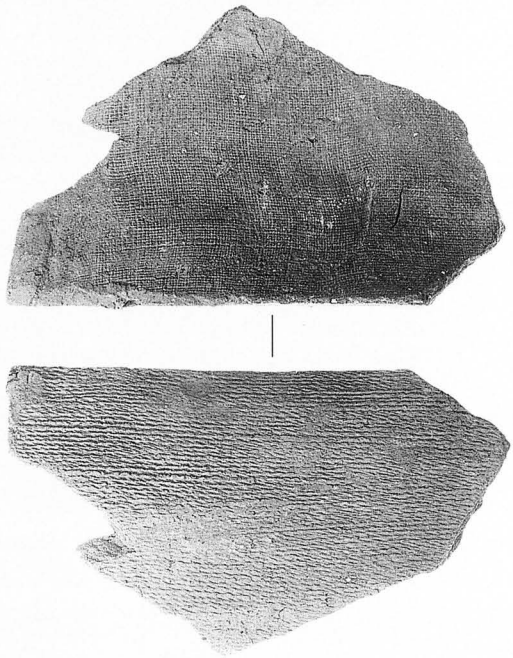
図版15　第1次調査　出土遺物



62



63



67

66

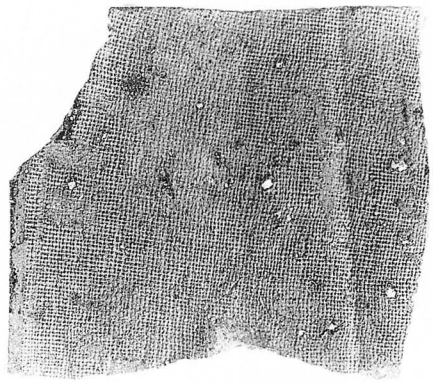
64

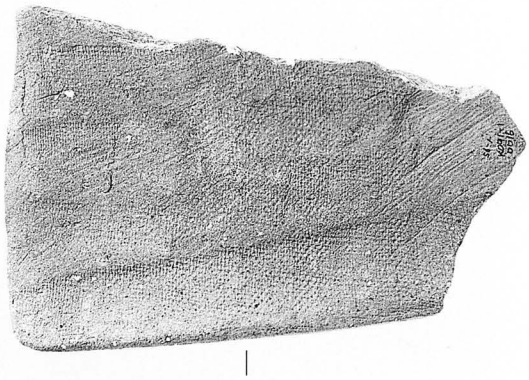
69

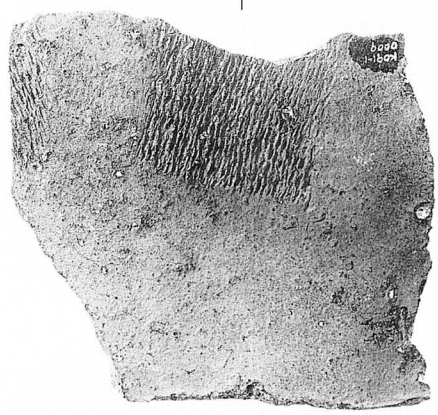
第①層

図版16　第1次調査　出土遺物

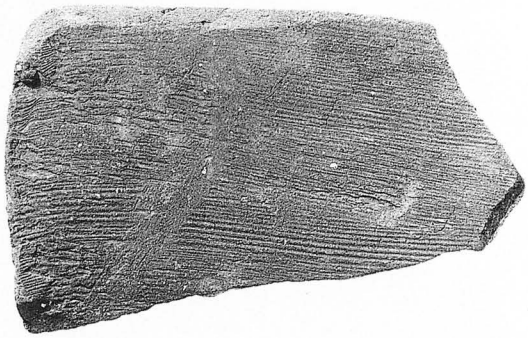
70



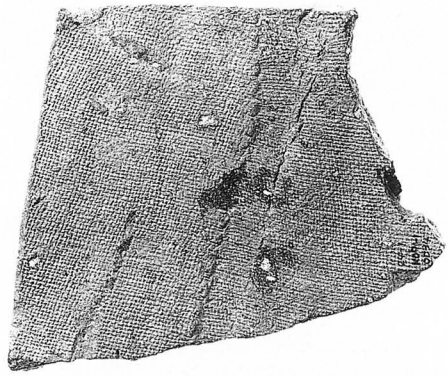




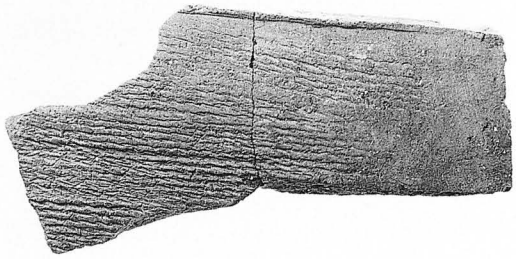
72



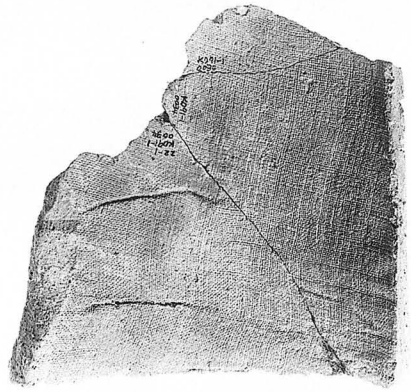
71



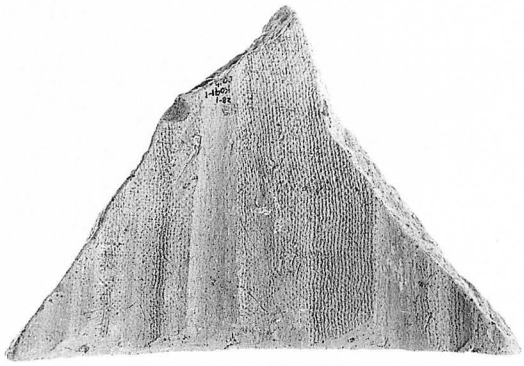
75



74



76



77

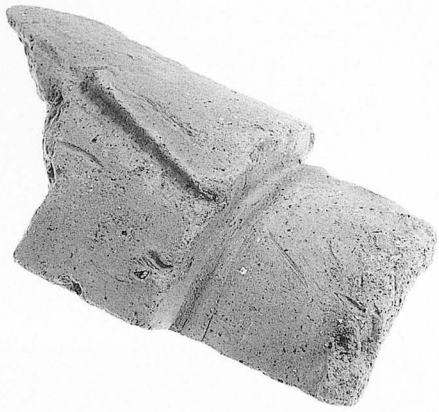
第①層

図版17 第1次調査 出土遺物

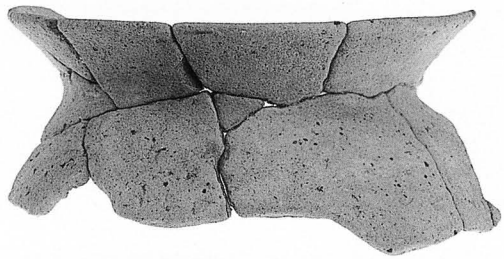
80

86

87



81

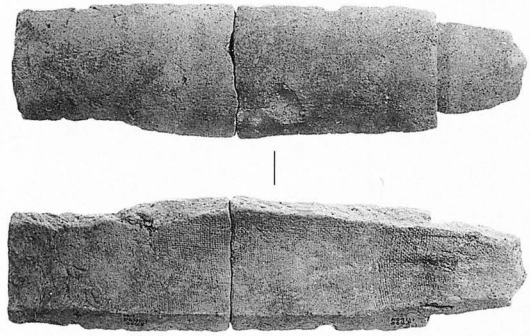


88

84

89

85



90

第⑤層(80・81・84・85)、古墳(86～90)

図版18　第2次調査

調査地全景（西から）

1・2区全景（西から）

1・2区全景（東から）

3区　SD1・2（東から）

ＮＲ１（西から）

ＮＲ１（北から）

ＮＲ２（北西から）

ＮＲ３（北東から）

ＮＲ２～３間（北西から）

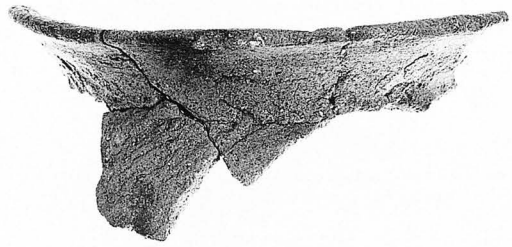
１区南壁（北から）

第⑬層上面土器出土状況（北から）

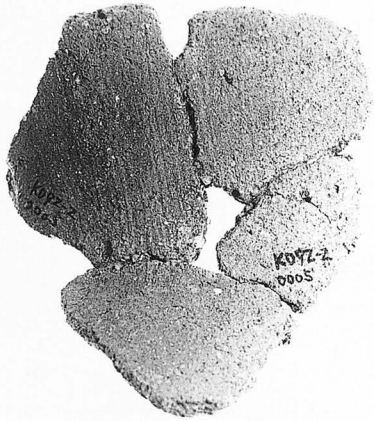
同上（東から）

図版22　第2次調査　出土遺物

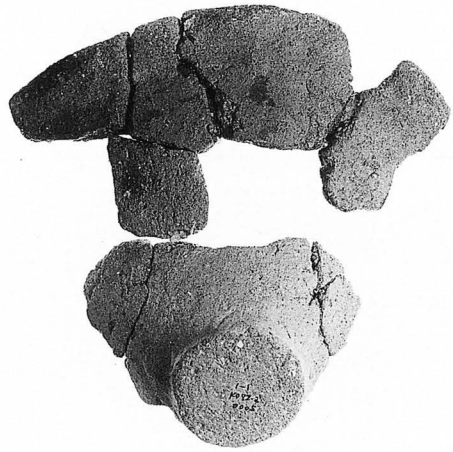
92



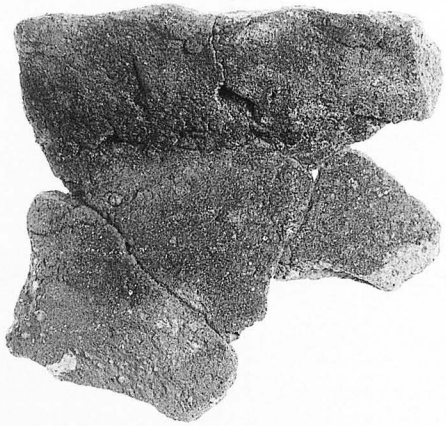
94



93



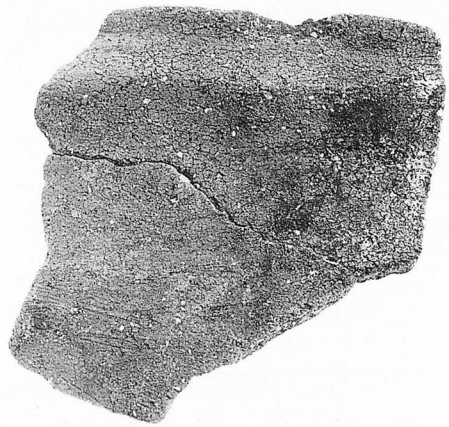
98



95

99

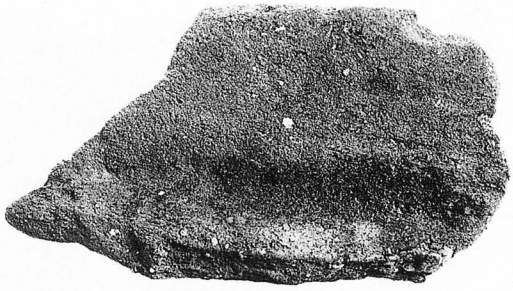
97



102

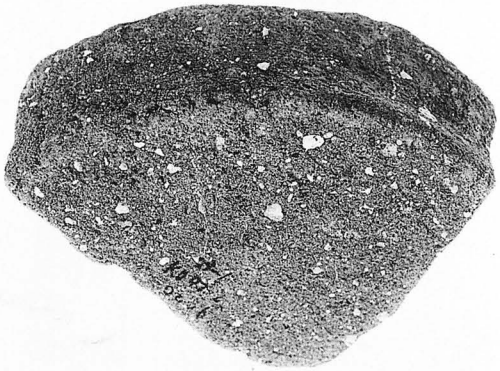
ＮＲ１(92)、第③層(93～95・97・98)、ＮＲ２(99・102)

図版23　第2次調査　出土遺物



101

103

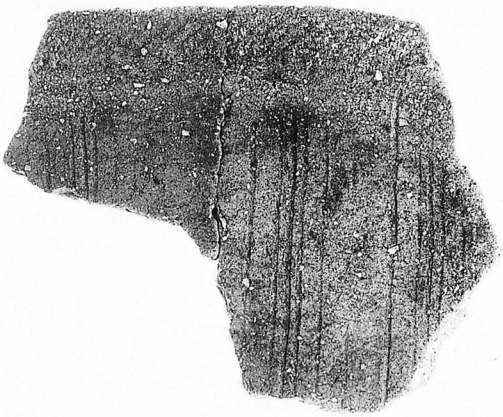


104

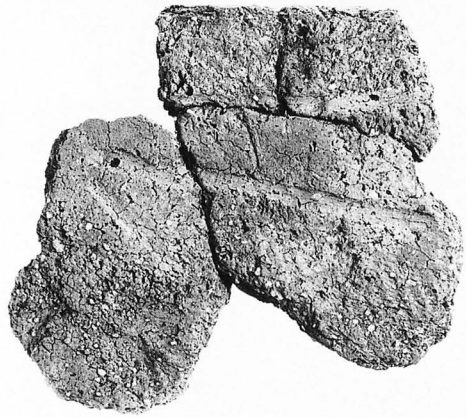
107

105

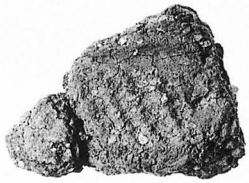
109



110

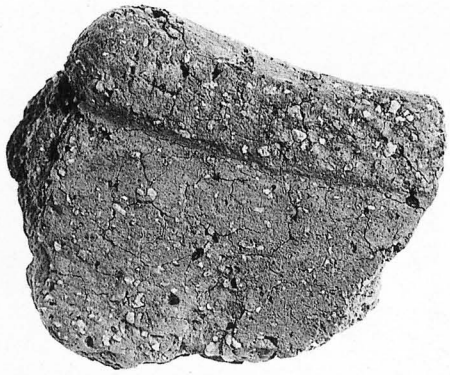


111

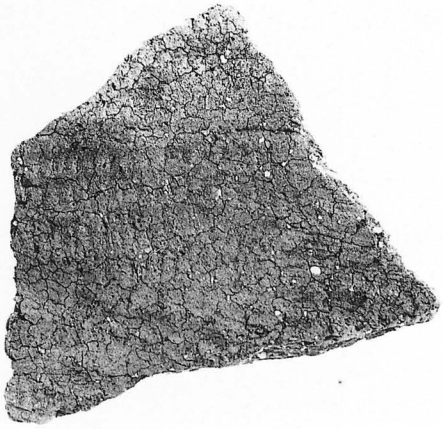


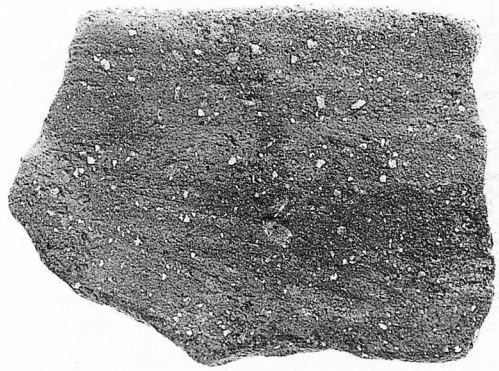
113

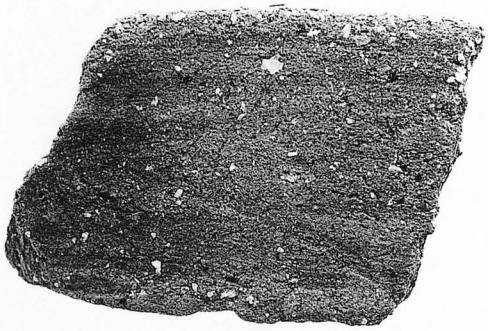
ＮＲ２(101・103・104・107)、ＮＲ３(105・109)、第⑧層(111)、第⑩層(110・113)


112

117

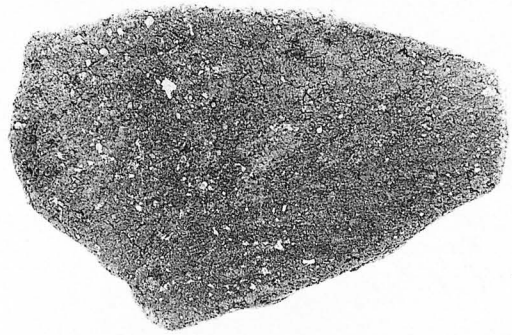

114


118


115

121

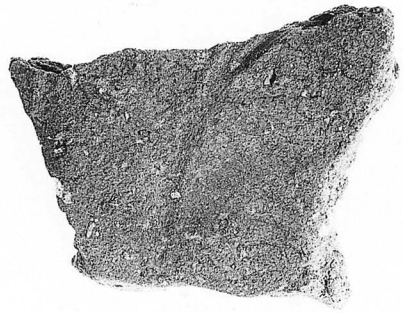
116


122

第⑨層(117・118・121)、第⑩層(112・114～116・122)

図版25　第2次調査　出土遺物

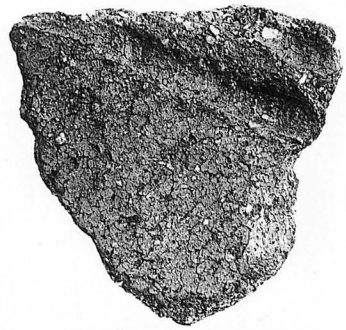
125



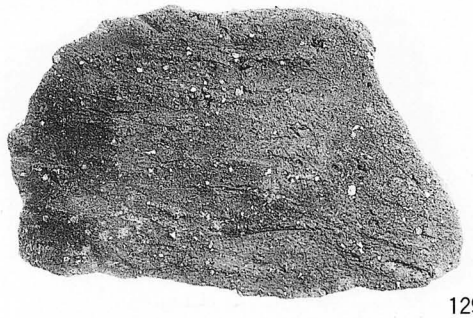
126

127

123



128



129

第⑩層(123・125)、第⑪層(126～129)

報告書抄録

ふりがな	きょうこうじあと
書名	教興寺跡〈第１次調査・第２次調査〉
副書名	財団法人八尾市文化財調査研究会報告72
巻次	
シリーズ名	財団法人八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	72
編著者名	坪田真一
編集機関	財団法人　八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581－0821　大阪府八尾市幸町４丁目58－２　TEL・FAX　0729－94－4700
発行年月日	西暦2002年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
きょうこうじあと 教興寺跡 (第１次調査)	おおさかふやおしきょうこうじ 大阪府八尾市教興寺６丁目	27212	19	135度38分 21秒	34度36分 54秒	19911216 ～ 19920124	約400	寺池改 修工事
きょうこうじあと 教興寺跡 (第２次調査)	おおさかふやおしきょうこうじ 大阪府八尾市教興寺６丁目	27212	19	135度38分 22秒	34度36分 52秒	19921130 ～ 19921222	約190	寺池改 修工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層		特記事項
教興寺跡 (第１次調査)	古墳	弥生時代中期～後期	竪穴式石室	土師器・須恵器	高安古墳群内において初の竪穴式石室を確認した
	寺院関連遺構	飛鳥～奈良時代	―	瓦・和同開珎	
	集落遺構	中世	土坑・ピット・石組	土師器・瓦器・瓦	
		近世	樋	瓦・陶磁器	
教興寺跡 (第２次調査)	集落遺構	縄文時代後期～晩期	包含層	縄文土器	縄文時代の集落域を確認した。
		古墳時代前期	溝	土師器	

教　興　寺　跡

〈第１次調査・第２次調査〉

財団法人八尾市文化財調査研究会報告72

発　行　　平成14年３月
編　集　　財団法人八尾市文化財調査研究会
〒581－0821
大阪府八尾市幸町４丁目58番地の２
TEL・FAX（0729）94－4700

印　刷　　㈱近畿印刷センター
表　紙　　レザック66　　＜260Kg＞
本　文　　書籍Ｌ　　＜ 70Kg＞
図　版　　マットアート　＜135Kg＞